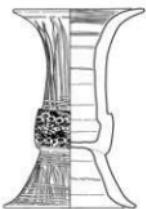


平城京左京四条六坊八坪
奈良町遺跡（HJG11次）
—令和2年度発掘調査報告書—



2022

公益財団法人 元興寺文化財研究所

平城京左京四条六坊八坪
奈良町遺跡（HJG11次）
—令和2年度発掘調査報告書—

2022

公益財団法人 元興寺文化財研究所

序

このたび、平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡の発掘調査報告書が完成いたしました。古代都市平城京は和銅3年（710）の遷都、延暦3年（784）の長岡京遷都に伴う廃都を経て、平安時代以降には古代都市から中世都市への変貌を遂げます。そして度重なる兵火を経験し、現在の奈良町へと姿を変えています。

今回の発掘調査では、主に中世から近世の掘立柱建物や井戸などのさまざまな遺構が見つかり、土器や陶磁器を中心とした多くの遺物も出土しました。その調査状況からは、本調査地周辺では少なくとも平安時代には土地利用が行わはじめたことが分かりました。南側に隣接する率川神社は式内社であることから、周辺の歴史的環境を考えていく上で重要な成果と思われます。

一方、多くの遺構・遺物が確認されるようになるのは室町時代であり、この時期には人々が長期的に生活していたことが窺われ、多くの鉄滓や動物遺体のほか、金が付着した坩堝なども出土していることから、多様な生産活動が行われていたようです。そして、江戸時代中ごろには遺構が少なくなり、次第に生活範囲の縁辺となっていたものと思われます。江戸時代の史料では、本調査地に当たる上三条町では鍛冶作業が行われていたことが判明しており、これらの生産活動が室町時代に遡るものと思われます。

昨今、世間の風潮は文化財を観光資源・文化資源として活用してゆくべし、という方向へ流れていると聞きます。もちろん、活用して初めてその価値が生きるのが文化財であることは間違いありません。しかし、文化財を生かすためには、地道な調査研究がます必要であることも事実です。調査研究と活用、この二項は今後も車の両輪として調和してゆくことが望まれます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際して多大なるご協力をいただきました開発事業者様、調整・指導いただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ、関係各位に深く感謝の意を表したいと思います。

令和4年3月31日

公益財團法人 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例言

1. 本書は、平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡において、店舗建設に先立ち実施した発掘調査(HJG11次)の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県奈良市上三条町13番1に所在し、開発面積1,468m²のうち調査対象面積は360m²である。
3. 調査は、株式会社みずほ銀行から委任された清水建設株式会社関西支店より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和2年5月15日～同年7月1日を現地調査、同年7月2日～令和4年3月31日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亞聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、武田浩子（前同）、吉田芽依（大阪市立大学大学院）、大崎拳斗（天理大学）、乾弥菜子・小林友佳・三井淳（奈良大学）、小久保茉優（立命館大学）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点の設置は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は、安西工業株式会社が担当した。
7. 遺構写真撮影は佐藤が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当した。
8. 出土遺物の実測・斬書等の整理作業は仲井光代、武田浩子、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中に触れる分類、年代記はこれらに依拠している。

石井啓 2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市教育委員会

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

川口宏海 1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会

木戸雅寿 1995「信楽」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

木戸雅寿 1995「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

佐藤亞聖 1996「大和における瓦質土器の展開と両期」『中近世土器の基礎研究』XII 日本中世土器研究会

佐藤亞聖 2016「大和における瓦質土器擂鉢の編年」

『元興寺文化財研究所研究報告 2015 水野正好所長追悼論文集』公益財団法人元興寺文化財研究所

鈴木裕子 2015「出土資料からみた朝鮮陶磁 16世紀以降を中心にして」『根津美術館紀要 此君』第6号 根津美術館

瀬戸哲也 2015「14・15世紀の沖縄出土中國青磁について」『貿易陶磁研究』No.35 日本貿易陶磁研究会

中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26 日本中世土器研究会

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第559次調査）出土資料一』

平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

藤沢良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

向井瓦 2003『タイ産黒褐釉四耳壺の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会

森田勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所

山崎信二 2008『近世瓦の研究』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

山本信夫 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編一』太宰府市教育委員会

10. 発掘調査および整理報告書作成にかかる費用については、株式会社みずほ銀行が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第1・2章を江浦洋（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第3・5章を佐藤・江浦・瀬戸哲也（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第4章第1節を三谷智広（パレオ・ラボ）、第4章第2節を山口繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第4章第3節を植田直見（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。本書の編集は瀬戸・江浦が行い、これを芝が補佐した。
13. 発掘調査および報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を戴いた。記して感謝申し上げたい。
　　狭川真一、續伸一郎
　　奈良市教育委員会、奈良県教育委員会（敬称略、順不同）

目次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（調査日誌抄）	2
第2章 周辺環境と既往の調査	4
第1節 遺跡の立地と環境	4
第2節 周辺の既往調査	5
第3章 調査の成果	7
第1節 基本層序と整地土出土遺物	7
第1項 基本層序	7
第2項 整地土出土遺物	7
第2節 14世紀以前の遺構と遺物	11
第1項 遺構	11
第2項 遺物	13
第3節 15世紀～17世紀前半の遺構と遺物	16
第1項 遺構	16
第2項 遺物	23
第4節 17世紀後半～18世紀の遺構と遺物	38
第1項 遺構	38
第2項 遺物	41
第5節 表土出土遺物	41
第4章 自然科学分析	43
第1節 平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡出土の動物遺体	43
第2節 鰐羽口・咲塙の自然科学分析	47
第3節 漆付不明製品の自然科学分析	52
第5章 調査のまとめ	56
第1節 遺構の変遷	56
第2節 手工業生産関連遺物の出土について	59

図版目次

図 1	調査地位置図 (S=1/25,000)	4
図 2	今回の調査地と既往の調査地 (『平城京条坊総合地図』を変改) (S=1/2,000)	5
図 3	全体平面図 (S=1/200)	8
図 4	壁面上層断面図 (1) (S=1/80)	9
図 5	壁面上層断面図 (2) (S=1/80)	10
図 6	整地土出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	11
図 7	SB120 平面図 (S=1/40)	12
図 8	SD040 土層断面図 (S=1/40)	12
図 9	SK090 平面・土層断面図 (S=1/40)	13
図 10	SD040 出土遺物実測図 (S=1/3)	14
図 11	SK063・090 出土遺物実測図 (S=1/3)	15
図 12	SB135 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	16
図 13	SB136 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	17
図 14	SD060 土層断面図 (平面 S=1/200・断面 S=1/80)	19
図 15	SE105 平面・土層断面図 (S=1/40)	20
図 16	SK005 平面・土層断面図 (S=1/40)	21
図 17	SK013 平面・土層断面図 (S=1/40)	21
図 18	SK068 平面・土層断面図 (S=1/40)	22
図 19	SK100 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	22
図 20	SK110 平面・土層断面図 (S=1/40)	23
図 21	SB135・136 出土遺物実測図 (S=1/3)	24
図 22	SPO39 出土遺物実測図 (S=1/3)	24
図 23	SD060 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	25
図 24	SD060 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	27
図 25	SD060 出土遺物実測図 (3) (S=1/3・1/2)	28
図 26	SD060 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	29
図 27	SD060 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)	30
図 28	SD071 出土遺物実測図 (S=1/3)	30
図 29	SE105 出土遺物実測図 (1) (S=1/3・1/2)	31
図 30	SE105 出土遺物実測図 (2) (S=1/3・1/4)	33
図 31	SE105 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	34
図 32	SE105 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)	35
図 33	SK013・068・092 出土遺物実測図 (S=1/3)	36
図 34	SK100・110 出土遺物実測図 (S=1/3)	37

図 35 SK020 平面・土層断面図 (S=1/40)	39
図 36 SK050 平面・土層断面図 (S=1/40)	40
図 37 SK070 平面・土層断面図 (S=1/40)	40
図 38 SK050 出土遺物実測図 (S=1/3)	41
図 39 表土出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)	42
図 40 出土動物遺体	46
図 41 鞘羽口	49
図 42 鞘羽口元素マップ（上段より内側、外側、端面、左より Fe、Cu、Ag、Au）.....	49
図 43 埋壙（1～3:XRF箇所）	50
図 44 埋壙元素マップ（上段より内側、外側、左より Fe、Cu、Ag、Au）	50
図 45 金色粒の顕微鏡観察像（左より観察箇所図 43-1、図 43-2）	50
図 46 金色粒のXRFスペクトル（分析箇所図 43-1）	51
図 47 金色粒のXRFスペクトル（分析箇所図 43-2）	51
図 48 埋壙内側 Cu 付着箇所のXRFスペクトル（分析箇所図 43-3）	51
図 49 微小部観察箇所（白枠部分 A～D）	52
図 50 図 53に示した破片の赤外吸収スペクトル	53
図 51 実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-A 右：図 49-B）	54
図 52 実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-C 右：図 49-D）	54
図 53 実体顕微鏡による（上図左：纖維状物質有、上図右纖維状物質無）微小部観察像	54
図 54 顕微鏡による断面観察像（全体）（左：透過、右：落射）	55
図 55 顕微鏡による断面観察像（左上：図 54-①、右上：図 54-②、左下：図 54-③、右下：図 54-④）	55
図 56 顕微鏡による断面観察像（左：全体、右：纖維状物質の断面の拡大（矢印部分））	55
図 57 今回の調査地と周辺の古墳	56
図 58 遺構変遷図	57
図 59 検出遺構配置略図 (S=1/200)	63

表目次

表1 出土動物遺体一覧	45
表2～8 報告遺物一覧 (1)～(7)	64～70
表9～14 検出遺構および出土遺物一覧 (1)～(6)	71～76

写真図版目次

- 図版 1 調査前風景
西区全景（東から）
- 図版 2 東区全景（西から）
東区全景（東から）
- 図版 3 西区南壁土層断面（北から）
鉄刀（15）出土状況（南から）
- 図版 4 SD040 完掘状況（東から）
SK090 土層断面（南から）
- 図版 5 SK090 完掘状況（東から）
SB135c 土層断面（西から）
- 図版 6 SB136a 土層断面（南から）
SB136b 土層断面（南から）
- 図版 7 SB136c 磐石検出状況（南東から）
SB136d 磐石検出状況（北から）
- 図版 8 SD060 土層断面 a-a'（東から）
SD060 土層断面 b-b'（東から）
- 図版 9 SE105 土層断面（南から）
SE105 完掘状況（西から）
- 図版 10 SK005 土層断面（南から）
SK013 土層断面（南から）
- 図版 11 SK005・013 完掘状況（東から）
SK068 完掘状況（南から）
- 図版 12 SK100 土層断面（西から）
SK110 土層断面（北から）
- 図版 13 SK020 完掘状況（南から）
SK050 土層断面（南西から）
- 図版 14 SK050 丸太材出土状況（北西から）
SK050 完掘状況（東から）
- 図版 15 SK050 切り株除去後（南から）
SK070 完掘状況（南から）
- 図版 16 SX080、6 層出土遺物
- 図版 17 66 層、SD040、SK063 出土遺物
- 図版 18 SK090 出土遺物
- 図版 19 SK090、SB135・136、SP039、SD060 出土遺物
- 図版 20 ~ 22 SD060 出土遺物
- 図版 23 SD060・071、SE105 出土遺物
- 図版 24 ~ 27 SE105 出土遺物
- 図版 28 SE105、SK068・092 出土遺物
- 図版 29 SK100 出土遺物
- 図版 30 SK100・110・050 出土遺物
- 図版 31 SK050、表土出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査体制

第1節 調査に至る経緯

令和元年12月26日付けで株式会社みずほ銀行より、店舗新築に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これを受けて奈良県は、当地が平城京の範囲であり、また中世の都市である奈良町遺跡の範囲に含まれていることから、発掘調査が必要との判断を行い、令和2年2月20日付文保第3801号において発掘調査の実施が指示された。これを受けて奈良市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始したが、工期を勘査した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することになった。

同年3月4日に奈良県より発掘調査の依頼（文保第328号-3）を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年4月28日、平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡発掘調査業務に係る委託契約を、株式会社みずほ銀行より委任された清水建設株式会社関西支店と締結、同年5月11日に発掘調査届出を提出のうえ、同年5月15日より現地調査を開始した。

現地調査は同年7月1日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、株式会社みずほ銀行、清水建設株式会社の全面的な支援・協力があった。また、奈良県文化財保存課、奈良市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

第2節 調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 辻村泰善（兼務、令和2年7月まで）

田邊征夫（令和2年7月から）

事務局長 江島和哉

総合文化財センター長 塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー 金山正子

主務 佐藤亜聖（現地調査担当）

研究員 村田裕介

研究員 坂本 俊

現地作業員：安西工業株式会社

測量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス
(整理報告)

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 田邊征夫

事務局長 江島和哉

総合文化財センター長 塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー 金山正子

研究員 村田裕介

研究員 坂本俊

研究員 濑戸哲也 (令和3年6月から) (整理報告担当)

技師 江浦洋 (令和3年6月から) (整理報告担当)

第3節 調査の経過（調査日誌抄）

令和2年

- 5月18日（月）重機、機材搬入。奈良市教育委員会立会のもと、調査区の設定および重機掘削を行う。
- 5月25日（月）重機掘削と並行し、遺構掘削作業開始。SK020から唐津焼などが出土し、近世の遺構と認識。
- 6月1日（月）SK050を掘削。加工痕のある大型の木の根を検出。SD060は部分的に南側に湾曲していることを確認。
- 6月2日（火）調査区南半で東西方向の柱列を検出する。全体図を作成。
- 6月3日（水）SK050の調査を進め、切り株の下部に大量の礫を埋置していることが判明。
- 6月4日（木）西半部全景写真撮影。奈良県文化財保存課宇野隆志氏、奈良市教育委員会原田香織氏・鐘方正樹氏・中島和彦氏来訪。
- 6月5日（金）土層断面図作成。
- 6月8日（月）SK050切り株の取り上げ、下層の礫群の実測、写真撮影、取り上げ。調査区東半部の重機掘削開始。
- 6月10日（水）SD060の掘削を行う。多くの遺物が出土、輸入陶磁器が目立つ。東半部ではベースが整地土であることが判明。
- 6月11日（木）雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
- 6月17日（水）SD060完掘。SK090掘削、縦羽口・鉄滓が目立つ。
- 6月18日（木）雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
- 6月19日（金）雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
- 6月22日（月）SB136を構成する柱穴の底面から扁平な石を検出する。
- 6月24日（水）調査区中央部で方形掘方の柱穴列を検出。梁行二間、桁行一間以上の掘立柱建物でSB120とする。

- 6月25日（木） 東半部全景写真撮影。全体図作成。調査区南東の整地土を掘削除去。
- 6月26日（金） 整地土除去後の第2遺構面を掘削調査。平面図作成。写真撮影。奈良市教育委員会秋山成人氏来訪、完了確認。
- 6月27日（土） 壁面上土層図を作成。
- 6月29日（月） 埋め戻し作業開始。SK050 出土木材のサンプル採取。
- 7月1日（水） 埋め戻し完了、機材撤収、調査終了。

第2章 周辺環境と既往の調査

第1節 遺跡の立地と環境

調査地は奈良市上三条町 13 番 1 に所在する。当該地は奈良盆地の北東に位置し、平城京の条坊復元では、外京域で左京四条六坊八坪にあたる。

地形を概観すると、調査地は佐保田橢曲が南東から北西にのびるライン上に位置し、低位段丘面と分類されている（産総研 2014）。また、土地分類基本調査における地形分類図においては、「緩傾斜扇状地」に分類されている（奈良県 1983）。

また、調査地は興福寺がのる北側の台地と元興寺がのる南側の台地に挟まれた鞍部の出口部分に位置し、東側から菩提川（率川）が流れ込み、率川神社の南辺を西流していた箇所にあたる。

なお、佐保田橢曲が形成する段丘崖については中世都市奈良の市街地西辺に一致することが明らかにされている（佐藤 2005）。このことは、奈良の都市景観と密接に関係する地質条件であり、調査地は佐保田橢曲のライン上に位置しており、縁辺部における土地利用を考える上においても重要な位置を占めている。

また、調査地は巨視的にみるといわゆる能登川扇状地に位置し、当該扇状地では古墳時代を通して集落や古墳が検出されており、考古地理学的視点による検討も行われている（安井 2007）。



図 1 調査地位置図 (S=1/25,000)

第2節 周辺の既往調査

既往の調査では、調査地東側のやすらぎの道を挟んだ場所で行われた奈良市 86-19 次調査で直径約 10 m の円形の墳丘の一部が検出され、率川古墳という名称が与えられている。この調査では上層遺構の検出により、9~11世紀後半までの間に古墳が削平されたことが明らかにされており、奈良時代には墳丘が残されていたとされる。このほか、北側には坂上山古墳（伝開化天皇陵）の東側で検出された漢国神社・南東古墳があり、少し離れるが南東でも脇戸古墳などの埋没古墳の存在が確認されている（鐘方 2009）。そのほか、西側の奈良市 251 次調査での奈良時代以前の流路が検出され、埴輪片が出土することから周辺に古墳が存在していたことが示唆されている（奈良市 1993）。

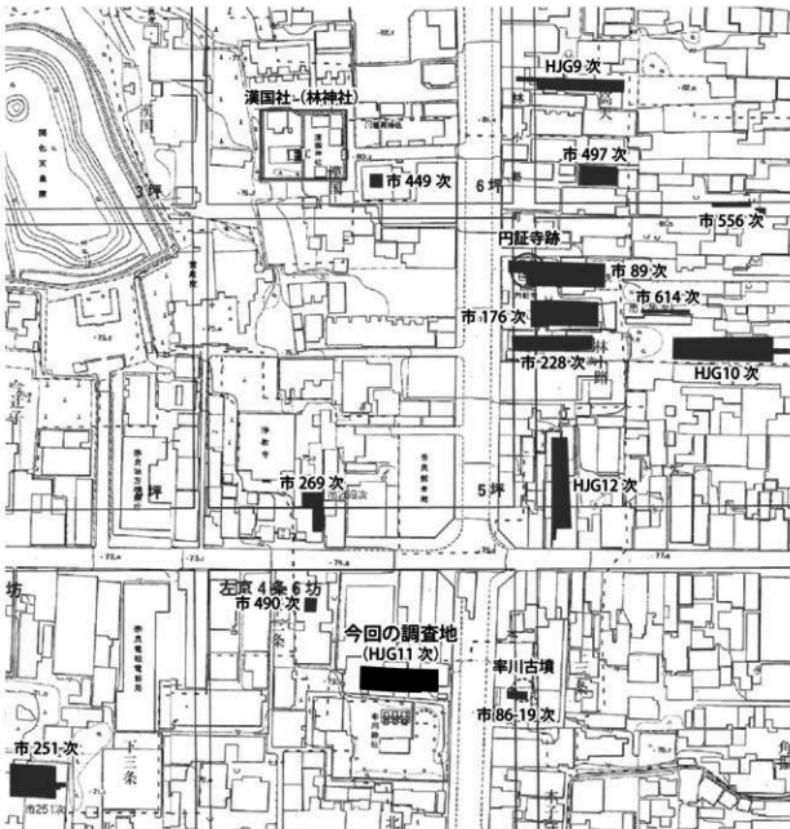


図2 今回の調査地と既往の調査地（『平城京条坊総合地図』を改変）（S=1/2,000）

奈良時代の遺構については、散発的に検出例があるのみである。奈良市 251 次調査では柱根が残る柱穴（奈良市 1993）、奈良市 176 次調査では井戸（奈良市 1990）、奈良市 228 次調査では土坑（奈良市 1992）などが検出されている。

先に掲げた率川古墳が検出された奈良市 86-19 次調査地は条坊復元図では六坊坊間路に該当する場所であったが、遷都後も古墳が削平されることなく残っていたことが指摘されており、考古学的には当該地には条坊道路は存在しなかったとされる（鐘方 2009）。東六坊における条坊道路に関しては、地上に残る遺存地割と一致しないことから西側にずれていることが指摘されており（西崎 1985）、奈良時代の遺構が希薄であることと相まって、いまだ結論をみていない。

一方、平安時代にはいると遺構検出件数が増加し、中世都市奈良の形成時期に重なる 11 世紀後半から末葉にかけての遺構は飛躍的に増加する。

調査地南側に隣接する率川神社は、「延喜式神名帳」に「率川坐大神神御子神社 三座」と記される式内社である。神社は推古天皇元年（593）2 月 3 日、大三輪白堤が勅命により奉斎したと伝わり、文德天皇仁寿 2 年（852）11 月 9 日に從五位下を授けられ、神封 6 戸（左京 4 戸、丹波国 2 戸）を与えられている。治承 4 年（1180）12 月、平重衡の乱によって社殿が消失している（『玉葉』）。中世以降は春日若宮神官によって管理され、興福寺との関係が強かったとされる（奈良市 1985）。率川神社は平城京遷都以前から当地に所在したと考えられる神社であり、周辺の歴史的環境を考えるうえで重要な存在である。近世の地誌である『奈良坊目拙解』には当社の本地として子守町南西部、率川西畔に蜻葉師堂（川崎寺）があり、興福寺宝蔵院支配にあったと記す。

また、『奈良坊目拙解』上三条町の項には、不開門郷・南円堂郷として上三条が記載されている。東辺は現在のやすらぎの道に面しているが、これについては東六坊坊間路との関係が推定されている。『奈良坊目拙解』では「自_辻_至本子守町_小路ノ上」を「金房辻子」と呼び、その名の由来を刀鍛冶金房政治が西側南門限に居住していたことに求めている。また、同じく近世地誌である『奈良暦』においても、上三条町に隣接する本子守町に「与十郎」、子守北向町に「権三郎」「善左衛門」という刀鍛冶が記載されるが、同書にみられる奈良の刀鍛冶が、ほぼ当地に限定されていることは注意を要する。今回の調査では当地一帯が継続して鍛冶関連作業を行う場であったことが判明しており、『奈良坊目拙解』の記述との関係が注目される。

〔参考文献〕

- 鍾方正樹 2009 「率川古墳と外京条坊および出土埴輪について」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 18（2006）年度 奈良市教育委員会
- 佐藤聖垂 2005 「中世都市奈良の成立と変容」『中世の都市と寺院』高志書院
- 独立行政法人産業技術総合研究所 2014 「平成 25 年度『活断層の補完調査』成果報告書奈良盆地東縫断帯」
- 奈良県（企画部開発調整課） 1983 「土地分類基本調査 奈良、大阪東北部、大阪東南部」
- 奈良県（企画部開発調整課） 1983 「土地分類基本調査 桜井」
- 奈良市 1985 「奈良市史 社守編」
- 奈良市教育委員会 1990 「平城京左京 三条六坊十二坪 の調査 第 176 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』
- 奈良市教育委員会 1992 「平城京左京三条六坊十二坪の調査 第 228 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』
- 奈良市教育委員会 1993 「平城京左京四条六坊一坪の調査 第 251 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 4 年度』
- 奈良市教育委員会 2003 「平城京左京三条六坊六坪・奈良町遺跡の調査第 449 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 12 年度』
- 西崎卓哉 1985 「平城京外京の地割計画寸法」『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1985』奈良市教育委員会
- 西村嘸月 1687 「奈良暦」（奈良市史編集審議会 1963 「奈良市史会報 付録」）
- 村井勝九郎（古道） 1735 「奈良坊目拙解」（奈良市史編集審議会 1963 「奈良市史会報 付録」）
- 安井宣也 2007 「能登川扇状地における古墳時代の開発史の検討～集落遺跡の発掘調査成果や周辺の古墳の様相をもとにして～」『ヤマトの開発史（1）』（奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 vol.17』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と整地土出土遺物

第1項 基本層序（図3～5）

調査区周辺は既存建物の建設に伴って0.4～0.5mにわたって造成盛土が行われている。この盛土下面は攪乱も多く、層厚が約1.4mに及ぶ部分もある。

盛土直下には地山ブロックおよび礫を含む層厚0.4～1.2mの整地土がある。この整地土は江戸時代の整地土と考えられ、大きく上下2層に分かれ、中位には0.1m前後の水平な土層が重層的に堆積する部分がみられ、これらは段階的に行われた整地に作られたものであると考えられる。

その下層では東側を中心に層厚0.4～0.6mで礫・炭化物を多量に含む土層（3・22・54・70層）が堆積しており、これについては出土遺物からみて中世後期の整地土であると考えられる。

さらに、その下層では層厚0.2～0.3m前後の土層が堆積し（SX080・17層）、出土遺物から14世紀の整地土であると考えられる。また、部分的には古い段階の整地土（66層）も残り、当該層に関しては12世紀以前の整地土であると考えられる。なお、この土層の調査区東端から4mの北壁際の地点で鉄刀が置かれたようにも見える状況で出土した。

今回の調査では、基本的に地山面で遺構検出を行ったが、調査区東端においては14世紀の整地土（17層）を挟んで2面の遺構面を確認している。第2遺構面で確認された遺構からの出土遺物は小片であつたため掲載できなかったが、11～12世紀ごろのものを主体とする。また、遺構面の標高は73.4～73.8mでほぼ平坦である。

第2項 整地土出土遺物

SX080 出土遺物（図6、図版16）

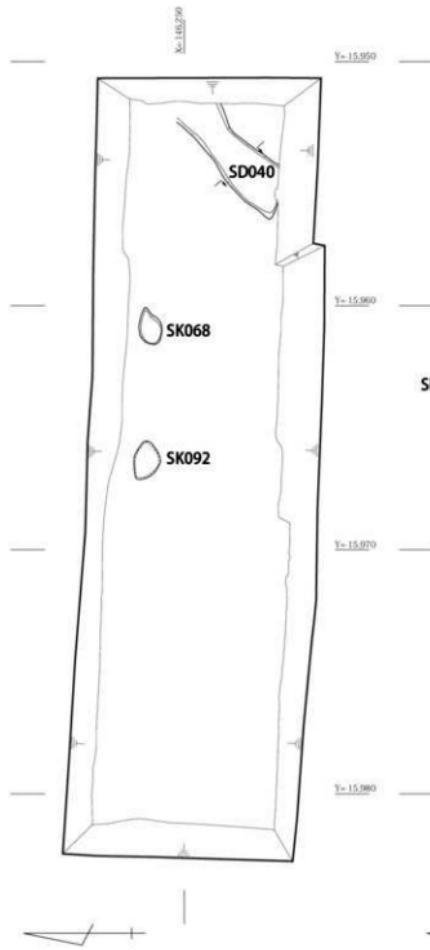
土師器皿（1～8） これらは橙系の色調であるが、形態では浅いもの（1～7）と、やや深めのもの（8）がある。前者は、口径6cm台（1）、8～9cm台（2～4）、12～13cm台（5～7）がある。これらは口縁に強いナデ調整を行うもので厚手であるが、7は比較的薄手で口縁はあまり開かない。胎土では、3・4・6・7には雲母が目立つ。後者の8は体部が大きく外に開くもので、胎土は前者に比べると比較的精良である。前者は1段階後半で、後者は2段階前半のものと思われる。

須恵器鉢（9・10） 東播系のものである。共に口縁部が灰色で周辺より濃くなっている。9は端部がわずかに上方へ拡張するB1-II類、10は上下に厚く拡張するB3-II類である。

瓦器椀（11～13） これらは口縁端部に段をもつ大和型のもので、口径12～13cm台、ミガキ調整は外側が上半3分の1に数条、内面が幅2～3mmと間隔が広いことから、III段階C型式のものと思われる。

これらの遺物は13世紀代のものが主体だが、8のように14世紀前半のものも含まれる。

第1遺構面上

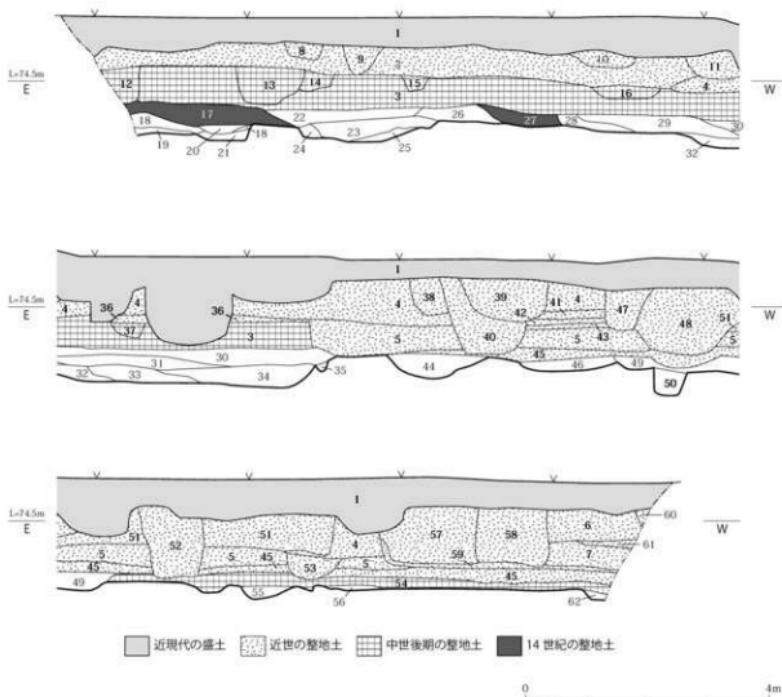


第1遺構面下



図3 全体平面図 (S=1/200)

南壁

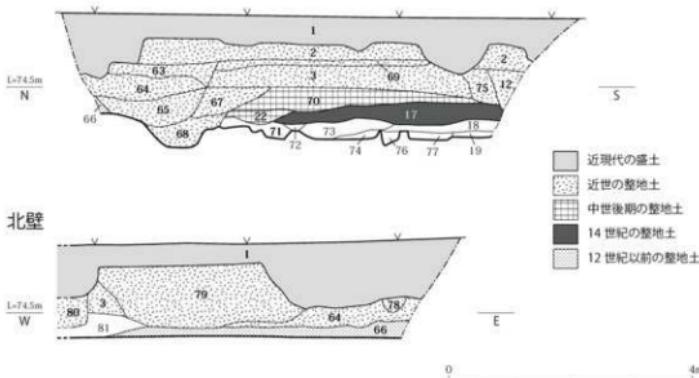


1. 盛土
2. 噴灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（炭化物多量に含み、上部に垂角礫状地山プロック集積）（18世紀頃の整地土）
3. 噴オーリープ褐 2.5Y3/3 中粒砂（礫、炭化物多量。径 10 ~ 30mm の垂角礫状地山プロック）（18世紀頃の整地土）
4. 噴灰黄 2.5Y5/2 中粒砂混紡砂（径 10mm 程度の礫、垂角礫状地山プロック多量に含む）（近世の整地土）
5. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（礫、土層、炭化物均等に含む）（近世の整地土）
6. に赤い噴灰 10YR4/3 粗砂混シルト～細砂（径 30 ~ 50mm の垂角礫、径 10 ~ 30mm の垂角礫状地山プロックを含む）（近世以降の整地土）
7. 噴灰黄 2.5Y4/2 粗砂混紡砂（径 5 ~ 50mm の垂角礫状地山プロックを含む）（近世以降の整地土）
8. 噴オーリープ褐 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物多量に含む）
9. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混シルト～細砂（礫、炭化物多量に含む）
10. 噴オーリープ褐 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物多量に含む）
11. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混シルト～細砂（礫多量に含む）
12. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂（礫、土層、炭化物少量含む）
13. 黄褐 2.5Y5/3 中粒砂（上部に多量の地山プロック集積）
14. 噴灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（土層、燒土均量に含む）
15. 噴オーリープ褐 2.5Y3/3 粗砂混シルト～細砂（炭化物多量に含む）

16. 噴灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト～細砂（礫多量に含む）
17. 黒褐 2.5Y3/2 粗砂混シルト～細砂（土層多量に含む）(SK080)
18. 黄褐 2.5Y5/4 中粒砂 (S-123)
19. 噴灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト～細砂 (S-123)
20. 噴オーリープ褐 2.5Y3/3 中粒砂 (S-123)
- (往 10mm 程度の垂角礫状地山プロック少量含む) (S-77)
21. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂 (往 10mm 程度の垂角礫状地山プロック多量に含む) (S-129)
22. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂混紡砂 (往 20mm 程度の垂角礫状地山プロック多量に含む) (SD040)
23. オリーブ褐 2.5Y4/3 中粒砂 (往 10mm 程度の垂角礫状地山プロック多量に含む) (S-130)
24. 黄褐 2.5Y5/6 細砂 (地山プロックが主体) (S-130)
25. 噴灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（土層、燒土、炭化物少量含む）(S-130)
26. 黄褐 2.5Y5/4 粗砂混シルト～細砂（地山に沿する粗砂多量に含む）
27. オリーブ褐 2.5Y4/4 中粒砂（径 5 ~ 10mm の垂角礫状地山プロック多量に含む）(地層を埋める整地土) (S-95)
28. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混シルト～細砂（礫少量含む）(SK100)
29. 噴オーリープ褐 2.5Y3/3 中粒砂（52 倍に比して礫少量）(SK100)
30. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂（礫、土層多量に含む）(SK100)

図 4 壁面土層断面図 (1) (S=1/80)

東壁



31. 晴オリーブ層 2.5Y3/3 中粒砂混細砂（礫、土器多量に含む）(SK100)
 32. オリーブ層 2.5Y4/4 粒砂混中粒砂（地山に起因する粗砂多量に含む）(S-117)
 33. オリーブ層 2.5Y4/4 粗砂（地山に起因する粗砂が主体）(S-117)
 34. 晴オリーブ層 5Y4/4 細砂(径10mmの亜角礫状地山ブロック多量に含む)(SK110)
 35. 晴オリーブ層 5Y4/4 中粒砂（礫少量含む）(S-122)
 36. 黄泥 2.5Y3/3 粗砂（礫多量に含む）(近世整地土)
 37. 晴オリーブ層 2.5Y3/3 中粒砂（圧縮された地山ブロック多量に含む）
 38. オリーブ層 2.5Y5/6 中粒砂混粗砂（礫多量に含む）
 39. オリーブ層 2.5Y5/6 細砂（ブロック土が主体）
 40. にふ・黄 2.5Y6/6 中粒砂（径 50 ~ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
 41. オリーブ層 2.5Y4/3 細砂（礫、炭化物多量に含む）(近世整地土)
 42. オリーブ層 2.5Y4/4 中粒砂（地山ブロックが主体）(近世整地土)
 43. 晴オリーブ層 2.5Y3/3 中粒砂（炭化物多量に含む）(近世整地土)
 44. 晴灰黄 2.5Y4/2 中粒砂 (S-124)
 45. にふ・黄泥 10Y4/3 中粒砂（径 ~ 10mm の亜角礫状地山ブロック、径 20 ~ 50mm の亜角礫に含む）(近世の整地土)
 46. 黄泥 2.5Y5/4 中粒砂（礫、径 30 ~ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(S-57)
 47. 黄泥 2.5Y3/3 細砂混中粒砂（瓦多量に含む）
 48. 黄泥 2.5Y5/3 中粒砂（礫、径 50 ~ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
 49. 黄泥 2.5Y5/3 細砂（礫、径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック少量含む）
 50. オリーブ層 2.5Y4/4 中粒砂（径 10 ~ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(S-43)
 51. にふ・黄 2.5Y6/4 細砂（地山ブロックが主体）(近世の整地土)
 52. 晴灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中粒砂（礫、瓦、径 30mm 程度の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
 53. オリーブ層 2.5Y4/3 中粒砂（礫、径 30mm 程度の亜角礫状地山ブロックを含む）
 54. 晴灰黄 10Y3/3 粗砂混シルト（炭化物少量含む）(16世紀後半～17世紀前半の耕植)
 55. 黄泥 2.5Y5/4 細砂（径 30 ~ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(S-21)
 56. 明灰黄 2.5Y6/6 細砂（瓦、径 50mm 程度の亜角礫状地山ブロックを含む）
 57. オリーブ層 2.5Y4/3 中粒砂（径 50 ~ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(近世の整地土)
 58. 黄泥 2.5Y5/3 粗砂混細砂（径 200mm 程度の礫、径 50 ~ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(近世の整地土)
 59. 晴灰黄 10Y3/3 細砂（径 ~ 10mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(近世の整地土)
 60. にふ・黄泥 10Y4/3 粗砂混細砂（径 300mm 程度の礫を含む）(カクラン)
 61. 層 10Y4/4 利用層（径 5 ~ 20mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(近世の整地土)
 62. 晴灰黄 10Y3/4 粗砂（粗砂（径 5 ~ 30mm の亜角・亜円礫が主体）(ベース)
 63. 明灰黄 2.5Y6/8 粗砂（幾つか構造を持ち、礫多量に含む）
 64. 黄泥 2.5Y5/3 粗砂混中粒砂（径 10 ~ 50mm の亜角礫状地山ブロック、礫多量に含む）
 65. 晴灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中粒砂（径 10 ~ 30mm の亜角礫状地山ブロック、礫多量に含む）
 66. オリーブ層 2.5Y4/3 シルト混細砂（整地土）
 67. 黑泥 2.5Y3/2 中粒砂（炭化物、礫多量に含む）
 68. 底オリーブ層 5Y4/4 細砂 (SD060)
 69. 晴灰黄 2.5Y4/2 粗砂（径 10 ~ 30mm の礫多量に含み、非常に良く縮まる）(JIS:古代後期の整地土)
 70. 晴オリーブ層 2.5Y3/3 中粒砂（礫、炭化物を均等に含む）(中世後期の整地土)
 71. オリーブ層 2.5Y4/2 粗砂（地山ブロックが主体）(S-77)
 72. 晴灰黄 2.5Y5/2 中粒砂（土器、礫多量に含む）
 73. 黑泥 2.5Y3/2 細砂 (SK900)
 74. オリーブ層 2.5Y4/3 粗砂（地山ブロックが主体）(SK900)
 75. 晴オリーブ層 2.5Y3/3 中粒砂（礫、炭化物多量に含む）
 76. オリーブ層 2.5Y4/3 中粒砂（径 10 ~ 20mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）(S-134)
 77. オリーブ層 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（径 10mm 程度の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む）(S-128)
 78. オリーブ層 2.5Y4/3 粗砂混中粒砂（礫多量に含む）
 79. 晴オリーブ層 2.5Y3/3 中粒砂（径 100 ~ 200mm の大型礫多量に含む）
 80. 晴灰黄 2.5Y5/2 粗砂混中粒砂（径 50 ~ 100mm の礫多量に含む）
 81. 黄泥 2.5Y5/3 中粒砂（瓦、径 20 ~ 50mm の亜角礫シルトブロック多量に含む）

図 5 壁面土層断面図 (2) (S=1/80)

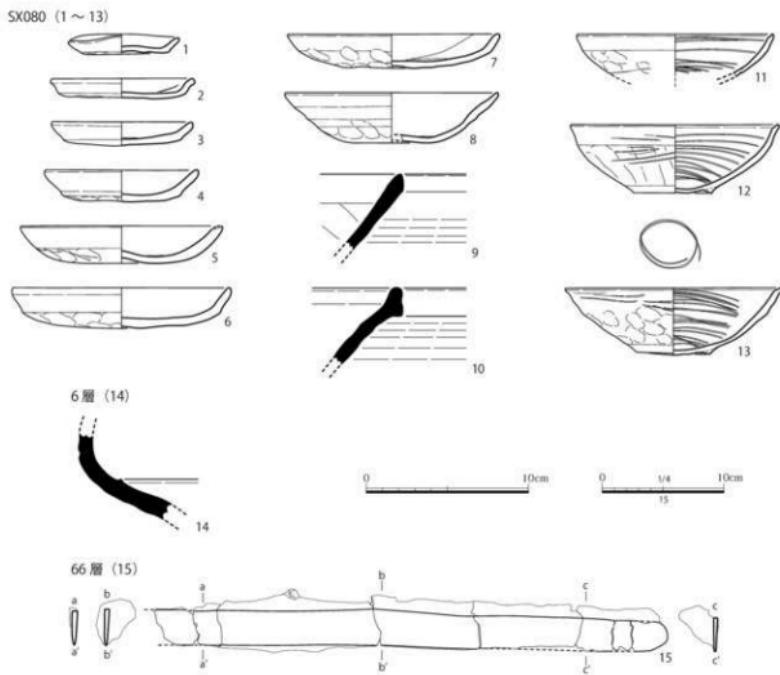


図6 整地土出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

6層出土遺物 (図6、図版16)

輸入陶器壺(14) タイ産の黒釉壺の頸部である。1条の突線を有するもので、胎土は灰色で砂粒を少量含み、外面は緑黒色の釉が掛けられるが、二次焼成を受け器面が泡立ち灰白色に変色している。シーサッチャナライ窯の長頭壺で、15世紀代のものである。

66層出土遺物 (図6、図版17)

金属製品(15) 直刃の鉄刀で、銹化が激しく、最大幅2.9cm、最大厚0.4cm、現存長42.2cmを測る。刃先はやや丸みを帯び、刀身は直線的である。刃部が非常に薄いのが特徴であり、実用品であるか疑問である。年代等についても不明である。

第2節 14世紀以前の遺構と遺物**第1項 遺構****建物****SB120 (図7)**

調査区東半で検出した掘立柱建物で、SD071の下層から確認されている。後世の遺構で柱穴が削平

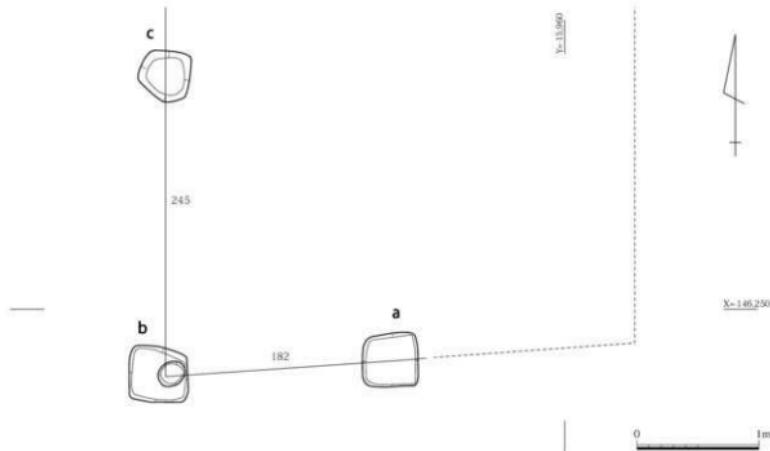


図7 SB120 平面図 (S=1/40)



図8 SD040 土層断面図 (S=1/40)

されている部分もあるが、隅丸方形を呈する柱穴が矩形に並ぶことから掘立柱建物とした。東西二間、南北一間以上で、南北柱筋はほぼ座標北に一致する。北半部は調査区外に延びるため、全形は不明である。柱間は東西 1.8m、南北 2.5m を測り、柱穴は一辺 0.5m 前後の隅丸方形を呈するが、北側の柱穴はやや不整形である。残存する柱痕跡からは直径約 0.2m の柱の存在が想定される。深さ 5 ~ 10cm と浅く、削平を受けているものと思われる。

中世後期である SD071 の下層から検出されたことと柱穴の形状から、古代に遡る可能性が高い。ただ、柱穴の出土遺物が小片であるため、時期の特定は困難である。

溝

SD040 (図8、図版4)

調査区東端で SK090 などの上面で検出した溝である。南西から北東に向き、平面形態は直線的で、幅 1.6 ~ 2.0 m、現存長 5.6 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。北東側が調査区外に延びるため、全形は不明である。その形状や規模から、何らかの区画の可能性などが考えられる。

出土遺物には、中世の土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓などがあり、その時期は 12 世紀半ば～14 世紀前半である。

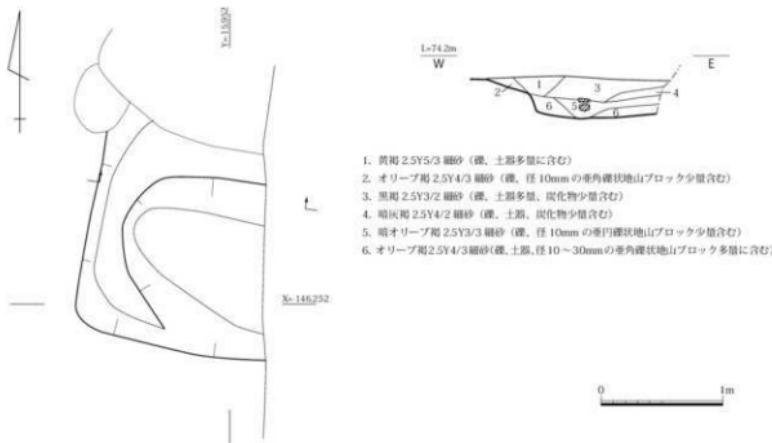


図9 SK090 平面・土層断面図 (S=1/40)

土坑

SK063

調査区中央で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形を呈し、東西長 1.9 m、南北長 1.2 m、深さ 0.2m 前後を測る。

出土遺物には、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓などがあり、その時期は 13 世紀後半～14 世紀前半である。

SK090 (図9、図版4・5)

調査区東端で検出した土坑である。東側は調査区外に延び、北側は新しい段階の遺構に切られている。検出部分での平面形態は隅丸方形を南北長 1.9m、東西長 1.6m、深さ 0.4m を測る。底面は南半が楕円形にさらに窪んでいる。埋土は砾や土器、炭化物を含む細砂である。

出土遺物には古代の須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類、鞆羽口、鉄滓のほか、土馬や埴輪などがある。主体的な遺物は 13 世紀前半のものである。

第2項 遺物

溝

SD040 出土遺物 (図10、図版17)

土師器皿 (16～18) これらは橙系の色調で口縁に強いナデ調整を行う厚手の一群であるが、口縁端部が直立気味である。口径が分かるもの (16・17) は、12cm 台である。1段階前半～中頃にあたるものと思われる。

土師器釜 (19) 口縁端部を内側に折り曲げる器壁が厚いもので、大和 H₂ 型である。

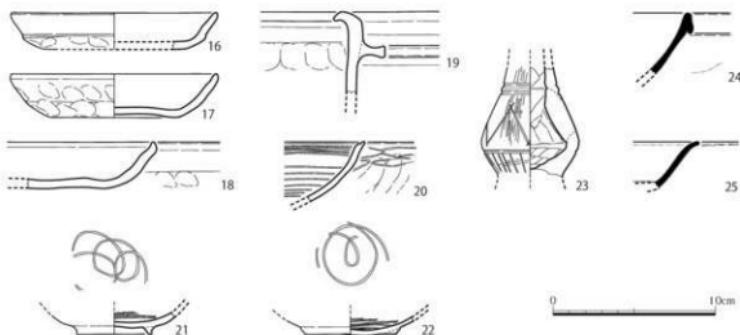


図 10 SD040 出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦器椀 (20 ~ 22) これらは口縁端部に段をもつ大和型のもので、内面のミガキ調整は隙間がみられつつも比較的密であるが、21・22の見込みのらせん状暗文はやや粗く、Ⅱ段階 B ~ Ⅲ段階 B 型式に収まるものである。

瓦質土器瓶 (23) 脚台が付く花瓶である。算盤珠状の胴部に下半は縦方向のみ、上半は山形状に短沈線を描く。焼成はやや不良で、かなり厚めの紐もしくは板状の粘土をつなぎ合わせて成形している。

輸入白磁椀 (24) 玉縁状口縁で、胎土には気泡がみられる。椀IV類である。

輸入白磁皿 (25) 口縁端部を釉剥ぎした口禿のものである。A群である。

これらの遺物は、12世紀半ばのものを含むが、下限は14世紀前半である。

土坑

SK063 出土遺物 (図 11、図版 17)

土師器皿 (26 ~ 30) これらは橙系の色調で口縁に強いナデ調整を厚手の一群であるが、口縁端部が直立気味である。口径 9cm 台 (26 ~ 28)、11cm 台 (29・30) がある。概ね 1 段階後半にあたるものと思われる。

これらの遺物は、13世紀後半~14世紀前半のものである。

SK090 出土遺物 (図 11、図版 18・19)

土師器皿 (31 ~ 37) これらは橙系の色調で口径 8 ~ 9cm 台 (31 ~ 34)、12 ~ 13cm 台 (35 ~ 37) がある。口縁に強いナデ調整を施す厚手の一群であるが、後者は口縁端部が直立気味である。概ね 1 段階中頃にあたるものと思われる。

瓦器皿 (38・39) 共に見込みにジケザク状の暗文ミガキを施したものであるが、38 は丸底、39 は平底である。

瓦器椀 (40 ~ 45) これらは口縁端部に段をもつ大和型のもので、口径 13 ~ 14cm 台である。ミガキ調整は外側が上半 3 分の 1 に数条だが、内面見込みにらせん状の暗文がみられることから、Ⅲ段階 B 型式のものと思われる。

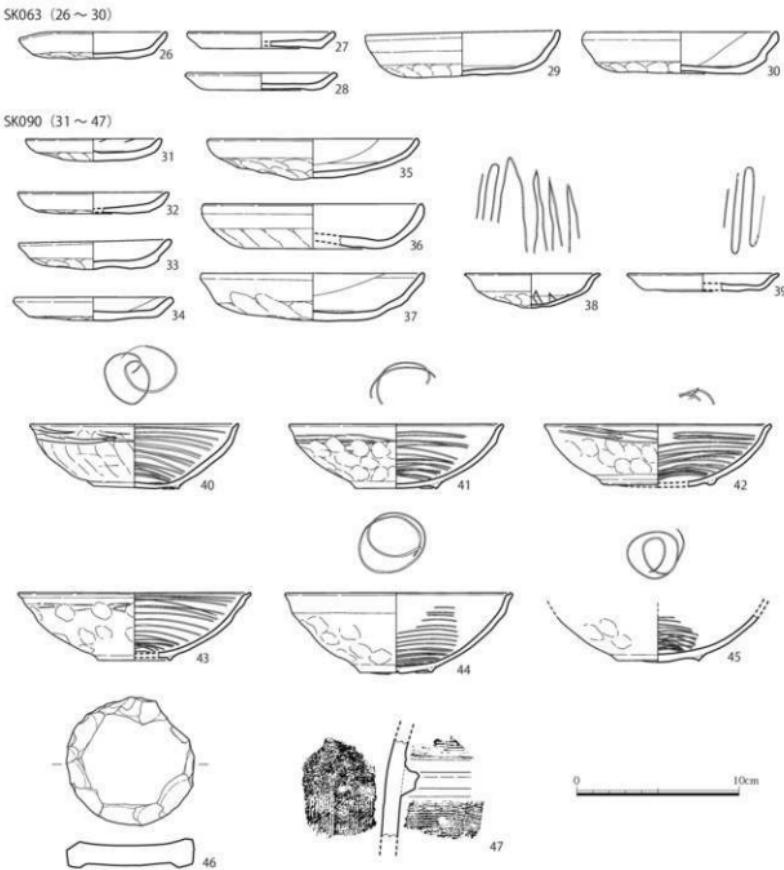


図 11 SK063・090 出土遺物実測図 (S=1/3)

土製品（46） 11世紀後半～12世紀前半の白磁椀IV類の底部を素材とした土製円板である。

埴輪（47） 円筒埴輪で浅いM字状のタガを有し、外面はB種ヨコハケ調整、内面はタテハケ調整が残る。

これらの遺物は、埴輪（47）は古墳時代中期、土製円板（46）は12世紀前半のものだが、主体は13世紀前半のものである。

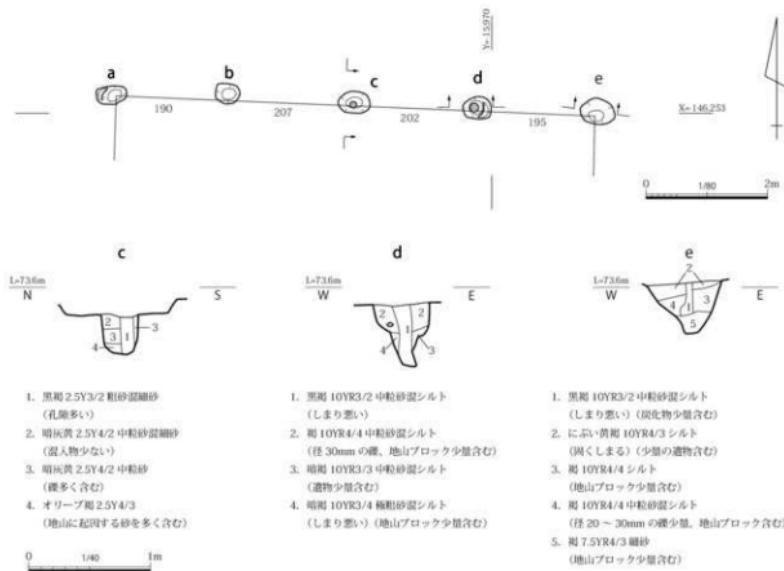


図 12 SB135 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

第3節 15世紀～17世紀前半の遺構と遺物

第1項 遺構

建物

SB135（図12、図版5）

調査区南側の西寄りで検出した掘立柱建物である。調査区南端近くで東西方向に四間分の柱穴列が検出され、調査区外に柱列が連続すると想定し、掘立柱建物とした。東西四間、南北は不明であり、東西は 7.9m を測る。方位は東側で南に $2^{\circ} 24'$ 振っている。柱間はもの 1.9 ~ 2.1m で西端柱間のみ 1.9m とやや狭い。柱穴は直徑が 0.4 ~ 0.6m 前後であり、東西方向に長い不整な楕円形を呈するものが多い。残存する柱痕跡からは直徑約 0.1m の柱の存在が想定される。

なお、掘立柱建物としたが、今回の調査地は南側に率川神社が隣接しており、神社の北側を画する何らかの柵列である可能性もあることを付記しておく。

柱穴からは古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類、鉄滓などが出土しており、16世紀後半を下限とする。

SB136（図13、図版6・7）

調査区南側の東寄りで検出した掘立柱建物である。東西方向に五間分の柱穴列を直列した形で検出しており、柱間寸法にばらつきはあるが、掘立柱建物とした。西側のSB135とは近接し、両者の柱穴列はほぼ一直線上に並ぶ。東西は 11.7m を測り、各柱間は柱穴の芯々間で西から 2.5m、3.4m、1.8m、1.7m、

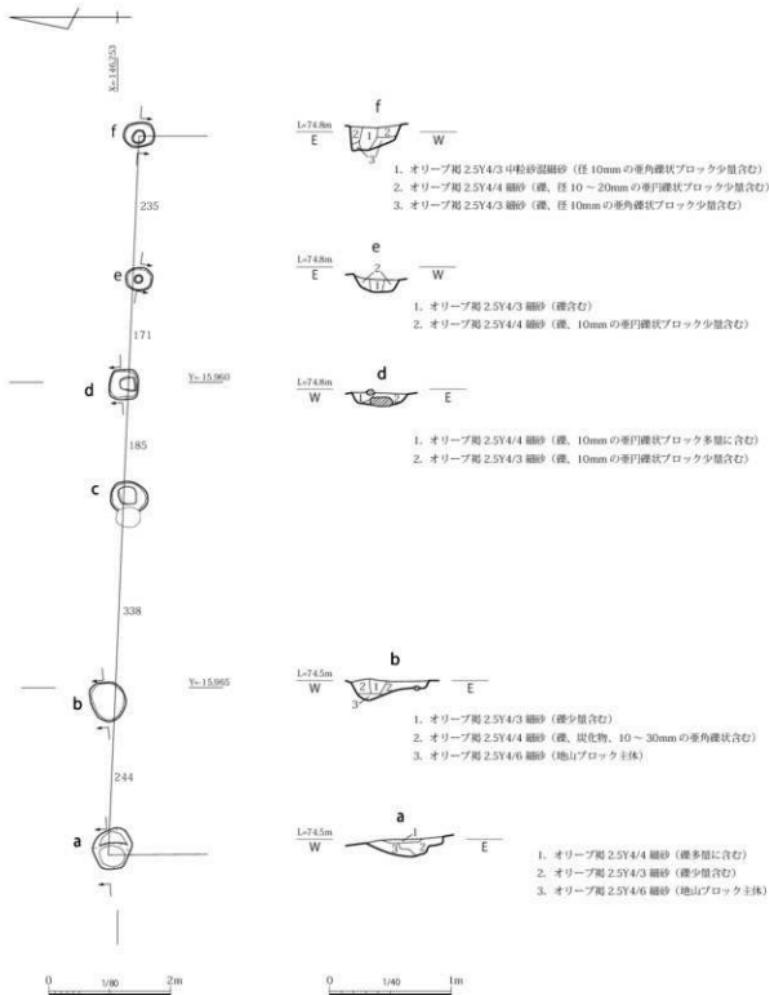


図 13 SB136 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)

2.3m である。方位は東側で南に $2^{\circ} 26'$ 振っており、SB135 とほぼ同じである。柱穴の径 0.4 ~ 0.7m 前後、深さ 0.1 ~ 0.2m 前後で全体に浅い。柱穴 d が隅丸方形を呈する以外は不整な円形である。柱穴 c、d では柱穴掘方中央から扁平な石が底面に接する形で出土しており、柱穴底面の地盤が強固であることを考えると、礎板というよりも礎石としての機能を考えるのが妥当である。また、柱穴 e、f では平面・断面の観察により、土質の違いによる直径約 0.1m の柱痕が確認されている。

当該建物についても、柱間間隔にややばらつきがあるなど、SB135 と同様、東西方向の柵列であつた可能性が残されているが、柱穴の深さや、礎石の存在を考慮すると、建物と考えるべきであろう。

柱穴からは古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦類、鉄滓のほか、埴輪などが出土しており、16 世紀を下限とする。

柱穴

SP039

調査区西半部で検出したピットで、重複関係より SK020 より古い。平面形態は不整な梢円形で、径 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.1m 前後である。

出土遺物には、古代の土師器、中世の土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓などがあり、その主体は中世後期のものである。

溝

SD060 (図 14、図版 8)

調査区北寄りを東西に貫く溝である。検出長は 29.5m で、ほぼ正方位である。幅 1.7 ~ 1.9m、深さは 0.4 ~ 0.8m を測り、底面の標高は東側で約 73.5m、西側で 73.0m で、東から西に向かって緩やかに傾斜している。埋土下層には細粒～中粒砂がラミナを形成して堆積しており、流水があったことが窺われる。西半部では埋土の上層から礫のほか土器、鉄滓、獸骨が多量に出土しており、埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

出土遺物には古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類、鉄滓のほか、埴輪などがある。下層では 15 世紀代のものがやや多くみられるが、全体的には 15 世紀～16 世紀前半と時期幅がある。

なお、この溝は西半部の SK020・050 付近において、南側に 2m ほど意図的に湾曲させている。溝の掘削段階において、その直線上に避けなければいけない施設等があった可能性が想定される。SK050 に埋置されていた根切りされた切り株がその候補となりうるもの、それを確定づける痕跡は確認できなかった。

この溝は位置や規模などから土地を区画するものと考えられるが、南側で検出している 2 棟の建物跡の柱穴列が柵などの施設であった場合、調査区南側に隣接する率川神社と関連する区画溝であった可能性もある。

SD071

調査区中央で検出された溝である。長軸はほぼ真北を向け、平面形態は長方形であるが両端とも他の遺構で切られ、幅 0.6 m、現存長 2.0 m、深さは 5cm である。形状、規模からは素掘り小溝の可能性もあるが、本調査区では同種のものはみられない。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、埴堀、轆羽口、鉄滓、獸骨などがあり、その主体は中世後期のものである。

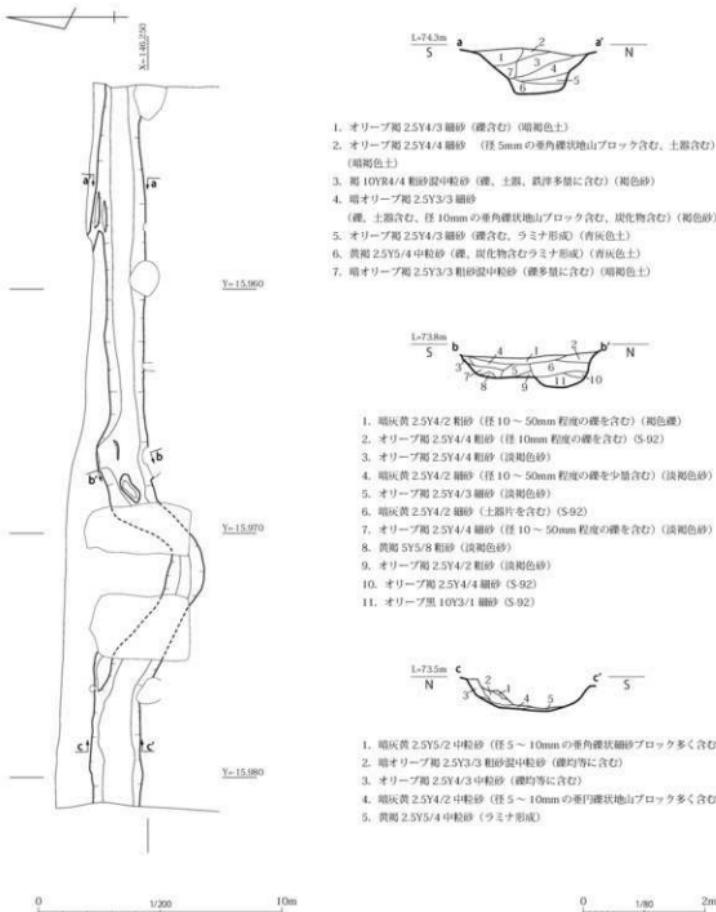


図 14 SD060 土層断面図（平面 S=1/200・断面 S=1/80）

井戸

SE105（図 15、図版 9）

調査区中央で検出した井戸である。検出面では直径 2.3m 前後を測り、円形を呈する。検出面から -1.8m まで掘削したが、井戸底面を確認できず、工事との関係上、断ち割りもできなかった。したがって、正確な深さと下層の堆積状況等の詳細は不明である。掘削限界での井戸の直径は 1.7m である。井戸枠はその痕跡を含めて確認できなかった。埋土は地山ブロックや炭化物を含んでおり、機能時の堆積

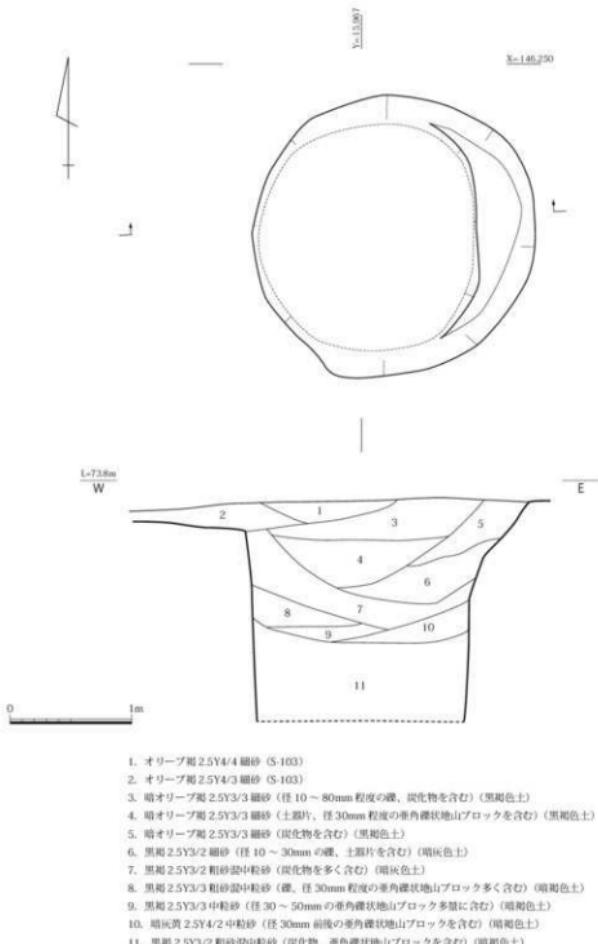


図15 SE105 平面・土層断面図 (S=1/40)

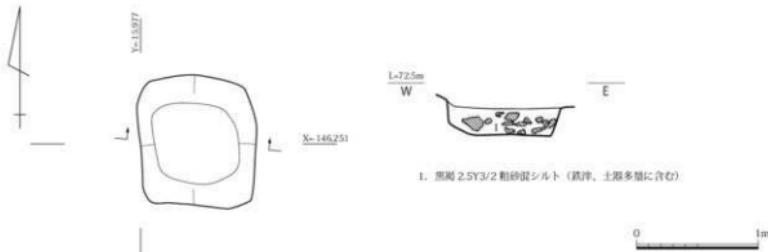


図 16 SK005 平面・土層断面図 (S=1/40)



図 17 SK013 平面・土層断面図 (S=1/40)

ではなく、廃絶後の人為的な埋め戻し土である。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦類、漆器、鐵滓などがある。下層は 16 世紀後半のものが主体で、上層では唐津焼や小片のため図化できなかった肥前産染付が出土していることから、17 世紀前半以降が下限である。

土坑

SK005 (図 16、図版 10・11)

調査区西寄りで検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し、南北長 1.1m、東西長 1.0m、深さ 0.2m を測る。埋土は黒褐色を呈する单一土であり、全体に楕円鉄滓を含む鉄滓や土器などを多量に含んでいる。

出土遺物には、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、瓦類、縞引口、大量の鉄滓がみられ、土器類は中世後期のものが主体である。

当該土坑のみならず、調査区の西半部では鉄滓や縞引口などが集中して出土しており、炉跡などの検出はみられないものの、調査区周辺近くで鍛冶が行われていたと考えられる。そのような観点で当該土坑をみた場合、鉄滓などの廃棄土坑と考えることも可能である。

SK013 (図 17、図版 10・11)

調査区西寄りで検出した土坑である。平面形態はややいびつな隅丸方形を呈し、南北長 1.0m、東西

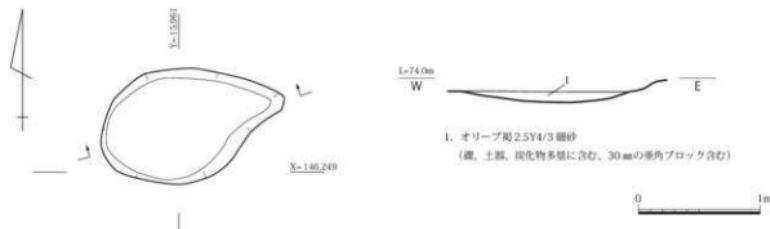


図18 SK068 平面・土層断面図 (S=1/40)

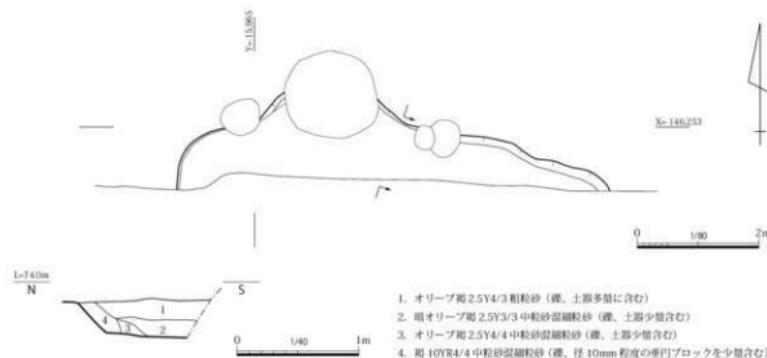


図19 SK100 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)

長 0.9m、深さ 0.2m である。形状・規模からは隣接する SK005 と類するが、埋土はやや明るく褐色系を呈している。

出土遺物には、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、輪羽口、鉄滓、骨などがあり、その主体は中世後期のものである。

SK068 (図18、図版11)

調査区東寄りで、SD060 の上面で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形で、南北長 1.0 m、東西長 1.5 m、深さ 0.1m である。埋土には礫、炭化物、遺物が多く含まれる。

出土遺物には、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓、漆付不明製品などがあり、17世紀のものである。

SK092

調査区中央で、SD060 の上面で検出した土坑である。平面形態はややいびつな楕円形で、南北長 1.0 m、東西長 1.6 m を測る。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器類、瓦などがあり、中世後期のものである。

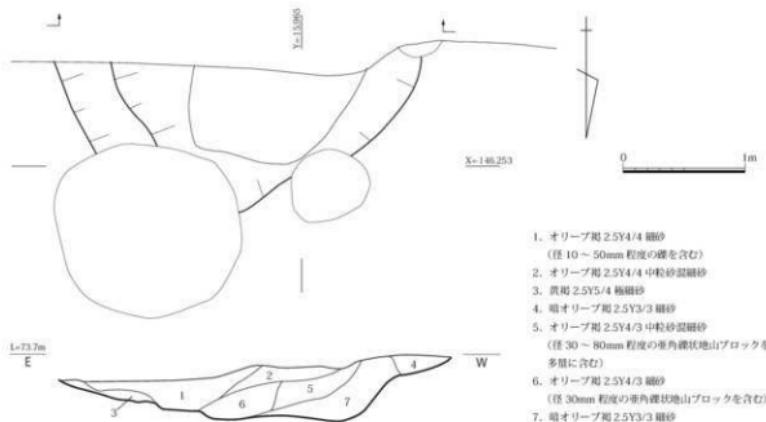


図 20 SK110 平面・土層断面図 (S=1/40)

SK100 (図 19、図版 12)

調査区中央の南壁際で検出した土坑である。南側は調査区外に延びるため全形は不明で、現存長 7.1 m、深さ 0.3m である。埋土には礫が含まれる。

出土遺物には、古代の須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、瓦、鉄滓、埴輪、貝殻などがあり、その主体は 16 世紀前半のものである。

SK110 (図 20、図版 12)

調査区中央の南壁際で SK100 の上面より検出した土坑である。南側は調査区外に延びるため全形は不明で、現存長 3.2 m、深さ 0.4m である。埋土には礫や地山ブロックが含まれる。

出土遺物には、中世の土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、鉄滓、埴輪などがあり、その主体は中世後期のものである。

第2項 遺物

建物

SB135 出土遺物 (図 21、図版 19)

土師器皿 (48・49) これらは橙系の色調で、どちらも小片のため正確な口径は不明だが、48 は 7 ~ 8cm 台、49 は 11 ~ 13cm 台のものと思われる。口縁に強いナデ調整を施す厚手の一群であるが、後者は口縁端部が直立気味である。概ね 1 段階中頃にあたるものと思われる。

土師器釜 (50) 口縁端部が上方に拡張する大和 I₂ 型 III-1 型式と思われる。

瓦質土器鉢 (51) 口縁端部を内側に引き出す円形浅鉢で、外面へ平滑に仕上げられている。胎土には石英、長石などの微小な砂礫が含まれる。

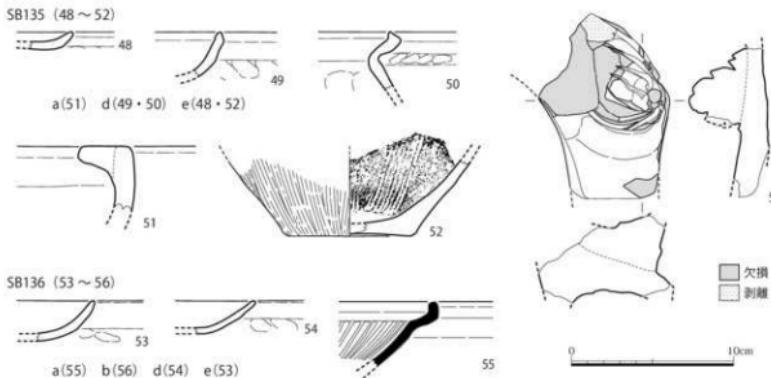


図21 SB135・136出土遺物実測図 (S=1/3)

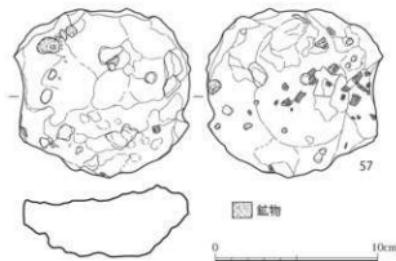


図22 SP039出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦質土器擂鉢 (52) 内面に放射状の施文具幅 8 本 /2.2cm の擂目がみられ、外面は粗いハケ調整が施され、やや焼成不良のためか器面の崩落がみられる。

これらの遺物は、13世紀代のものを含むが、下限は16世紀代である。

SB136出土遺物 (図21、図版19)

土師器皿 (53・54) 53は橙系の色調で口縁に強いナデ調整を施す厚手のもので、1段階中頃にあたる。54は灰白系の色調で、体部が大きく開く浅形で薄手のもので、3段階にあたる。

輸入青磁盤 (55) 口縁端部を上方に掘みあげ、内面には放射状に幅 5mm の凹線を配する盤の口縁である。釉は淡緑色、胎土は白色で、龍泉窯系のものである。

鬼瓦 (56) 右半の一部で、上向きの罫が貼り付けられており、長石・雲母・褐色粒を多く含んでいる。

これらの遺物は、13世紀代のものを含むが、下限は16世紀後半である。

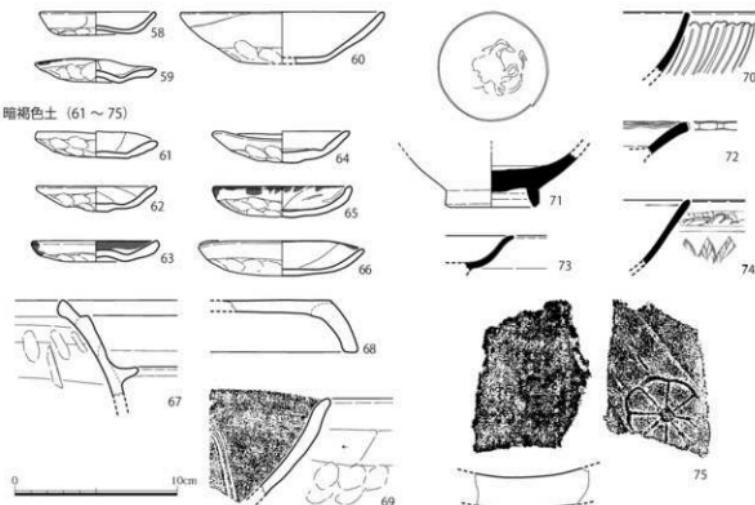


図23 SD060出土遺物実測図(1) (S=1/3)

柱穴

SP039出土遺物 (図22、図版19)

鉄滓 (57) 梗形鉄滓である。536gを量る。

土器類は小片のため図化できなかったが、概ね中世のものである。

溝

SD060出土遺物 (図23～27、図版19～23)

土師器皿 (58～60) 58・59は黄橙系の色調で口径7cm台のものであるが、58は内湾する器形に見込みがわずかに突出するものである。59は口縁が大きく外反するいわゆる「へそ皿」で、口縁端部に煤が付着する。60は白系の色調で体部が大きく開く深めの器形である。これらは2段階後半のものである。

【暗褐色土】

土師器皿 (61～66) これらは黄橙系の色調で口径7～8cm台 (61～65) と10cm台 (66) があり、63・65・66は口縁端部に煤が付着する。61～64は厚手で体部が大きく開き上げ底状のいわゆる「へそ皿」の一群ともされるが、内面の口縁外側にナデ抜けるいわゆる「の」字ナデ調整が特徴的である。65・66はやや薄手で内湾する器形であるが、内面は同様の「の」字ナデ調整である。これらは3段階のものである。

土師器釜 (67) 口縁小片のため全形が明らかではないが、口縁端部が斜上方にのびることから、大和H₃型と思われる。

瓦質土器蓋 (68) 口縁外面に強いナデ調整が施され、蓋上面には砂礫が目立つ。

瓦質土器擂鉢（69） 口縁端部のナデが強く小さく外反することから、F型式である。

輸入青磁椀（70・71） 共に龍泉窯系で胎土は白色で精良なものである。70は線刻細蓮弁文を施したB4類で釉は濃緑色、71は見込みに花文がスタンプされ、釉は緑白色である。共に15世紀後半～16世紀前半のものである。

輸入青磁皿（72） 龍泉窯系の稜花皿で、釉はオリーブ色で胎土は灰白色である。青磁椀（70・71）と同時期のものである。

輸入白磁皿（73） 景徳鎮窯系の端反皿で、E群である。

輸入染付椀（74） 景徳鎮窯系のいわゆる蓮子椀で、口縁部外面にやや薄い呉須で横帯に粗雑な波涛風文、胴部に蕉葉文が描かれるもので、C群である。

平瓦（75） 八弁花文がスタンプされたものである。

【褐色砂】

土師器皿（76～79） これらは口径7～8cm台であるが、黄橙系の色調で体部が大きく開く一群と（76～78）、橙系の色調で口縁に強いナデ調整を行うもの（79）がある。これらは2段階～3段階前半のものである。

土師器釜（80） 口縁が上方に拡張する大和I₂型で、口縁がやや薄手なところからIII-1型式と思われる。

須恵器鉢（81） 東播系のものである。口縁部が灰色で周辺より濃くなっている、口縁は口縁端部が下方に拡張するB2-II類である。

瓦質土器鉢（82・83） 82は器面が良く焼され口縁端部上面が平滑で胴部が内湾する浅鉢で、83は発色が悪く灰色で口縁上面が大きく凹む直線的な器形をもつ鉢である。

瓦質土器擂鉢（84） 内面に放射状に施文具幅9本/2.5cmの擂目がみられ、外面は粗いハケ調整が施され、やや焼成不良のものである。

輸入青磁椀（85～88） 全て龍泉窯系のものであるが、胎土が白色のもの（85・86）と、灰色（87・88）がある。85は疊付を釉剥ぎすることと鍋蓮弁文からIII類にみえるが、蓮弁は片切り彫りであることや全体の器形からB3類に類似する。86～88は太目の高台をもち、外底の釉は蛇の目釉剥ぎするもの（86）と、無釉のもの（87・88）がある。見込みにはスタンプにより、86が「顧氏」、87が「太」、88が「平」と記される。これらは15世紀後半～16世紀前半のものである。

輸入白磁皿（89） 4つの抉りを有する高台をもつ内湾皿で、福建産のD群のものである。外底に墨が付着する。

輸入染付小杯（90） 景徳鎮窯系の端反口縁をもつもので、外面には垂下する蔓草文が描かれる。見込みには2条の圈線内に何らかの文様が描かれているが、欠損のため不明である。

国産陶器皿（91・92） 91は瀬戸の灰釉端反皿で、見込みにスタンプによる菊花文が施されたもので、大窯1段階のものと思われる。92は内面に反しをもつ古瀬戸の灰釉深皿で、古瀬戸後IV期のものと思われる。

国産陶器擂鉢（93・94） 93は胎土が橙色で灰白色の筋がマーブル状にみられる。信楽のものと思われる。94はやや斜方向に施文具幅6本/1.5cmの擂目をもつ備前のもので、口縁端部が上下に拡張することから4B期のものと思われる。

軒丸瓦（95・96） 共に左巻三巴文を瓦当文様とするものである。

軒平瓦（97・98） 97は瓦当貼り付け技法によるもので、瓦当文様は大きく欠損しているが中心半截

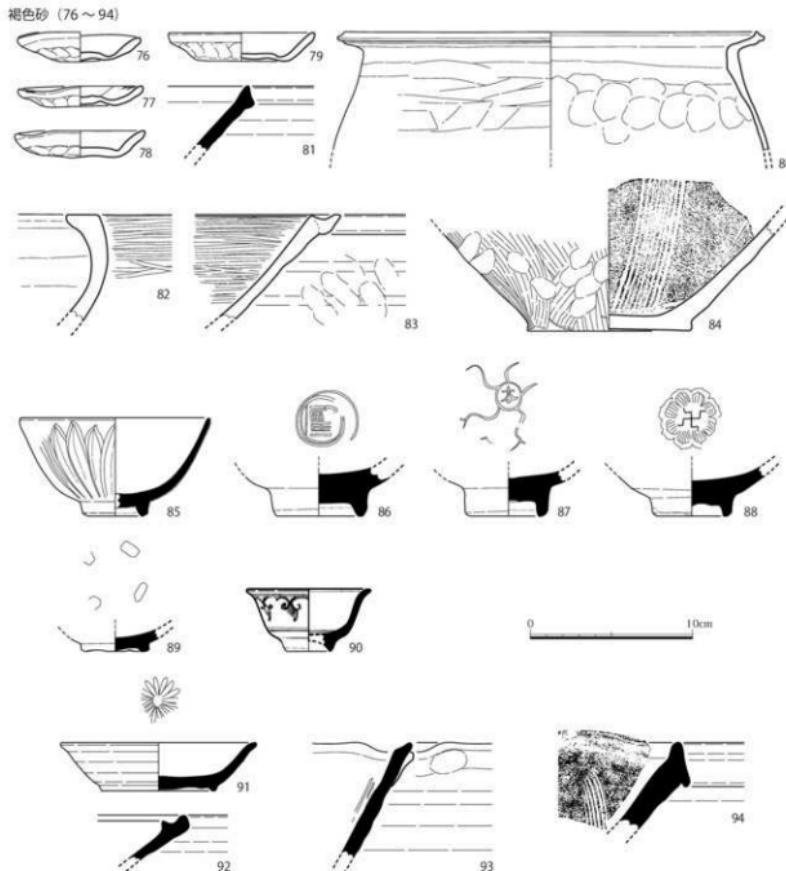


図24 SD060出土遺物実測図(2) (S=1/3)

菊花文と思われ、中世VI期のものである。98は顎貼り付け技法による三葉文を瓦当文様とし、中世VII期のものである。

鬼瓦(99) 右上半部の破片で、胎土には多くの黒色粒を含んでいる。

土製品(100・101) 100は縁羽口の狭端側片で、端部はガラス質化している。第4章第2節で詳述するが、蛍光X線分析で銅(Cu)は検出されず鉄(Fe)が強く検出された。101は瓦質土器を素材とした土製円盤で、上辺側面に原面が残っており、その形態から大型鉢の底部の一部であったものと思われる。

金属製品(102) 銭貨である。半損しているため、読み取れた銭文は「紹□□寶」である。

褐色砂 (95 ~ 102)

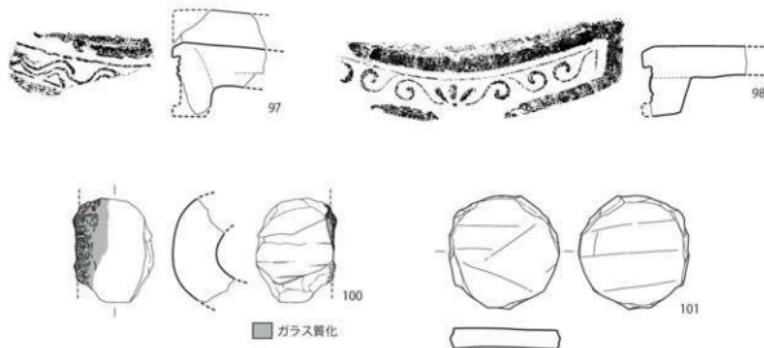
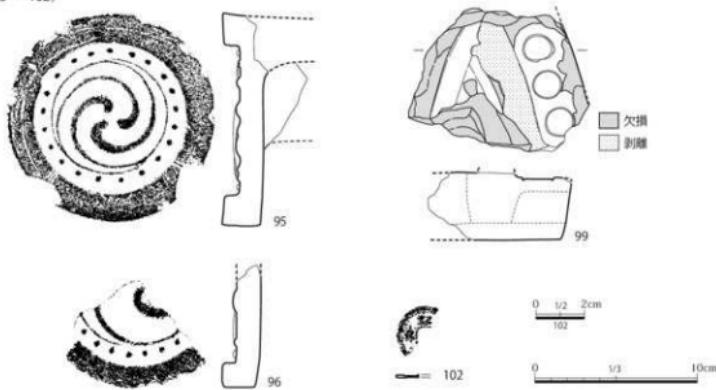


図 25 SD060 出土遺物実測図 (3) (S=1/3・1/2)

【青灰色土】

土師器皿 (103) 黄橙系の色調で外面の体部が大きく開き厚手で、口径 7cm 台のものである。

輸入青磁碗 (104) 龍泉窯系の外面無文の碗で、胎土は白色、釉は濃緑色で比較的良質である。E 類にあたり、15 世紀後半～16 世紀前半のものである。

輸入陶器碗 (105) 天目碗で、緩やかに直立する口縁の端部は舌状で、胎土は灰色、釉は茶褐色と黒色が重ね掛けされた福建産のものである。

軒平瓦 (106・107) 106 は瓦当貼り付け技法によるもので、連珠文を瓦当文様としており、顎部には四型台压痕が残る。107 は瓦当貼り付け技法による中心半截菊花文を瓦当文様としており、その文様は法隆寺 272Ba 形式に類似するが、左端の唐草文が異なる。

鉄滓 (108) 梶形鉄滓である。1600g を量る。

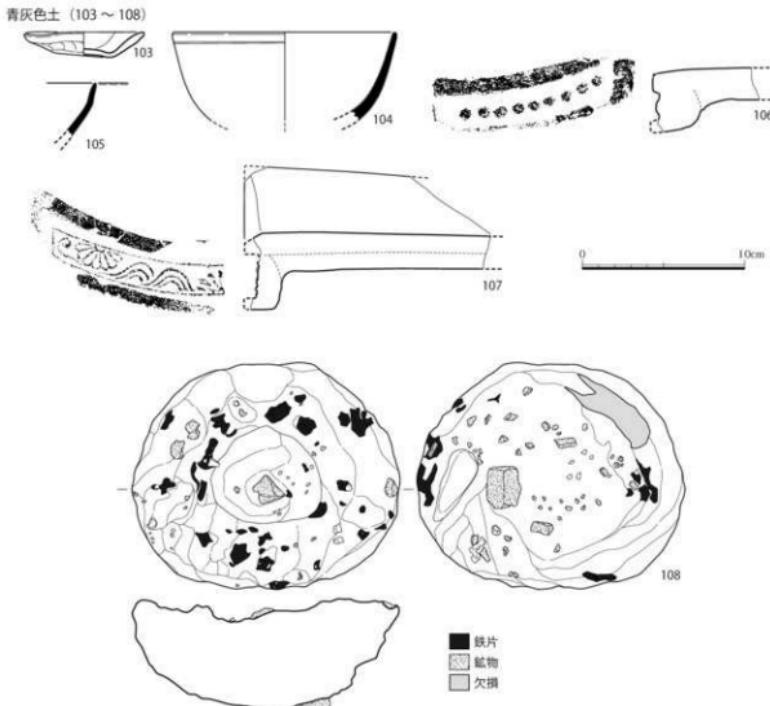


図 26 SD060 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)

【淡褐色砂】

瓦質土器插鉢 (109) 直線的に施文具幅 11 本 /3.0cm の描目を 8 つ配したもので、口縁端部が小さく外反することから F 型式である。

瓦質土器瓶 (110) 全体的に黒色に焼された太鼓状の胴部を有するいわゆる仏花瓶形のものである。外面には密な縱方向のミガキ調整が施され、脚部はその後に横方向にも数条巡らせてある。胴部には、スタンプにより上から松形 12 個、菱形 11 個、松形 12 個が 3 段に施されている。各文様の切りあいから、最初に中段を押した後に上・下段を押し、各段は左向きに押していく流れが読み取れる。

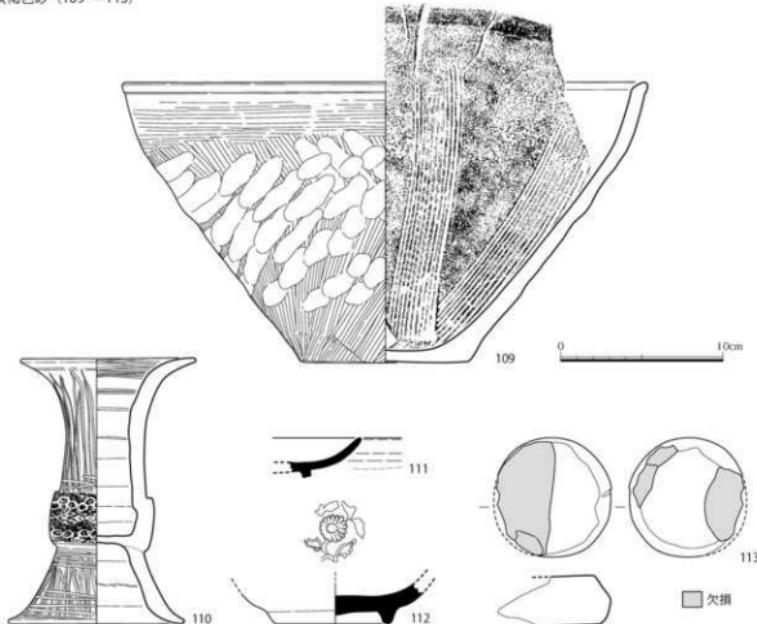
輸入白磁皿 (111) おそらく抉りがない輪高台で、体部下半が無釉の内湾皿で見込みに目跡がみられるもので、福建産の D 群のものである。

輸入青磁碗 (112) 胎土が白色で、2mm と厚い濃緑色の釉が掛けられた良質の龍泉窯系のものである。見込みはスタンプによる菊花文で、外底は蛇の目釉剥ぎする。径 7cm 台の高台と見込みの広さから、口径 20cm 程度の大振りのものと思われる。15 世紀前半のものである。

土製品 (113) 平瓦を素材とした土製円板で、側縁全体が平滑に研磨されている。

これらの遺物から、下層の淡褐色砂に 15 世紀代の遺物を多く含むが、全体的には 15 世紀～16 世

淡褐色砂 (109 ~ 113)

図 27 SD060 出土遺物実測図 (5) ($S=1/3$)

紀前半にかけての時期幅がみられる。なお、本遺構からは最も多くの動物遺体が出土している（第4章第1節参照）。

SD071 出土遺物（図 28、図版 23）

土製品堆塙（114） 内湾した浅く小型の堆塙で、胎土には砂礫が混じり、二次焼成のため非常にろくなっている。内面には青銅粒と、肉眼では1mm以下の雲母片に見えるが顕微鏡観察では球状の金色粒が付着していた。第4章第2節で詳述するが、これらの粒からは、蛍光X線分析により、銅（Cu）および金（Au）、水銀（Hg）が検出された。

土器類は小片のため図化できなかったが、概ね中世のものである。

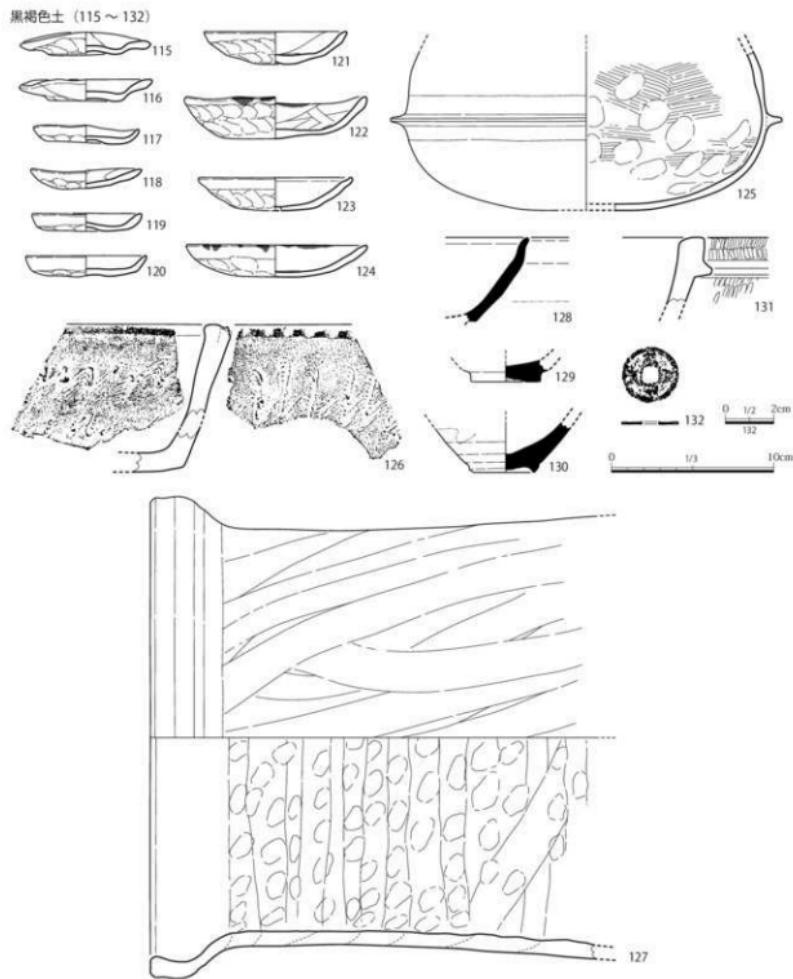
井戸

SE105 出土遺物（図 29 ~ 32、図版 23 ~ 28）

【黒褐色土】

土師器皿（115 ~ 124） 橙色系の色調で底部は凹み体部が大きく開く一群（115・116）と、黄橙系

図 28 SD071 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

図29 SE105 出土遺物実測図 (1) ($S=1/3 \cdot 1/2$)

の色調で内面の「の」字調整ナデが顕著な一群 (117 ~ 122)、灰白系の色調でほかのものより薄手で精良な胎土をもち底部が内湾する一群 (123・124) がある。口径でみると、6 ~ 7cm台 (115 ~ 120)、8 ~ 9cm台 (121・123)、11cm台 (122・124) に分かれる。122・124は口縁端部に煤が付着する。これらは概ね3段階であるが、124はその器形が京都S系列に類似しており時期的には10A ~ B期に相当する。

土師器釜（125） 体部が下彫れの球形で下半が扁平であることから、大和I₂型のIII-2型式のものである。鈴より下半が黒変している。

瓦質土器鉢（126） 体部が直線的で、口縁端部は繩目文を貼り付け、内外面全体に櫛状工具による波状文を巡らす。胎土には石英・長石・雲母などの砂礫が混じる。

瓦質土器土管（127） 受口部である。胎土には石英・長石・雲母などの砂礫が混じる。受口は径28cm台で、本遺跡で出土している土管の中では大型である。

国産陶器椀（128～130） 128・129は胎土が浅黄色、釉は茶褐色で中国産のものよりは薄く、口縁端部が外側に短く屈曲する天目椀で、129の底部外面は褐色を呈している。高台は削り出しによるもので、その脇を水平に切り、接地面が平滑な輪高台であることから瀬戸大窯3段階のものである。130は灰釉椀で胴部下半は露胎しており、見込みは深めに凹み、高台はロクロによる削り出しで成形されその抉りは浅い。釉は緑灰色で、胎土は焼成不良のためか橙色である。唐津II期である。

石製品（131） 滑石製石鍋で、鈴型口縁のものである。二次的な加工はみられない。鈴は黒変しており、二次焼成を受けたものと思われる。III-b類である。

金属製品（132） 銭貨である。銭文は激しい鋳化により不鮮明であるが、元祐通寶（初鑄1068年）と思われる。

【暗灰色土】

土師器皿（133～141） 橙または黄橙系の色調で底部は凹み体部が大きく開く一群（135～137）と、灰白系の色調で精良な胎土をもつ底部が内湾する一群（133・134・138～141）がある。口径では、6cm台（133・134）、7～8cm台（135～138）、10～11cm台（139～141）がある。139は見込み、141は口縁端部にそれぞれ煤が付着する。概ね3段階後半である。

瓦質土器鉢（142） 口縁端部に短い段を有し体部が球状で平坦な底部をもつ小形の浅鉢である。体部下半には粗いハケ調整が残り、上半は丁寧にナデ消される。外底以外は良く焼成された黒色で、胎土は精良である。口縁端部が部分的に欠けている。

瓦質土器甌（143） 口縁が緩やかに内側へ屈曲し胴部が張る大形甌で、口縁が横方向、胴部は内外面とも板状工具によるナデ調整が施される。胎土の砂粒は多くない。

輸入染付椀（144） 口縁が大きく開く浅めの椀である。胎土は灰白色で、胴部下半には内外面とも釉が掛からない。呉須は薄青色で、外面には半円の花文や草文が描かれる。漳州窯系のものである。見込みには輪状の重ね焼き痕がみられる。

国産陶器皿（145～148） 145～148は緑白色の釉が掛けられた瀬戸灰釉皿である。全体的に内湾する丸皿といわれる器形だが、146のみわずかに外反する。145は見込みにスタンプによる小ぶりの菊花文が施されるが、他は無文である。147は外底と見込みが無釉で、他は総釉だが外底に輪状のトチノ痕が残る。これらは高台が低く扁平なことから大窯2段階である。

国産陶器椀（149・150） 共に胎土が褐色、釉は茶褐色、口縁端部が外側に短く屈曲する天目椀である。149は外面の施釉がかなり上位で止まっており、高台には4つの目跡がみられる。150は高台内に墨書きがみられる。高台脇を水平に切る平滑な輪高台であることから瀬戸大窯3段階のものである。

【暗褐色土】

土師器皿（151～156） 灰白系の色調で精良な胎土をもち、底部が内湾する口径6～7cm台（151・152）、底部が平坦な口径10cm台（155）、口縁に強いナデ調整がされ体部が直線的なもの（156）の一群と、黄橙系の色調で底部は凹み体部が大きく開く口径8cm台のもの（153・154）の一群がある。

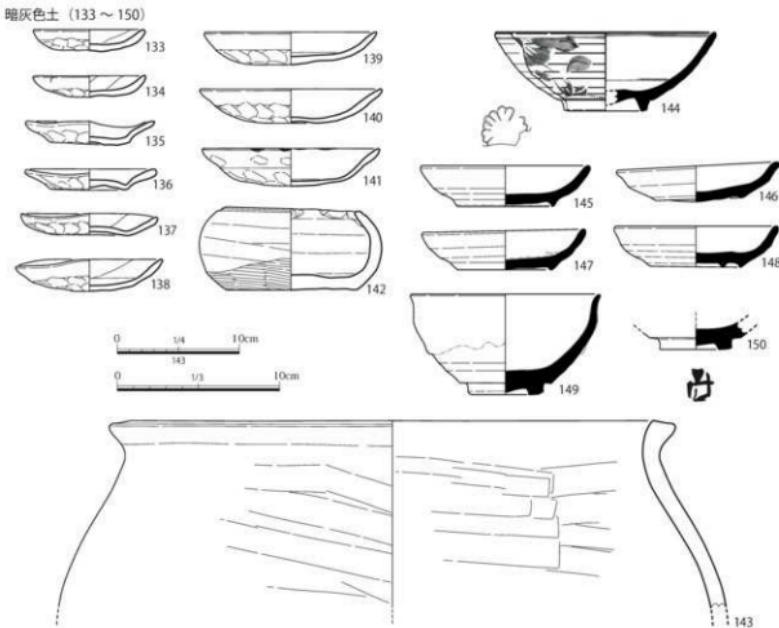


図 30 SE105 出土遺物実測図 (2) (S=1/3・1/4)

151～155は概ね3段階で、156はその器形が京都S系列に類似しており、時期的には9段階C～10A期に相当する。

土師器台付皿 (157) 外面には指オサエが頭著に残り、内面は「の」字ナデ調整だが器面は粗く、雲母等の砂粒が目立つ。いわゆる「権杯 (ごんぱい)」と称される器形である。

土師器釜 (158) 口縁が上方に拡張する大和I₂型で、口縁が短めなところからIII-1型式と思われる。

輸入白磁皿 (159) 罂付と見込みを蛇の目に釉剥ぎする小杯である。釉は光沢があるガラス質、胎土に黒色粒が混じらずに白味が強いもので、徳化窯系の可能性がある。

輸入染付皿 (160・161) 160は景德鎮窯系の内渕皿である。器壁が2mmと薄く、内外面に小ぶりの花文が施され、高台は小さく罠付に砂が付着する。E群皿である。161は景德鎮窯系の外底が凹むいわゆる碁笥底皿である。見込みには字もしくは幾何学的な文様が描かれる。C群皿である。

輸入染付椀 (162) 胎土が灰白色、外底無釉で見込みに蛇の目釉剥ぎするもので、漳州窯系の浅形椀である。

国産陶器椀 (163) 胎土が褐色、釉は茶褐色で中国産のものよりは薄く、口縁端部が外側に短く屈曲する天目椀である。高台脇を水平に切る平滑な輪高台であることから瀬戸大窯3段階のものである。

国産陶器皿 (164～167) 164～166は天目椀と類似した茶褐色の釉が掛けられたいわゆる丸皿とされる瀬戸鉄釉皿で、見込みに大きな円形の目跡が3か所、外底には蛇の目状に釉が掛かっている。167は緑白色の釉が掛かり、口縁端部が大きく外反する瀬戸灰釉折縁皿で、見込みと外底は無釉である。

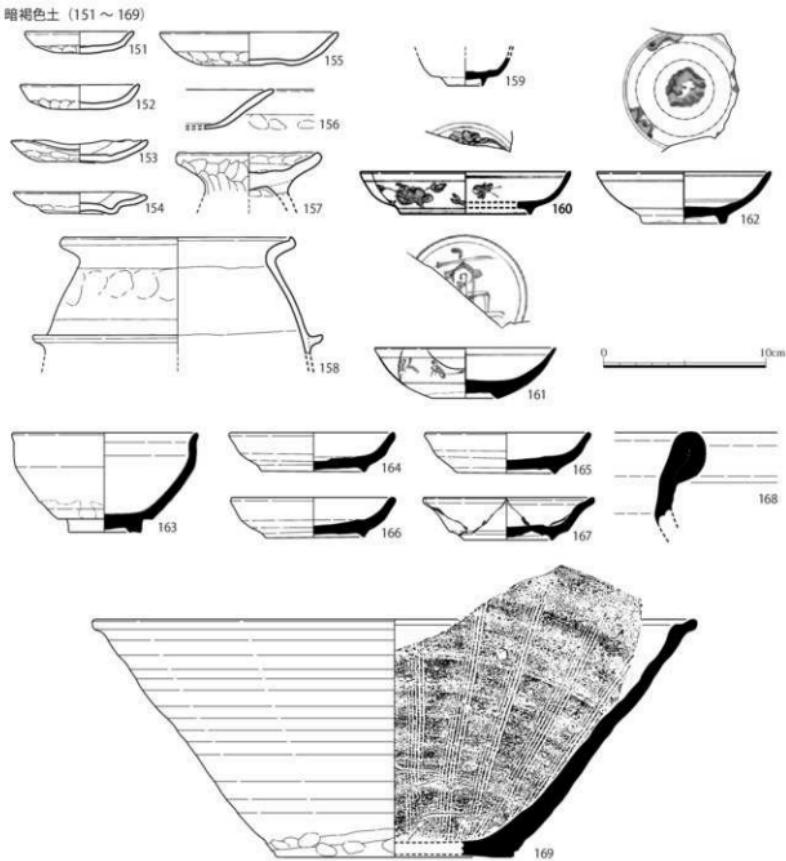


図31 SE105 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

胴部には割れを漆継ぎした部分がみられる。これらは瀬戸大窯3段階のものである。

国産陶器甕 (168) 短く直立する玉縁状口縁の大甕口縁部片で、外面は若干灰を被っている。備前IV期のものである。

国産陶器鉢 (169) 胎土が赤色で白色の筋がマーブル状にみられ5mmの砂礫が多く混じる。口縁端部が受け口状で、施文具幅6本/1.1cmの描目をもつ。信楽B6類のものと思われる。

瓦質土器土管 (170 ~ 172) 170は径24cm台の端部、171は径30cm台の受口部で共に大型のものである。172は径14cm台の受口部で小型のものである。

金属製品 (173) 鉄鍋の口縁片で、小さな玉縁状を呈する。

これらの遺物は、上層の黒褐色土では唐津焼や小片のため図化できなかったが肥前産染付も出土して

暗褐色土 (170 ~ 173)

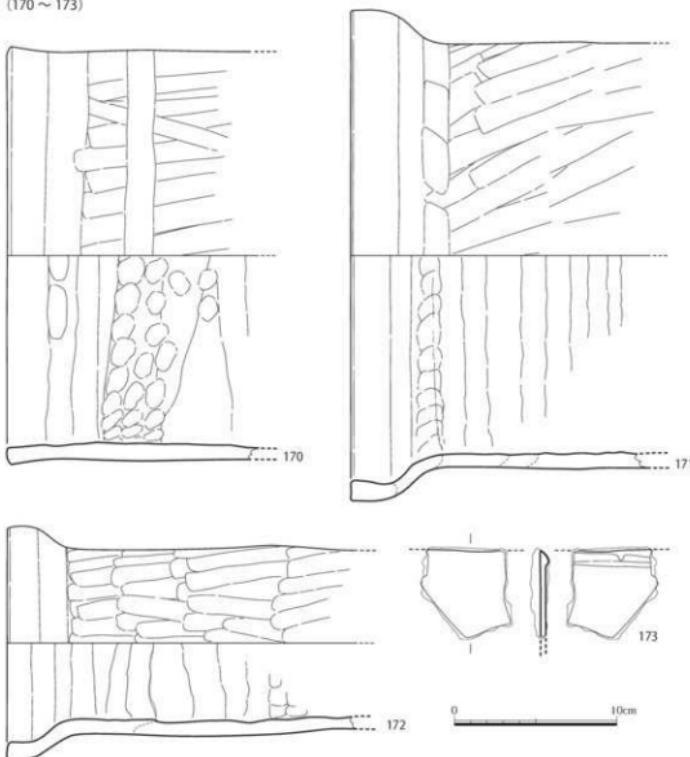


図 32 SE105 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)

いることから、17世紀前半以降が下限である。下層の暗灰色土・暗褐色土には明確な時期差は窺えず、16世紀後半を下限とするものが主体である。なお、貝類ではアカニシ、切断痕のあるイノシシまたはブタの骨も出土している（第4章第1節参照）。

土坑

SK013 出土遺物（図 33）

鉄滓（174） 梱形鉄滓である。825g を量る。

SK068 出土遺物（図 33、図版 28）

土師器皿（175・176） 黄橙系の色調で口縁外面のナデ調整があまり徹底されておらず、175 は体部が低く外反しているもの、176 は底部が比較的平坦なものである。共に口縁端部に煤が付着する。第3段階後半ごろのものであろうか。

輸入陶器椀（177） 「ハ」字状に開く輪高台をもち、緩やかに外反する体部をもつ深めの椀である。胎

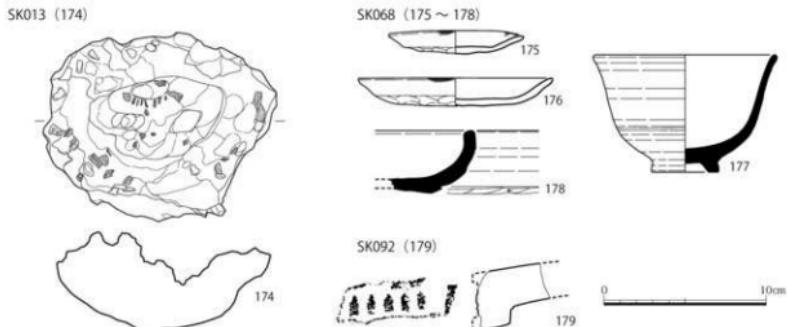


図33 SK013・068・092 出土遺物実測図 (S=1/3)

土が灰色でややざらつき、釉は比較的光沢のある灰色で全体に掛けられた特徴から朝鮮灰釉系陶器とされるものと思われる。江戸遺跡では朝鮮灰釉系陶器は17世紀後半に多いものであるが、管見では同一の器形はみられない。

国産陶器鉢 (178) 内湾する浅鉢で、胎土は灰色、色調は赤橙色であることから、備前焼である。

漆付不明製品 脆弱であるため、図化していない。第4章第3節で詳述するが、褐色を呈した5cm四方の塊となっており、厚さ0.5mmの皮状のものが2、3枚重なった状態で大きく2つに折られた状態でまとまっている。

これらの遺物は概ね17世紀代と思われる。

SK092 出土遺物 (図33、図版28)

軒平瓦 (179) あまり例がない浮彫状の上向剣頭文が施文され、四型台圧痕がみられる。

SK100 出土遺物 (図34、図版29・30)

土師器皿 (180 ~ 184) 180・181は灰白系の色調で口径6~7cm台の平坦な底部をもつものである。182・183は黄橙系の色調で口径8cm台の体部を大きく外反させる。184は灰白系の色調で口径9cm台の内湾する器形で口縁端部から見込みに煤が付着するものである。180~183は3段階のもので、184は京都型S系列に類似しており10A~B期に相当する。

輸入青磁碗 (185・186) 185は口縁端部がやや丸みを持つ玉縁状口縁で、胎土は黄橙色、釉は灰黄色である。186は外底が無釉、見込みに花弁の中に「寿」字のスタンプ文を施し、胎土は灰色、釉は淡緑色である。共に龍泉窯系のやや粗製なもので、D類の範疇で、14世紀後半~15世紀前半のものである。

輸入青磁盤 (187) 精良な胎土をもち青緑色の厚い釉が掛かり、豊付が釉剥離された底部片で、見込みには双魚文が貼り付けられる。器形や施文の特徴からはⅢ類であるが、高台幅がやや太いことから時期的にはⅣ類に相当するものと思われる。

輸入染付皿 (188) 景徳鎮窯系の内湾皿である。見込みに枝花鳥文が描かれ、高台は小さく豊付に砂が付着し、底部は凹む。E群皿である。

国産陶器椀 (189) 胎土が灰白色、釉は黒褐色、口縁は外側に短く屈曲する口径7cm台の小型の天目椀である。釉が掛からない胴部下半から外底は褐色を呈している。脇を水平に切る輪高台であることか

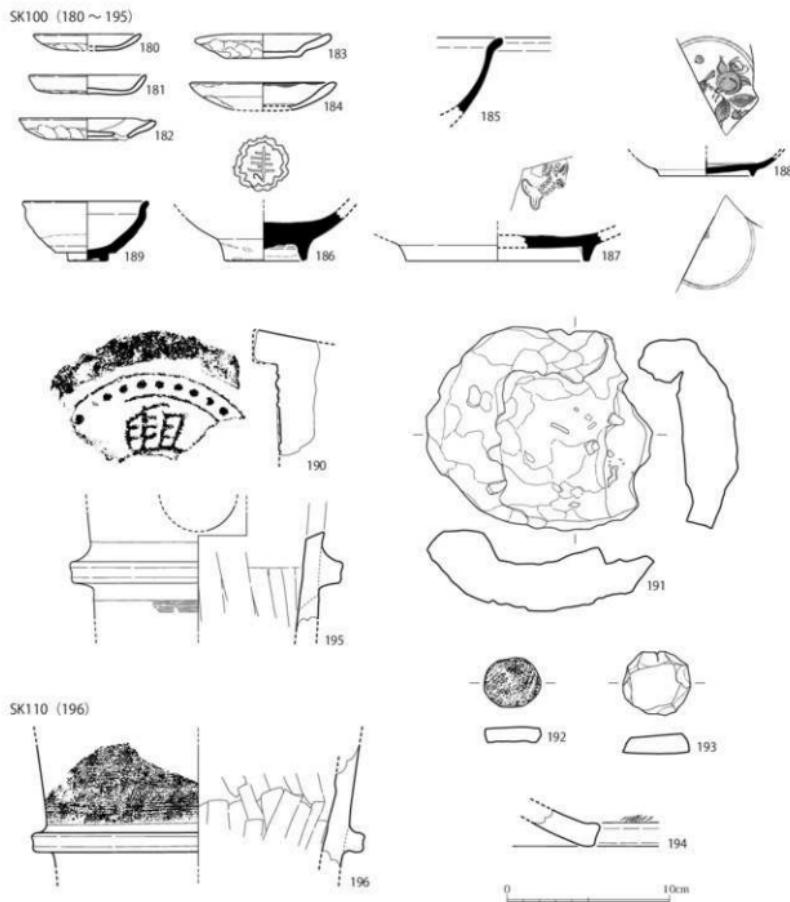


図 34 SK100・110 出土遺物実測図 (S=1/3)

ら瀬戸大窯 3段階のものである。

軒丸瓦 (190) 外周に珠文を配した圓線内に「興福寺」銘を配した軒丸瓦で、上半部が出土している。5mm以下の黒色粒が多く混じる。

鉄滓 (191) 楠形鉄滓である。842gを量る。

土製品 (192・193) 共に瓦質土器を素材とした土製円板で、192は径3cm台、193は径4cm台である。192は側縁が研磨されている。

埴輪 (194・195) 194は口縁の傾き、平面の形状から蓋形埴輪の笠端部と判断した。195は円筒埴

輪である。外面がB種ヨコハケ調整、内面が縦方向の板状ナデ調整、タガは比較的高く浅いM字状を呈し、スカシは円形である。

これらの遺物は、埴輪（194・195）は古墳時代中期、青磁は14～15世紀であるが、主体は16世紀前半のものである。

SK110 出土遺物（図34、図版30）

埴輪（196）円筒埴輪である。外面がB種ヨコハケ調整、内面が縦方向の板状ナデ調整、タガは比較的高い台形である。

第4節 17世紀後半～18世紀の遺構と遺物

第1項 遺構

土坑

SK020（図35、図版13）

調査区西寄りで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈し、南北長4.1m、東西長2.8mを測る。深さは北側で0.4m前後であるが、南側では0.9m前後を測り、南に向かって傾斜している。東西および南側壁面はほぼ垂直に下降し、断面も矩形を呈する。埋土は中粒砂を基本とし、礫を多量に含んでいるなど、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。北半を中心に20～30cmの礫が底面近くで多く出土している。

東側約1.5mで検出したSK050と南辺をほぼ東西一直線上に揃えており、南北方向の規模も近似するなど、一連の遺構であることを窺わせている。

出土遺物は多種多様で、古代の須恵器、中世の土師器、陶磁器類、瓦類、鉄滓、焼土などがある。唐津焼等が出土していることから、埋め戻しの開始時期は17世紀前半と考えられるが、後述するSK050と軸を揃えて隣接していることから、同時期と判断した。

SK050（図36、図版13～15）

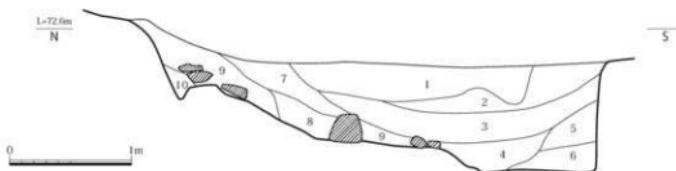
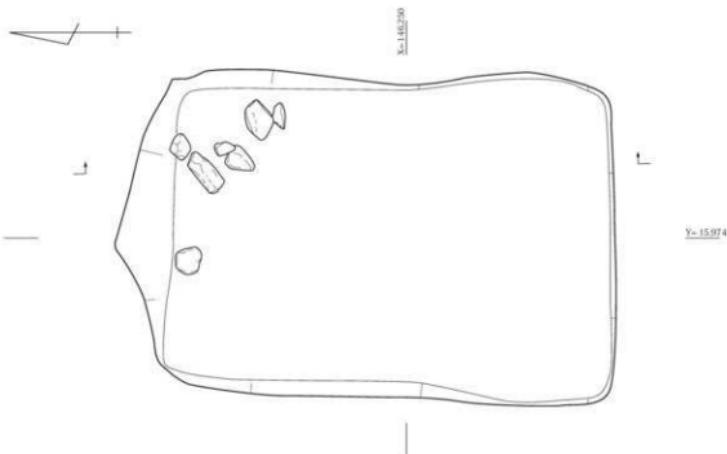
調査区中央、やや西寄りで検出した土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈するが、北辺はやや幅が狭く、弧を描く。南北長4.3m、東西長2.1mを測り、深さは北側で1.3m、南側で1.0mを測る。壁面はほぼ垂直に下降し、東壁はオーバーハング気味である。

この土坑では一旦、全体を掘り込んだ後、南半部は50cm前後の扁平な石材の間に小礫を敷き並べつつ埋め戻し、その上部には2本の丸太材が30cmの間隔をあけ、土坑長辺に直交する形で平行に据え置かれている。北側の丸太材は長さ180cm、直径20cm、南側の丸太材は長さ160cmで直径15cmである。北側の丸太は埋め戻された土の肩口部分に据えられており、北側に検出された切り株を埋置する際の足場的な施設であった可能性がある。

北側では底面に10～60cm前後の石が乱雑に敷かれ、その上部に根切りされた切り株が正置されている。切り株の根回りは約130cmで、高さ約100cmを測る。幹の部分は周囲を切り落とし、長方形状に残すなどの加工がみられる。樹種は特定できなかった。

埋土は中粒砂を基本とし、礫や地山ブロックを多量に含んでいるなど、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

SK020の報告でも記したが、両者は南辺をほぼ東西一直線上に揃えており、性格は不明ながらも一連の遺構であることを窺わせている。



1. オリーブ黒 5Y3/2 細砂混中粒砂（径 50～100mm の垂角錐状シルトブロック、疊多量に含む）
2. 岩 5Y4/1 砂質細砂（シルトブロック、礫が 1 層に比して少ない）
3. 黄灰 2.5Y4/1 中粒砂混細砂（径 50～100mm の垂角錐状シルトブロック多量に含む）
4. 岩 5Y4/1 中粒砂混細砂（ラミナ形成、疊多量に含む）
5. オリーブ黒 5Y3/2 中粒砂（疊多量に含む）
6. オリーブ黒 5Y3/2 中粒砂（疊少ない）
7. 黄灰黄 2.5Y4/2 細砂混中粒砂（疊多量に含む）
8. 岩オリーブ 5Y4/2 中粒砂（径 50mm 前後の垂角錐多量に含む）
9. 黄灰黄 2.5Y4/2 中粒砂（径 20～30mm の垂角錐状シルトブロック多量に含む）
10. 岩 5Y4/1 中粒砂（疊入物少ない）

図 35 SK020 平面・土層断面図 (S=1/40)

出土遺物には、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、瓦類などがある。肥前染付の時期から 18 世紀代が下限と思われる。

SK070 (図 37、図版 15)

調査区東寄りで検出した土坑である。平面形態は東西に長い不整な楕円形を呈し、南北長 1.7m、東西長 3.3m を測る。底面は段状を成し、深さは最深部で約 0.4m を測る。埋土は礫や土器、炭化物を含む細砂である。

出土遺物には、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類、砥石・石鍋、瓦類、轆羽口、鉄滓のほか、埴輪

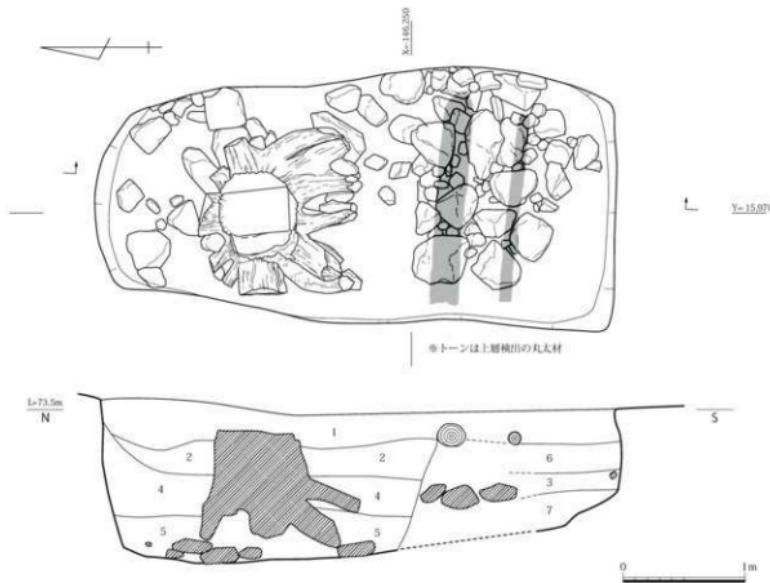


図36 SK050 平面・土層断面図 (S=1/40)

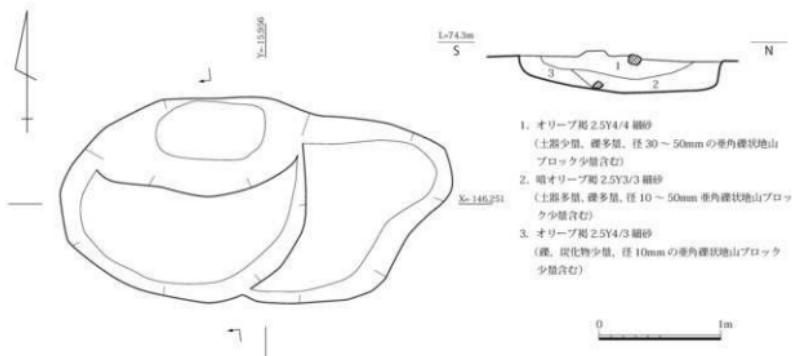


図37 SK070 平面・土層断面図 (S=1/40)



図38 SK050 出土遺物実測図 (S=1/3)

などがある。小片のため図化できていないが、肥前染付の時期から18世紀代が下限と思われる。

第2項 遺物

土坑

SK050 出土遺物 (図38、図版30・31)

国産染付椀 (197) 体部が直線的にのびる肥前系染付椀で、薄青色の呉須で山木などの風景が描かれる。全形が不明なため、肥前Ⅲ～Ⅳ期のものと指摘するに留めておく。

国産陶器椀 (198・199) 198は体部が直線的にのびる口縁で、外面が青緑色、口縁端部から内面は淡緑色の釉が掛かる。199は内側が斜行する高台をもつ体部下半片で、外面が上半に釉が掛かるがその下半は露胎する。釉調から198・199は同一種類のものと思われる。肥前Ⅲ期、内野山窯のものである。

軒平瓦 (200) 瓦当中央の三葉文が先端に3本、左右に2本ずつ、両際の唐草文も2又になっていることから、いわゆる橋文軒平瓦と称されるものである。器面は良好に焼され黒色であり、胎土は黒色粒がわずかに混じる。近世Ⅳ期のものと思われる。

これらの遺物からは下限が18世紀代とされる。

第5節 表土出土遺物 (図39、図版31)

土師器皿(201) 黄橙系の色調で内湾する器形の口径10cm台のものである。口縁端部に煤が付着する。3段階のものと思われる。

瓦器皿 (202) 見込みにジクザク状の暗文ミガキを施した平底のものである。

瓦質土器 (203) 端部が内側に拡張する上面が平坦な口縁部で、外面には2条の端正な突帯が貼り付けられ、2連1単位の渦文が間隔をあけてスタンプされ、その下には直線的な窓を有する。窓部についてはあまり見ない形態であるが、おそらく風炉と思われる。胎土は灰白色で、ほとんど砂粒が混じらない精良なものである。

輸入白磁皿 (204) 輪高台をもつ内湾する皿で、光沢がある白色釉が掛けられ、外底周辺は無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎする。福建産のD群で、口径が11cm台と大きめのものである。

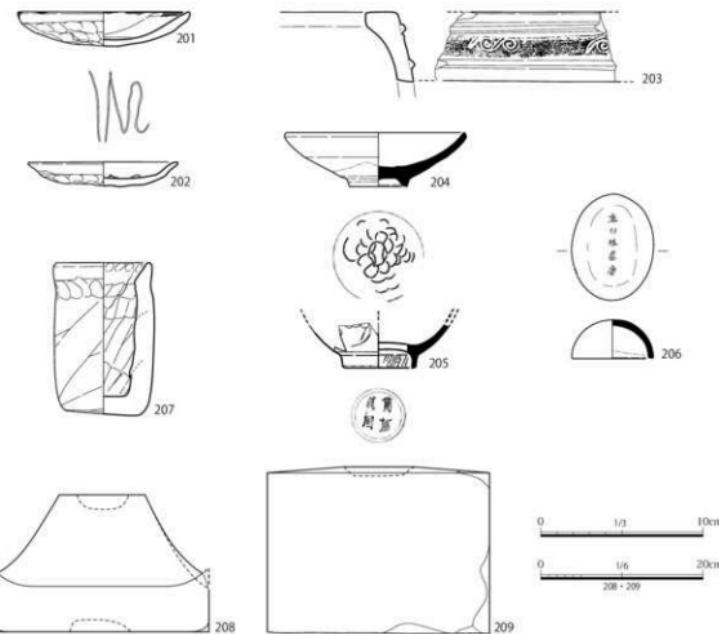


図39 表土出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

輸入染付椀 (205) 景徳鎮窯系の見込みが盛り上がるいわゆる漫頭心椀である。見込みには1条の圓線内に花芯文が線刻され、外底には「萬福倣同」の字款が呉須で書かれる。体部内外面は無地と思われる。見込みには砂が付着する。E群椀である。

国産染付蓋 (206) 合子状の蓋で、濃青色の呉須で「鹿印練歎磨」と書かれる。1893年に現在の花王の前身である長瀬商店より発売され広く使われたとされるが、その時期については不明である。

上師器焼塩壺 (207) 筒状の焼塩壺である。黄橙系の色調で胎土には5mm以下の長石等が混じる。口縁はナデ調整で、その下方は一部指オサエを残しながら板状ナデ調整で平滑に仕上げられている。内側は縱方向の指ナデがみられるが、凹凸は残したままである。

石製品 (208・209) 花崗岩製五輪塔の部材である。208は火輪ではぞ穴を上下に有し、軒上の両角が欠損する。軒下辺が27.0cm、軒中央部高5.8cm、全高16.9cm、ほぞ穴は軒上辺の幅6.0cm・深さ2.0cm、下辺は幅7.5cm、深さ1.5cm、軒の反り高1.0cmである。209は地輪ではぞ穴を有し、下辺面は粗い整形だが各側辺は概ね平滑である。上下辺長は共に27.2cm、全高20.3cm、ほぞ穴幅7.0～7.5cm、深さ1.5cmである。大きさ、石材からは同一石塔の部材の可能性もある。

第4章 自然科学分析

第1節 平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡出土の動物遺体

1. はじめに

平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡の発掘調査において、15世紀以降の遺構から動物遺体が出土した。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。

2. 方法

肉眼で試料を観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。骨端の癒合状態や解体痕および切断痕の有無を観察し、記載を行った。

3. 結果

同定されたのは、貝類でアカニシ (*Rapana venosa*)、鳥綱でキジ科 (Phasianidae sp.)、哺乳綱でニホンザル (*Macaca fuscata*)、ニホンジカ (*Cervus nippon*)、イノシシまたはブタ (*Sus scrofa* or *Sus scrofa domesticus*)、ウシ (*Bos taurus*) である (表1)。以下、遺構ごとにその特徴を述べる。

• S-7

ウシの角芯1点が出土した。先端部は欠損しており、切断や加工の痕跡はない。

• S-10

イノシシまたはブタの尺骨および桡骨が出土した。どちらも右側であり、同一個体の可能性が高い。

• SK020

アカニシの股軸が1点出土した。

• S-30 (SD060)

哺乳綱の右上腕骨が1点出土した。近位部および遠位端を欠いた骨幹部破片であり、種の同定には至らなかった。

• S-46

ニホンジカの左上腕骨が1点出土した。骨端は癒合しており、成獣個体と考えられる。

• SD060

最も多くの動物遺体が出土した。鳥類で、キジ科 (ニワトリ?) の左上腕骨が出土した。遠位端には、刃物による切断と思われる平坦面が確認された。哺乳類では、ニホンザルの左大腿骨、イノシシまたはブタの右上腕骨、右尺骨、右桡骨、左大腿骨、右脛骨、ウシの角芯が出土した。ウシの角芯は4点出土しており、2点に切断の痕跡が認められた。暗褐色土から出土した角芯 (図40-8) は、鋸によるとと思われる切断の痕が、角幹を一周するように入る。幅1.5mm、深さ2mmほどの切れ目である。また、角芯の根元には、切断による平坦な面が観察できた。もう一方の角芯 (図40-10) には、根元に近い部分に、角芯に対して斜め45°から刃物を振り下ろしたような、半円状の面を形成する傷跡が観察された。

• SK070

イノシシまたはブタの右上腕骨が出土した。近位端部が残存する試料で、大結節が欠損する。骨端は癒合しているため、成獣個体と考えられる。

• S-80

哺乳綱の胸椎が出土した。ほぼ完存で、中型の哺乳綱である。

• SK092

イノシシまたはブタの左大腿骨が出土した。近位端および遠位部を欠損する骨幹部破片である。

• S-104

ウシの角芯が出土した。複数の破片に分かれるが、同一個体の角芯と考えられる。破片のため、切断や加工などの痕跡は不明である。

• SE105

アカニシの股軸破片、イノシシまたはブタの右肩甲骨、右大腿骨、右脛骨が出土した。イノシシまたはブタ右大腿骨の近位部前面には、2本の解体痕が認められた。

4. 考察

今回同定された動物遺体は、切断痕や解体痕のあるキジ科、イノシシまたはブタなどであり、日常的な食料残滓が廃棄された可能性が高い。また、切断・加工痕のあるウシの角芯が出土しているため、骨角器製作後の不要な部位が廃棄されと考えられる。ウシの角は、角芯を角鞘が覆い、一般的に角鞘のみが骨角器素材として用いられる。そのため、角芯に残る切断や加工の痕跡は、角鞘を取り外すあるいは角鞘を切断する際につけた痕跡と考えられる。角鞘を取り外した後の角芯は不要なため、廃棄されたのであろう。骨角器製作をうかがわせる角芯の出土から、周囲に手工業を行った場があったと考えられる。なお、ウシの出土は角に限られ、四肢骨など他の部位は見られなかった。したがって、ウシはその場で解体されたのではなく、必要な部位だけが持ち込まれたと考えられる。当時の都市の空間構造を考える上で貴重な試料と思われるが、当時の骨角器製作の状況把握には動物遺体からだけではなく、共伴した人工遺物などの分析や周辺遺跡との関わりもあわせて考える必要があると思われる。

《参考文献》

- 松井 章（2008）動物考古学。312p, 京都大学学術出版会。
西本豊弘・松井 章（1999）考古学と動物学。210p, 同成社。

表1 出土動物遺体一覧

遺構名	層位	日付	分類群	部位	左右	状態	破片数	重量(g)	備考
S-7	—	200527	ウシ	角芯	不明	先端欠	1	50.5	
S-10	褐色砂	200525	イノシシ or ブタ	尺骨	右	骨幹部(滑車切痕部残)	71	72.3	
	暗褐色砂	200526	イノシシ or ブタ	桡骨	右	近位部残	1	15.2	
SK020	青灰 色土	200526	アカニシ	殻		殻軸	1	110.4	
S-30	—	200601	哺乳綱	上腕骨	右	遠位骨幹部残	1	12.1	
S-46	—	200602	ニホンジカ	上腕骨	左	ほぼ完存	1	104.5	骨端癒合
SD060	暗褐色 色土	200610	キジ科	上腕骨	左	遠位部残	1	3.1	ニワトリ?、遠位端に切断面
	暗褐色 色土	200610	ニホンザル	大顎骨	左	近位部残	18	12.2	
	褐色砂	200609	ウシ	角芯	不明	先端~角幹一部欠	1	28.2	
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	大顎骨	左	近位端(後面)残	1	15.2	骨端癒合
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	上腕骨	右	遠位端残	1	20.9	
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	上腕骨	右	近位端残	3	27	骨端未癒合
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	尺骨	右	近位端残	1	9.9	
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	尺骨	右	遠位端残	1	1.2	骨端未癒合
	褐色砂	200612	イノシシ or ブタ	桡骨	右	遠位端残	2	6.3	骨端未癒合
	褐色砂	200612	哺乳綱	不明	不明	破片	112	21.2	
	青灰 色土	200612	ウシ	角芯	不明	根本・角幹一部欠	16	40.6	
	暗褐色 色土	200612	ウシ	角芯	不明	完存	1	45.5	根本付近に半円状の面を形成する加工痕
	暗褐色 色土	200612	ウシ	角芯	不明	ほぼ完存	6	38.2	根本: 切断、角幹: 鋸?による切断痕
	暗褐色 色土	200612	イノシシ or ブタ	脛骨	右	ほぼ完存	31	82.3	骨端未癒合
SK070	—	200612	イノシシ or ブタ	上腕骨	右	近位端(大結節欠、遠位端欠)	1	50.3	骨端癒合
S-80	—	200617	哺乳綱	胸椎	—	ほぼ完存	1	5.3	中型
SK092	—	200622	イノシシ or ブタ	大顎骨	左	骨幹部(近位端欠、遠位部欠)	1	21.9	骨端未癒合
S-104	—	200622	ウシ	角芯	不明	破片	11	63.6	
SE105	黒褐色 色土	200623	アカニシ	殻	—	殻軸	3	26.1	
	—	200624	イノシシ or ブタ	肩甲骨	右	近位部残	1	11.3	
	—	200624	イノシシ or ブタ	大顎骨	右	骨幹部(近位端欠、遠位部欠)	1	23.2	骨端未癒合、近位部前面に解体痕
	—	200624	イノシシ or ブタ	脛骨	右	骨幹部(近位端欠、遠位部欠)	9	13.9	



1.アカニシ歯 (SK020青灰色土) 2.キジ科左上腕骨 (SD060暗褐色土) 3.ニホンザル左大腿骨 (SD060暗褐色土)
 4.ニホンジカ左上腕骨 (S-46) 5.イノシシまたはブタ右上腕骨 (SK070)
 6~10.ウシ角芯 (6-7 SD060褐色砂 7 SD060暗褐色土 8 SD060暗褐色土 9 SD060青灰色土 10 SD060暗褐色土)

図40 出土動物遺体

第2節 輜羽口・埴堀の自然科学分析

平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡で出土した輪羽口、埴堀の自然科学分析を行った。

1. 分析対象

名称	点数	出土地点	報告番号
輪羽口（図41）	1点	SD060 褐色砂	図25-100
埴堀（図43）	1点	SD071	図28-114

2. 分析内容

2.1. 材質分析

輪羽口・埴堀に特異な金属が付着していないかを調べるために、蛍光X線分析（以下XRF）による材質分析を行った。分析は元素マッピングによる全体観察、及びマッピングで観察された特異なポイントの点分析を行った。

2.2. 微小部観察

元素マッピングで観察された特異なポイントの観察を行った。

3. 分析方法及び使用機器

3.1. XRF

XRFは試料にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光X線を観測することにより、試料の構成元素を同定する分析方法である。点分析では微小領域に対して蛍光X線分析を行い、その箇所の元素組成を調べる。一方マッピング分析では資料表面を複数の微小領域に分割し、各微小領域において蛍光X線分析を行う。得られたデータから各元素のシグナル強度を2次元化し、その分布状態を色により視覚化する。

分析条件は大気雰囲気、管電圧50 kV、管電流 $1000\mu\text{A}$ 、コリメータ 0.2×0.2 または $0.5 \times 0.5\text{ mm}^2$ 、照射時間120 sec/point、また、X線管球のターゲットはロジウム（Rh）である。

- ・蛍光X線分析装置「EA6000VX」（日立ハイテクサイエンス）

3.2. 顕微鏡観察

実体顕微鏡および顕微鏡カメラを用いて微小部の拡大画像を保存した。

- ・実体顕微鏡「Leica M205C」（ライカマイクロシステムズ）
- ・顕微鏡用デジタルカメラ「FLEXACAM C1」（ライカマイクロシステムズ）

4. 結果

4.1. XRF

轟羽口

XRFによる元素マッピングの結果、銅（Cu）、銀（Ag）、金（Au）は検出されず、鉄（Fe）が強く検出される箇所が観察された（図42）。よって、鉄製品の製造に使用された可能性が考えられた。なお、破断面（図41右下）は凹凸が大きいため測定していない。

堀

XRFによる元素マッピングの結果、堀内側においてFe、Cu、Auが検出された（図44）。Auが検出された箇所の顕微鏡観察を行ったところ、2箇所において金色の粒が観察された（図45、観察箇所図43-1、図43-2）。他のAu検出箇所では観察されず、内部に存在するものと考えられた。元素マッピングでCuが検出された箇所（図43-3）、及び観察された2つの金色粒のXRFを行った。蛍光X線スペクトルを図46～48に示す。Cu付着箇所ではFe、Cuが強く検出され、銅製品の製造に使用された可能性が考えられた（図48）。



図41 蕤羽口

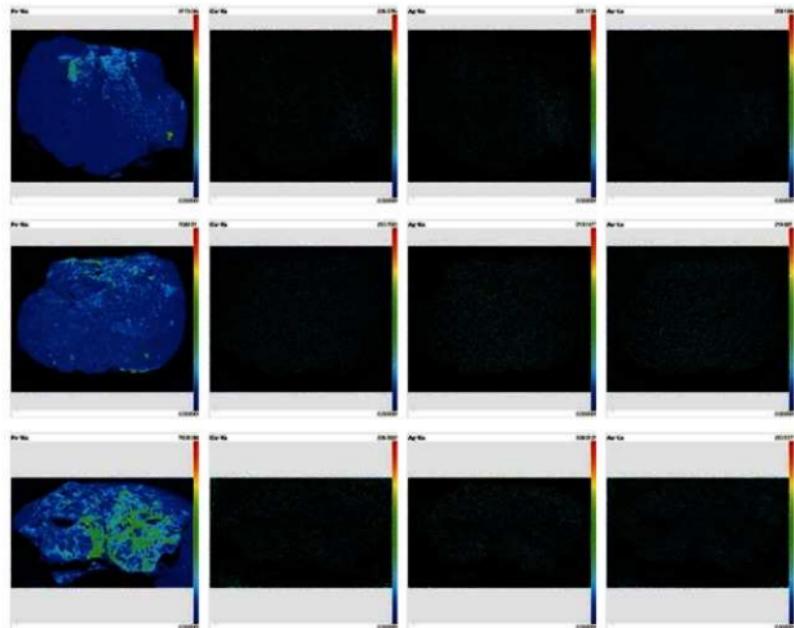


図42 蕤羽口元素マップ（上段より内側、外側、端面、左よりFe、Cu、Ag、Au）

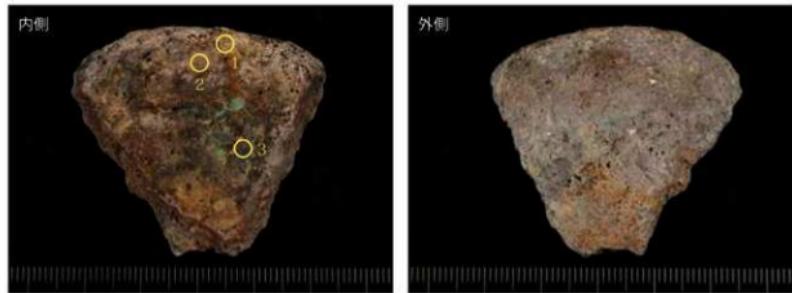


図 43 増堀 (1 ~ 3 : XRF 箇所)

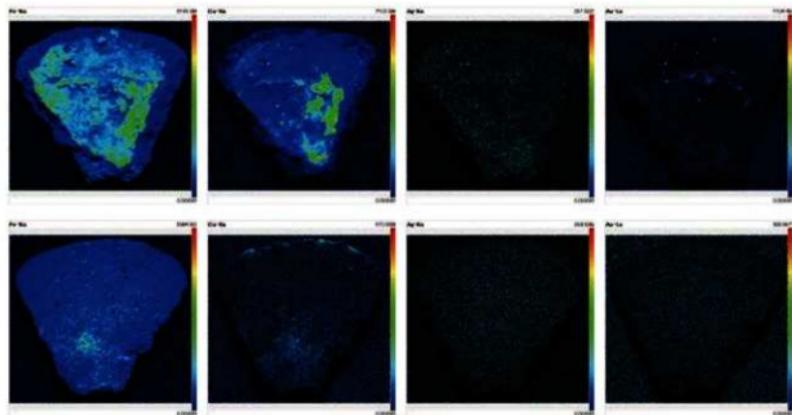


図 44 増堀元素マップ (上段より内側、外側、左より Fe、Cu、Ag、Au)

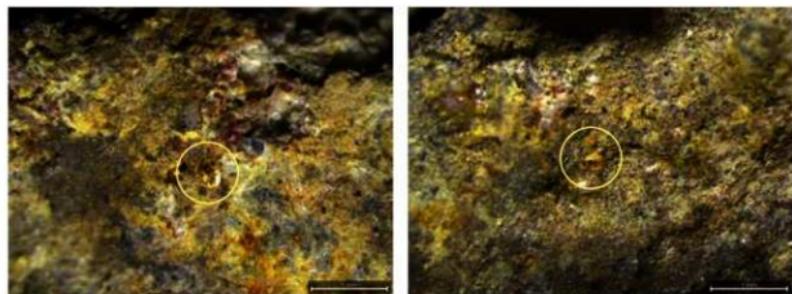


図 45 金色粒の顕微鏡観察像 (左より観察箇所図 43-1、図 43-2)

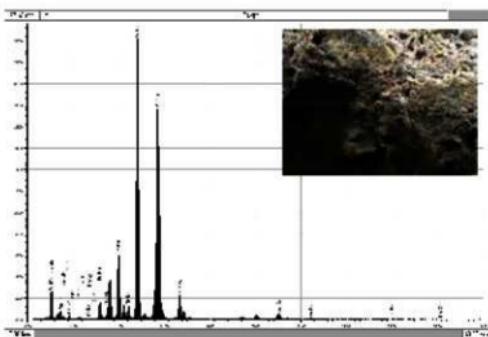


図 46 金色粒の XRF スペクトル（分析箇所図 43-1）

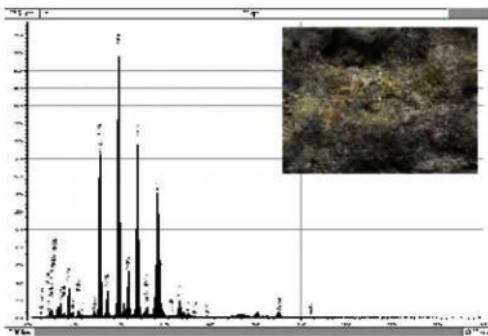


図 47 金色粒の XRF スペクトル（分析箇所図 43-2）

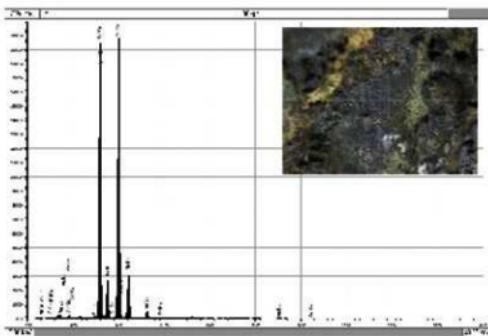


図 48 塗堿内側 Cu 付着箇所の XRF スペクトル（分析箇所図 43-3）

第3節 漆付不明製品の自然科学分析

平城京左京四条六坊八坪・奈良町遺跡出土漆付不明製品の自然科学分析を行った。

1. 分析対象

SK068 出土漆製品 1 点（図 49）

図 49 に示した白棒で囲った部分について、実体顕微鏡による観察を実施した。また、微細片を断面観察に使用した。さらに、図 53 に示した細片の実体顕微鏡による観察と赤外分光分析を行った。

2. 分析内容

2.1. 材質分析

資料の材質を調べるため、赤外分光分析で材質を分析した。

2.2. 微小部観察

資料の表面に観察される繊維状の物質を調べるために実体顕微鏡で微小部観察を行った。

2.3. 断面観察

資料の内部構造を調べるために、微小片をエポキシ樹脂に包埋し、ミクロトームを用いて作製した薄片を永久プレパラートとし、生物顕微鏡および金属顕微鏡で観察した。

3. 分析方法及び使用機器

3.1. 赤外分光分析

赤外分光分析は採取した有機質に赤外線を照射して、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、有機質の材質を同定する分析法である。

装置は全反射フーリエ変換型赤外分光分析装置（以下 ATR-FTIR）（バーキンエルマー製 Spectrum Two）を使用し、分解能 4cm^{-1} 、検出器 LiTaO₃、で分析した。測定は破片を採取し、そのまま装置に設置した後、分析した。その後、資料の反対面を再度同じ条件で分析した。

3.2. 顕微鏡観察

実体顕微鏡および顕微鏡カメラを用いて微小部の拡大画像を保存した。

- ・実体顕微鏡「Leica M205C」（ライカマイクロシステムズ）
- ・顕微鏡用デジタルカメラ「FLEXACAM C1」（ライカマイクロシステムズ）

3.3. 断面観察

永久プレパラートを観察することで、生物顕微鏡は透過画像が得られ、金属顕微鏡は落射画像が得られる。生物顕微鏡による観察はオリンパス製 BX53、撮影はオリンパス製顕微鏡デジタルカメラ DP-71、金属顕微鏡による観察はライカ製 DM2700M、顕微鏡デジタルカメラ撮影はライカ製 MC190HD を使用した。

4. 結果

4.1. 赤外分光分析

図 53 に示した破片の ATR-FTIR による分析の結果、繊維状の物質が確認された面と確認できな

かった面の両面とも 3400cm^{-1} 付近、 2920cm^{-1} 、 1700cm^{-1} 付近、 1600cm^{-1} 付近、 1400cm^{-1} 付近、 1000cm^{-1} 付近に漆に特徴的なピークが観察された（図 50）。以上の結果より、これらの物質の主成分は漆であると確認できた。

4.2.顕微鏡観察

図 49 に示した白枠部分の実体顕微鏡による観察の結果、いずれも表面にも幅 $10 \sim 20 \mu\text{m}$ の纖維状の物質の不規則に配置された状態が確認できた（図 51、図 52）。また、図 49 の B では纖維状のものの断面が中空の状態であることが確認できた。

4.3.断面観察

図 54 に示した断面は何らかの胎に漆が染み込んだものであると考えられた。白丸印の部分をさらに拡大した画像を図 55 に示した。さらに、図 56 には矢印で示した表面には円形に近い直径 $12 \sim 20 \mu\text{m}$ の中空の断面が確認できた。様々な組織が確認できることより和紙などの纖維に漆が染み込んだものではなく、革に漆が染み込んだものの可能性が考えられたが、胎の材質を決定するまでには至らなかった。



図 49 微小部観察箇所（白枠部分 A ~ D）

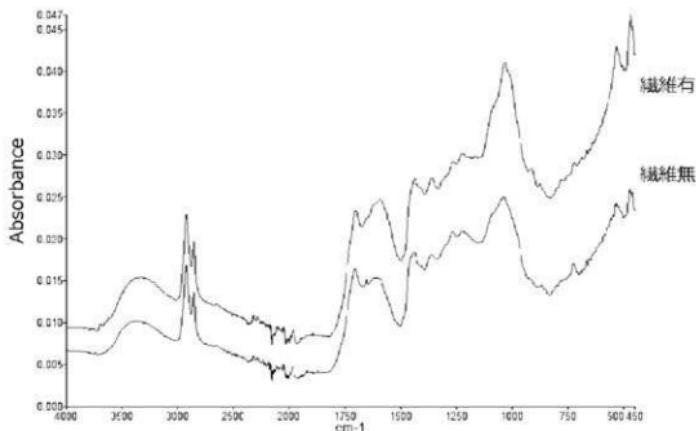


図 50 図 53 に示した破片の赤外吸収スペクトル

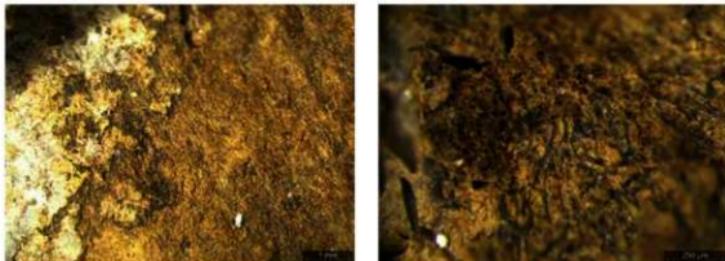


図 51 実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-A 右：図 49-B）



図 52 実体顕微鏡による微小部観察像（左：図 49-C 右：図 49-D）

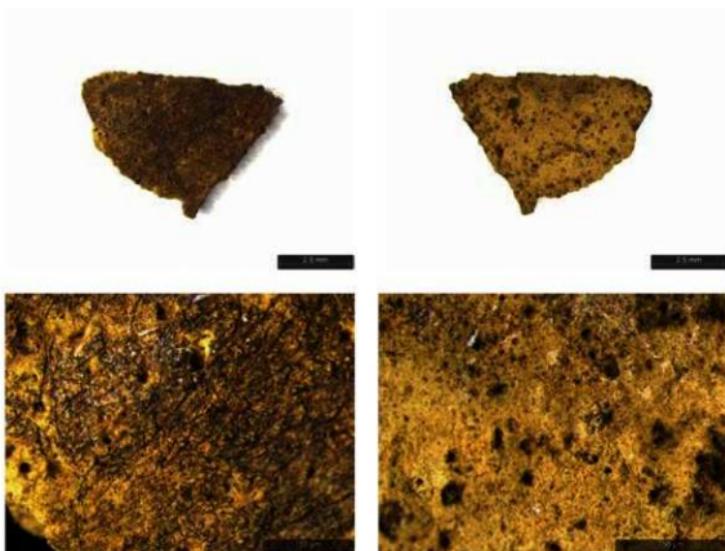


図 53 実体顕微鏡による（上図左：纖維状物質有、上図右纖維状物質無）微小部観察像

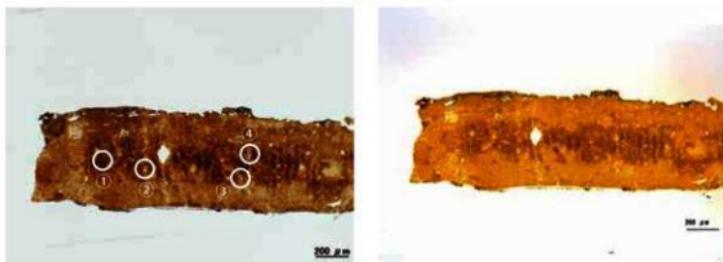


図 54 領微鏡による断面観察像（全体）（左：透過、右：落射）

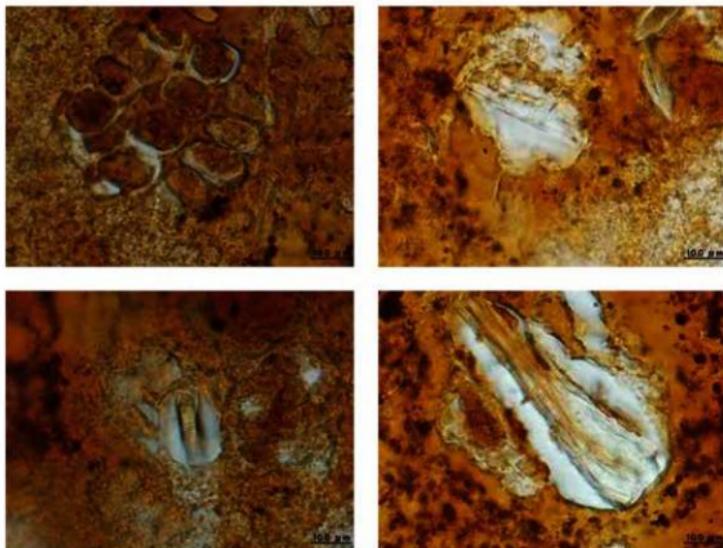


図 55 領微鏡による断面観察像（左上：図 54- ①、右上：図 54- ②、左下：図 54- ③、右下：図 54- ④）

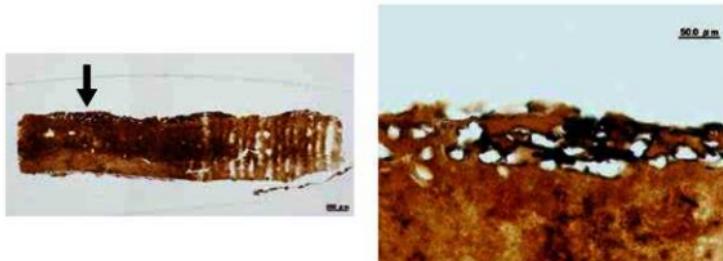


図 56 領微鏡による断面観察像（左：全体、右：繊維状物質の断面の拡大（矢印部分））

第5章 調査のまとめ

第1節 遺構の変遷

(1) 古代以前

本調査地における確実な土地利用は、11～12世紀の整地土が確認されているが、それより古い中世以前の遺構として二間×一間以上の掘立柱建物（SB120）がある。出土遺物が小片のため特定できないが、遺構の新旧関係に加えて、柱穴の平面形態が隅丸方形、梁間が二間であること、さらに中世の建物とは異なり北側へ展開することなどから、古代に遡る可能性が考えられる。

時期は特定できないが、直刀であることから古い形状が窺える鉄刀（図6-15）が地山面に接する整地土から出土していることから、中世以前の可能性も想定される。また、その刀身は非常に薄く実用品とは考えにくいことから、調査地南側に隣接する式内社である率川神社との関連性も想定すべきだろう。今後、発掘調査も含めた周辺の歴史的環境についての調査研究が深まっていくことが期待される。

なお、本調査地における最も古い出土遺物としては埴輪があり、円筒埴輪は第IV期に比定されるも



図57 今回の調査地と周辺の古墳

のである。第2章第2節で記したように、本調査地周辺には発掘調査で確認された率川古墳や漢國神社東南古墳のほか、時期が特定できないものの開化天皇陵に比定されている坂上山古墳がある（鐘方2009、図57）。率川古墳や漢國神社東南古墳、やや南東に位置する元興寺境内の脇戸古墳（奈良市1994）から出土している円筒埴輪は第V期のものであり、本調査地の埴輪はそれより古いものである。つまり、本調査地周辺にはこれらより古い別の古墳がかつてあったことが想定される。なお、北西約1km離れた地点で発掘調査が行われた左京二条五坊北郊のヤイ古墳（奈良市2001）、HJ600次SX01（奈良市2010）は共に全長18mの前方後円墳であるが、ここでは第IV期の埴輪が出土している。

(2) 12～14世紀

12～14世紀の遺構として確定できるものは、東側を中心に整地土（SX080）、当該期の土器類が多く出土する土坑（SK063・090）、溝（SD040）がある。これらの出土遺物は瓦器椀と土師器皿が多く、時期的には13世紀代のものが主体である。奈良町遺跡では、本調査地北側の左京三条六坊十坪（HJ559次、奈良市2014）・十一坪（HJG9次、元文研2021）などでは12世紀後半～13世紀にかけて遺構

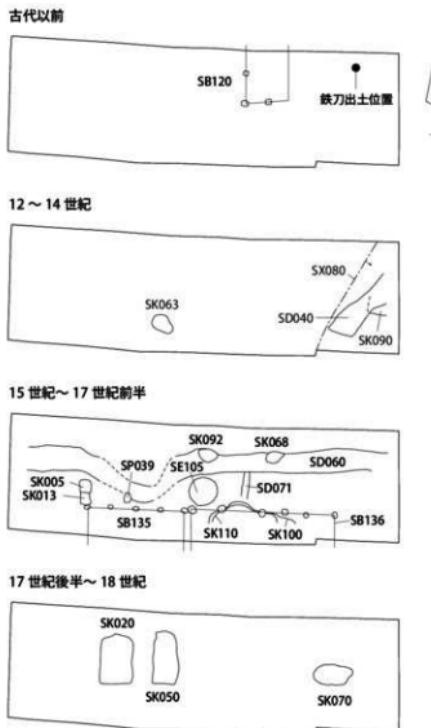


図58 遺構変遷図

数が増大するようである。本調査地でもこの時期から土地利用が活発化されていくが、その密度は高くなく宅地などの縁辺であった可能性が想定される。

(3) 15～17世紀前半

本調査地で全面的に遺構が展開するのは、15世紀に入ってからである。大半は15世紀～17世紀前半にかけての遺構であり、掘立柱建物が2基のほか、溝、井戸、土坑がある。

掘立柱建物（SB135・136）は、調査区外の南側に展開するもので、SB136については柱穴の床面に礎石が置かれていた。柱穴からの遺物には時期幅があるが、その下限は16世紀代である。なお、東西方向に延びる溝（SD060）は建物群と軸方向がそろっており、15世紀～16世紀前半の遺物が主体であることから併存したものであり、区画もしくは境界としての性格が想定される。この溝は現在の率川神社との境界よりも約10m北側に位置し、建物群もその敷地内へ及ぶことになる。つまり、この時期には現在の神社敷地境界は成立していなかったことは確かであろう。なお、建物群の北側に井戸（SE105）、土坑（SK068）があり、溝が埋没した後と考えられる16世紀後半～17世紀前半のものであることもこの想定を裏付けられる。

当該期の遺構からは、コンテナ20箱に及ぶ大量の鉄滓のほか、金色粒が付着した埴輪（図28-114）など鍛冶関連遺物のほか、漆付不明製品や第4章第1節で詳述されたように日常的な食糧残滓であるキジ科やイノシシまたはブタの骨、骨角器製作残滓と考えられるウシの角芯などが出土しており、多様な生産活動が行われたことが想定される。

(4) 17世紀後半～18世紀

17世紀後半以降は遺構・遺物共に少なくなるが、直軸3～4mのやや大型の土坑（SK020・050・070）が調査区の北半にみられる。これらは前述したように16世紀後半までには埋没した東西方向の溝（SD060）を切るように造られている。特にSK050は1mを越える大きな切り株が埋められていること、調査区全体を覆う1m以上の近世の整地土から、この一帯において大規模な土地造成が行われたものと考えられる。近世の出土遺物は多くはないが、明らかな19世紀の陶磁器類などは少ないことから17世紀後半～18世紀の間であると思われる。

（引用文献）

- 奈良市教育委員会 1994「2元興寺旧境内の調査（2）僧房推定地 西北行小子房の調査 第39次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度
- 鍾方正樹 2009「率川古墳と外京条坊および出土埴輪」「奈良市埋蔵文化財調査年報」平成18（2006）年度 奈良市教育委員会
- 奈良市教育委員会 2001「7.ヤイ古墳・平城京左京二条五坊北郊の調査 第437次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成11年度
- 奈良市教育委員会 2010「平城京跡（左京二条五坊北郊）の調査 第600次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成19（2007）年度
- 奈良市教育委員会 2014「南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ 第559次調査）出土資料－」
- 公益財団法人元興寺文化財研究所 2021「平城京左京三条六坊十一坪・奈良町遺跡（HUG9次）－令和元年度発掘調査報告書－」

第2節 手工業生産関連遺物の出土について

(1) 問題の所在

中世都市における手工業民の活動については、1980～1990年代を中心として都市の周縁性の問題にかかわり注目が集まつた（綱野 1978、石井 1981 ほか）。奈良においても文献史学・歴史地理学など複数分野からアプローチがなされているが（豊田 1934ab・1935abc、藤田 1989 ほか）、発掘資料をもとにした研究についてはほとんど進んでおらず、実態がつかみにくい。これは限定的な調査が多い奈良において、まとまつた手工業生産関連の遺物が出土する地点が極めて限られており、文献史料との比較検討が十分なされてこなかつたことが大きな理由である。こうした状況下、今回の調査の大きな成果は、中世に遡るまとまつた金属器生産関連遺物が見つかったことと、加工痕を持つものを含む多量の獸骨が見つかったことで、中世都市奈良における手工業生産の具体像を提示できた点にある。

(2) 今回の調査で見つかった手工業生産関連遺物

今回の調査では主に13世紀から17世紀初頭まで連續して椀形鉄滓を含む鉄滓や轆羽口が出土し、また15世紀以降、17世紀初頭までの遺構から多数の動物遺体が出土している。動物遺体には解体痕や加工痕があるものが多数見られ、特に牛角は角鞘を取り外した角芯のみが出土しており、角の加工を行っていたことを示している。また、アカニシ貝の出土は貝紫染色の原材料である可能性もある。こうした手工業の痕跡が見られるのと同時に、解体痕を持つキジ科の骨にみられるように、食糧残滓の存在が認められるほか、シカ、イノシシ、サルなどは奈良周辺の自然環境下に生息する動物であり、特にシカはその殺傷が禁じられていることから、都市へ入り込んで死亡した動物の遺体処理が行われていたことも想定できる。

こうした遺物の出土状況からは、当地が多様な手工業生産を行う場であったと同時に、動物遺体の廃棄や処理なども行う複合的な性格の場であったと考えることができる。

(3) 中世都市奈良の手工業生産関連遺物

中世都市奈良における手工業生産関連遺物は、基本的に都市内部でまとめて見つからない点が特徴である（佐藤 2022）。都市形成期である11・12世紀には平城京左京四条六坊八坪（市490次：市概報平成15年度）、平城京左京三条六坊十坪（市559次：市年報平成18年度）などで比較的まとまつた金属器生産の痕跡が確認されているほか、13世紀以降は都市内各所で散発的に鉄滓や轆羽口が出土しているが、今回の調査地ほどの集中出土は類例を見ない。このことは獸骨・加工骨の出土事例でも同じで、これらは金属器生産関連遺物以上に散発的であり、まとまつた出土は今回の調査地が唯一である。今回の調査で見つかった金属器生産関連遺物と獸骨・加工骨は極めて特異なものと評価できよう。ただし、平城京左京三条五坊十三坪（市354次：市概報平成8年度）では16世紀後半と考えられる埋桶遺構SX04から解体痕のあるイヌ、イノシシ、ウマ、シカ、マグロ、アワビが見つかりっている。この調査地は中世の都市域の外れにあたり、隣接地の調査（市117次：市概報昭和61年度）からは近世の遺構から多数の獸骨が見つかるなど特殊な様相を呈する（松井 1997）。

(4) 中近世移行期における変化

中世都市奈良から近世奈良町へと都市構造が変化するなかで、考古資料から最大の変化を読み取ることができるのは、元興寺旧境内における金属器生産関連遺物の大量出土である。元興寺旧境内は中世をおおして何らかの都市規制が働いていたよう、主要伽藍が退転したのも無秩序に町屋化しなかった。ところが、16世紀後半から17世紀前半にかけて急速に都市化し、17世紀前半には大量の金属器生産関連遺物が出土するようになる（佐藤 2003・2022）。このことは天領化に伴う都市政策の一環として手工業生産関連の再編が行われた可能性を想起させるが、元興寺旧境内域におけるこの変化が、今回の調査地における金属器生産関連遺物の消滅と年代を一にすることは注意が必要である。今回の調査地から南へ約300mの地点で行われた調査（市688次：市年報平成27年度）では江戸時代前期の大量的金属器生産関連遺物が見つかっている。ここは貞享4（1687）年刊『奈良図』には刀鍛冶の集住地とされており、これを裏付けるような遺物の出土状況である。ただし、ここでは動物骨は伴っていない。元興寺旧境内においても動物骨は確認されておらず、両者が分離した形で再編が行われている。

(5) 中近世以降期における手工業生産

中世後期～末期における奈良の手工業生産は、今回の調査によって金属器生産と骨角器生産、食物残滓と動物遺体処理が並立する複合型とすることができるようになった¹⁾。また、今回の調査地は都市域の外れに位置しており、公設コンビナートではなく、自然発生的に形成された場とすることが自然である。これに対し、近世以降の手工業生産のあり方は金属器生産と動物遺体の取り扱いが分離し、また特に金属器生産においては中世からの連続を辿れない新しい工房の出現が特徴的である。特に動物遺体処理については身分制度の問題も関わっており²⁾、為政者の都市政策との関係を考えることができる。まだまだ資料が十分とは言い難いが、今回の調査成果が投げかけるものは大きい。

註

- 1) 11世紀から中世を通じて手工業関連遺物が出土する平城京左京三条六坊十坪（市559次：市年報平成18年度）でも金属器生産関連遺物とともに獣骨や加工痕のある鹿角などが出土している。なおこの調査地は奈良市教育委員会のご厚意により、出土遺物全点の観察を行った。
- 2) 丹生谷哲一や山村雅史によると、奈良における馬の治療や斃死牛馬の取り扱いに、河原者と呼ばれる人々が関わっていたとのことである（丹生谷 1997、山村 1999）。

《参考引用文献》

- 網野善彦 1978『無縫・公界・業』平凡社（1996年に増補版刊行）
 石井進 1981「都市鎌倉における『地獄』の風景」御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館
 佐藤垂聖 2003「中世奈良町と元興寺」『統文化財学論集』文化財学論集刊行会
 佐藤垂聖 2022「中世都市奈良の考古学的研究」吉川弘文館
 豊田武 1934 a 「大和の諸座」（一）歴史地理六四一三 歴史地理学会
 豊田武 1934 b 「大和の諸座」（二）歴史地理六四一六 歴史地理学会
 豊田武 1935 a 「大和の諸座統篇」（上）歴史地理六六一一 歴史地理学会
 豊田武 1935 b 「大和の諸座統篇」（中）歴史地理六六一二 歴史地理学会
 豊田武 1935 c 「大和の諸座統篇」（下）歴史地理六六一三 歴史地理学会
 丹生谷哲一 1997「中世河原者に関する史料断片」「部落解放なら」第7号 奈良県部落解放研究所
 藤田裕嗣 1989「十六世紀都市住人の活動から見た商品流通」『日本都市史入門』I 空間 東京大学出版会
 松井章 1997「考古学から見た動物利用」「部落解放なら」第8号 奈良県部落解放研究所
 山村雅史 1999「中近世移行奈良における河原者－寛文四年の申状文の再検討－」『研究紀要』第4号 奈良県立和関係史料センター

関連資料

図 59 検出遺構配置略図

表 2～8 報告遺物一覧 (1)～(7)

表 9～14 検出遺構および出土遺物一覧 (1)～(6)

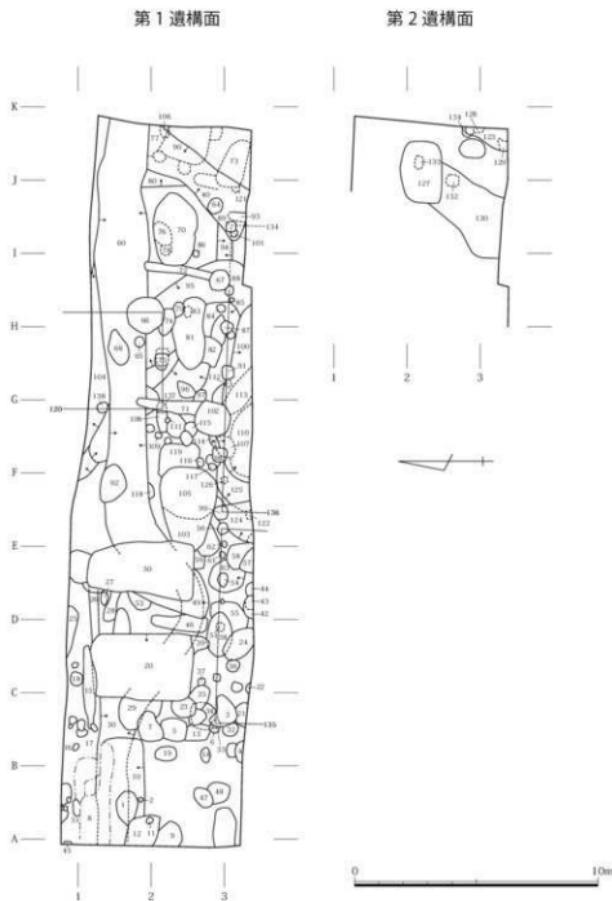


図 59 検出構配位置図 (S=1/200)

表2 報告遺物一覧 (1)

報告番号	種別	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (長)	器高 (幅)	底径 (厚)	重	残存率	地土・素材	焼成・色調	特記事項	
1 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				6.7	-	1.3	-	*	100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石	良 浅黄褐 7.5YR8/4	
2 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				8.6	-	1.2	-	*	100%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・カサリ織	良 浅黄褐 7.5YR8/4	
3 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				8.6	-	1.5	-	*	70%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 稍2.5YR7/6	
4 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				(9.3)	-	2.0	-	*	50%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 稍2.5YR7/6	
5 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				(12.3)	-	2.3	-	*	50%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 稍2.5YR7/6	
6 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				(13.3)	-	2.5	-	*	25%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 稍2.5YR7/6	
7 国6 開版 16 SX080	土師器 皿				12.9	-	2.1	-	*	50%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/3	
8 国6 SX080	土師器 皿				(13.0)	-	3.1	-	*	20%	やや粗 微小砂粒	良 浅黄褐 10YR8/3	
9 国6 開版 16 SX080	調査器 鉢				*	-	(4.7)	-	*	13縫部織片	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	東播系
10 国6 開版 16 SX080	調査器 鉢				*	-	(4.7)	-	*	口縫部織片	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N7/0	東播系
11 国6 SX080	瓦器 桶				(12.0)	-	(2.6)	-	*	25%	密 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
12 国6 開版 16 SX080	瓦器 桶				(12.7)	-	4.2	-	4.8	35%	密 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
13 国6 SX080	瓦器 桶				(13.4)	-	4.1	-	*	50%	密 微小砂粒	良 灰 N6/0	
14 国6 開版 16 6型 輪入陶器 盤		*			(5.3)	-	*			脚・底部 織片	やや粗 ~ 3mm 石英・長石	良 灰 N6/0	二次焼成 タイ
15 国6 開版 17 66型 金屬製品 刀					(41.7)	-	5.2	-	40	542.7	粗		
16 国10 SD040	土師器 皿				(12.5)	-	2.3	-	*	25%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織	良 稍2.5YR7/6	
17 国10 開版 17 SD040	土師器 皿				(12.6)	-	2.7	-	*	50%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	やや不良 稍2.5YR7/6	
18 国10 SD040	土師器 皿				*	-	(2.9)	-	*	20%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・雲母・カサリ織	良 浅黄褐 7.5YR8/6	
19 国10 開版 17 SD040	土師器 皿				*	-	(5.2)	-	*	口縫部織片	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・チャート	良 浅黄褐 10YR8/3	
20 国10 SD040	瓦器 桶				*	-	(3.7)	-	*	体部織片	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
21 国10 SD040	瓦器 桶				*	-	(4.6)	-	(4.6)	底部50%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・チャート	良 灰 N4/0	
22 国10 SD040	瓦器 桶				*	-	(1.2)	-	5.6	底部50%	やや粗 微小砂粒	良 灰 N5/0	
23 国10 開版 17 SD040	瓦質土器 瓶				*	-	(6.9)	-	*	体部50%	粗 ~ 4mm 石英・長石・雲母	やや不良 灰 N5/0	
24 国10 開版 17 SD040	輸入逆器 白磁碗				*	-	(3.8)	-	*	体部織片	微小砂粒・黒色粒 灰白	良 5YB/1	
25 国10 開版 17 SD040	輸入逆器 白磁皿				*	-	(2.9)	-	*	体部織片	微小砂粒 灰白	良 10YR8/2	
26 国11 開版 17 SK063	土師器 皿				9.0	-	1.7	-	*	100%	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 稍2.5YR7/6	
27 国11 開版 17 SK063	土師器 皿				(9.0)	-	1.0	-	*	40%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/3	
28 国11 開版 17 SK063	土師器 皿				(9.0)	-	1.1	-	*	50%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 2.5YR7/8	
29 国11 開版 17 SK063	土師器 皿				(11.9)	-	3.0	-	*	60%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 稍2.5YR7/8	
30 国11 開版 17 SK063	土師器 皿				11.8	-	2.6	-	*	50%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・チャート	良 稍2.5YR7/8	
31 国11 開版 18 SK090	土師器 皿				8.2	-	1.4	-	*	50%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/4	
32 国11 SK090	土師器 皿				(9.0)	-	1.2	-	*	35%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/4	

表3 報告遺物一覧(2)

報告 番号	種類	写真 回数	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (直) (幅)	高さ (幅)	底径 (厚)	重 量	残存率	施土・素材	焼成・色調	特記事項	
33 回11	圓盤	18	SK090	土師器 皿	9.3	-	1.9	-	*	60%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母・チャート	良 焼 7.5YR7/6	
34 回11	圓盤	18	SK090	土師器 皿	(9.4)	-	1.5	-	*	70%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 焼 2.5YR7/6	
35 回11			SK090	土師器 皿	12.9	-	2.5	-	*	70%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄褐 10YR8/4	
36 回11	圓盤	18	SK090	土師器 皿	(13.5)	-	2.8	-	*	25%	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/6	
37 回11	圓盤	18	SK090	土師器 皿	13.6	-	3.0	-	*	80%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/4	
38 回11	圓盤	18	SK090	瓦器 椀	(8.3)	-	2.1	-	*	60%	研 微小砂粒	良 灰 N6/0	
39 回11			SK090	瓦器 椀	9.3	-	1.1	-	*	25%	やや粗 微小砂粒	良 灰 N4/0	
40 回11	圓盤	18	SK090	瓦器 椀	12.8	-	4.0	-	5.2	100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N5/0	
41 回11	圓盤	18	SK090	瓦器 椀	(13.0)	-	3.9	-	(5.0)	25%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
42 回11			SK090	瓦器 椀	(13.9)	-	3.9	-	6.4	25%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
43 回11			SK090	瓦器 椀	(14.2)	-	4.2	-	(4.4)	35%	やや粗 微小砂粒	良 灰 N6/0	
44 回11			SK090	瓦器 椀	(13.8)	-	5.0	-	4.3	20%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 N7/0	
45 回11			SK090	瓦器 椀	*	-	(2.9)	-	5.0	底部 100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
46 回11	圓盤	19	SK090	土製品 土輪刀板	7.9	-	7.9	-	1.8	122.7	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 白 N9/0	輸入白磁陶 軸用
47 回11	圓盤	19	SK090	埴輪 円筒埴輪	*	-	(6.2)	-	*		やや粗 ~ 3mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母・チャート	良 焼 5YR7/6	
48 回21			SB135e	土師器 皿	*	-	(1.1)	-	*		やや粗 ~ 1mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 焼 5YR7/8	
49 回21			SB135d	土師器 皿	*	-	(2.8)	-	*		やや粗 口縁部断片	良 焼 5YR7/6	
50 回21			SB135d	土師器 皿	*	-	(3.7)	-	*		やや粗 口縁部断片	良 浅黄褐 10YR8/3	
51 回21	圓盤	19	SB135a	瓦質土器 鉢	*	-	(4.1)	-	*		やや粗 口縁部断片	良 N4/0	
52 回21			SB135e	瓦質土器 鉢	*	-	(4.8)	-	(7.7)	底部 50%	やや粗 ~ 6mm 石英・長石・チャート	良 N6/0	
53 回21			SB136e	土師器 皿	*	-	(2.5)	-	*		やや粗 体部断片	良 白 N9/0	
54 回21			SB136d	土師器 皿	*	-	(2.0)	-	*		やや粗 体部断片	良 灰白 10YR8/2	
55 回21	圓盤	19	SB136a	輪入追加 青磁盤	*	-	(4.0)	-	*		研 微小白色粒	良 白 N9/0	(施) 明褐色 10CY8/1 施乳黑色
56 回21	圓盤	19	SB136b	瓦 瓦片	(11.4)	-	(8.0)	-	5.3		やや粗 ~ 8mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母・チャート	良 灰 N6/0	
57 回22	圓盤	19	SP039	眞津 眞津銅津	10.4	-	10.8	-	4.4	536.1			
58 回23			SD060	土師器 皿	7.1	-	1.4	-	*	100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・クサリ鐵	良 浅黄褐 7.5YR8/4	
59 回23			SD060	土師器 皿	7.5	-	1.5	-	*	95%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/3	
60 回23			SD060	土師器 皿	(12.4)	-	3.2	-	*	35%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石	良 灰白 10YR8/2	
61 回23	圓盤	19	SD060	土師器 皿	7.4	-	1.7	-	*	100%	やや粗 ~ 6mm 石英・長石・雲母・チャート	良 浅黄褐 10YR8/3	
62 回23			SD060	土師器 皿	7.3	-	1.6	-	*	70%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 焼 5YR8/3	
63 回23			SD060	土師器 皿	7.7	-	1.3	-	*	80%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ鐵・雲母	良 浅黄褐 7.5YR8/4	

表4 報告遺物一覧 (3)

報告 番号	所蔵 機関	写真 回数	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (直) 幅	器高 (幅)	底径 (厚)	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項	
64 国23	国版 19	SD060 暗褐色土	土師器 皿	8.3 - 2.0 - *					100%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母	良 にぶい黄褐色 10YR7/2		
65 国23	SD060 暗褐色土	土師器 皿	(8.4) - 1.9 - *						50%	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・カサリ繊	良 浅黄褐色 10YR8/3		
66 国23	SD060 暗褐色土	土師器 皿	10.0 - 2.2 - *						100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	良 淡黄褐色 2.5YR8/3		
67 国23	SD060 暗褐色土	土師器 釜	* - (6.0) - *							やや粗 ~ 4mm 石英・長石・チャート	良 灰白 10YR8/2		
68 国23	国版 20	SD060 暗褐色土	瓦質土器 蓋	* - (3.2) - *						口縁部断片	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・チャート	良 暗灰 N3/0	
69 国23	SD060 暗褐色土	五質土器 擂鉢	* - (6.0) - *							口縁部断片	やや粗 ~ 4mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
70 国23	国版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 青磁碗	* - (3.8) - *						口縁部断片	街 微小砂粒	良 灰白 N8/0	(種) 明オリーブ灰 2.5GY6/1 龍泉窯系
71 国23	国版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 青磁碗	* - (3.4) - 5.2					底部 100%	街 ~ 2mm 微小黑色粒	良 白 N9/0	龍泉窯系	
72 国23	国版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 青磁碗	* - (2.0) - *						やや粗 体部断片	良 ~ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 にぶい橙 7.5YR7/4	龍泉窯系
73 国23	SD060 暗褐色土	輸入磁器 白磁組	* - (2.2) - *							体部断片	街 微小砂粒	良 白 N9/0	景德鎮窯系
74 国23	国版 20	SD060 暗褐色土	輸入磁器 笠付碗	* - (4.0) - *						口縁部断片	街 微小砂粒	良 灰白 N8/0	景德鎮窯系
75 国23	SD060 暗褐色土	瓦 平瓦	(10.2) - (7.7) - 2.5							やや粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母	良 灰 N6/0		
76 国24	国版 20	SD060 褐色砂	土師器 皿	7.6 - 1.8 - *					100%	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・カサリ繊・チャート	良 浅黄褐色 10YR8/3		
77 国24	国版 20	SD060 褐色砂	土師器 皿	7.6 - 1.3 - *					100%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・カサリ繊・雲母	良 浅黄褐色 7.5YR8/3		
78 国24	SD060 褐色砂	土師器 皿	8.0 - 1.7 - *						100%	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・雲母	良 浅黄褐色 7.5YR8/3		
79 国24	国版 20	SD060 褐色砂	土師器 皿	8.9 - 1.8 - *					60%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ繊・雲母	良 相 5YR7/6		
80 国24	SD060 褐色砂	土師器 釜	(25.4) - (7.3) - *							体部 35% ~ 2mm 石英・長石	良 灰白 10YR8/2		
81 国24	SD060 褐色砂	調度器 鉢	* - (4.0) - *							口縁部断片	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	東播磨系
82 国24	SD060 褐色砂	五質土器 擂鉢	* - (6.6) - *							体部断片	やや粗 ~ 2mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
83 国24	国版 20	SD060 褐色砂	瓦質土器 擂鉢	* - (6.5) - *						口縁部断片	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
84 国24	SD060 褐色砂	瓦質土器 擂鉢	* - (6.8) - 10.0						底部 100%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・黒色粒	やや不良 灰 N6/0		
85 国24	国版 20	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁碗	(11.6) - 6.0 - *					25%	街 微小黑色粒	良 白 N9/0	(種) 明オリーブ 灰 2.5GY7/1 龍泉窯系	
86 国24	国版 20	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁碗	* - (3.0) - 5.4					底部 100%	街 微小黑色粒	良 灰白 N8/0	(種) オリーブ 10Y5/2 龍泉窯系	
87 国24	国版 21	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁碗	* - (2.8) - 4.2					底部 100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	(種) オリーブ 2.5GY5/1 龍泉窯系	
88 国24	国版 21	SD060 褐色砂	輸入磁器 青磁碗	* - (3.0) - 4.4					底部 100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	(種) 明オリーブ 5GY7/1 龍泉窯系	
89 国24	SD060 褐色砂	輸入磁器 白磁組	* - (1.3) - 4.2						底部 100%	街 微小砂粒	良 白 N9/0	高台内里 福建	
90 国24	国版 21	SD060 褐色砂	輸入磁器 笠付小鉢	(7.6) - 3.8 - (2.7)					25%	街 微小黑色粒	良 白 N9/0	景德鎮窯系	
91 国24	国版 21	SD060 褐色砂	国産陶器 皿	(12.0) - 3.0 - (7.0)					25%	やや粗 微小砂粒	良 灰白 7.5YR8/1 瀬戸	(種) 灰白 7.5Y8/2 瀬戸	

表5 報告遺物一覧(4)

報告 番号	種類	写真 回数	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (高) (幅)	轟高 (厚)	底径 (厚)	重	残存率	施土・素材	焼成・色調	特記事項
92 回24	SD060 褐色砂 壺			*	- (2.8) -	*			口縁部破片 微小6粒	半々粗 灰白 10YR8/1 古墳#		(施) H6E3 5Y8/1 古墳#
93 回24	SD060 褐色砂 壺			*	- (7.1) -	*			口縁部破片 ~ 5mm 石英・長石	半々粗 5YR7/8		
94 回24	回版 21	SD060 褐色砂 壺		*	- (5.4) -	*			口縁部破片 ~ 3mm 石英・長石・黒色粒	半々粗 灰 10R4/3		信楽
95 回25	回版 21	SD060 褐色砂 軒丸瓦		(2.6) - 13.0 -	13.0				半々粗 ~ 3mm 石英・長石・チャート	半々粗 灰 N3/0		
96 回25	SD060 褐色砂 軒丸瓦			(2.4) - (9.0) -	(7.5)				半々粗 ~ 3mm 石英・長石	半々粗 灰 N5/0		
97 回25	SD060 褐色砂 軒平瓦			(5.8) - (14.3) -	6.4				粗 ~ 3mm 石英・長石・黒色粒	粗 灰 N6/0		
98 回25	回版 21	SD060 褐色砂 軒平瓦		(6.4) - (18.0) -	4.3				半々粗 ~ 4mm 石英・長石・黒色粒	半々粗 灰 N5/0		
99 回25	回版 22	SD060 褐色砂 瓦		(8.8) - (11.1) -	(4.2)				粗 ~ 4mm 石英・長石・黒色粒	粗 灰 N6/0		
100 回25	回版 22	SD060 褐色砂 楕円瓦		(5.0) - (6.4) -	(4.0) - (86.2)				粗 ~ 3mm 石英・長石・カサリ織・雲母	粗 浅黄 7.5YR8/4		
101 回25	SD060 褐色砂 土製品			7.0 - 6.8 -	1.3 -	73.4			半々粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母・黒色粒	半々粗 灰 N4/0		瓦質土器用
102 回25	SD060 褐色砂 金属製品 銭貨			(2.2) - (1.7) -	0.1 -	(1.1)			銅			組口○實
103 回26	SD060 青灰色土 壁			7.3 - 1.6 -	*		90%		半々粗 ~ 1mm 石英・長石・カサリ織・雲母	半々粗 浅黄 10YR8/3		
104 回26	SD060 青灰色土 青灰陶			(13.7) - (5.5) -	*			体部 40%	半 微小黑色粒	半 灰白 N8/0		(施) 黒オリーブ 5.5Y6/2 龍泉窯系
105 回26	SD060 青灰色土 壁			*	- (3.3) -	*		口縁部破片	半 微小黑色粒	半 灰白 10YR8/1		(施) にぶい赤 2.5YR4/3 - 7.5YR4/3
106 回26	回版 21	SD060 青灰色土 軒平瓦		(6.6) - (12.8) -	4.0				粗 ~ 5mm 石英・長石・雲母・黒色粒	粗 灰 N6/0		
107 回26	回版 22	SD060 青灰色土 軒平瓦		(15.2) - (13.2) -	8.8				粗 ~ 3mm 石英・長石・黒色粒	粗 灰 N6/0		
108 回26	回版 22	SD060 青灰色土 泥用敷石		13.9 - 16.6 -	6.8 -	1600						
109 回27	回版 22	SD060 瓦質土器 壺		(32.0) - 17.2 -	10.4		70%		半々粗 ~ 1mm 石英・長石	半 灰 N4/0		
110 回27	回版 22	SD060 淡褐色砂 瓶		(10.6) - 16.4 -	(10.6)		80%		半々粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母	半 灰 N4/0		
111 回27	SD060 淡褐色砂 白磁瓶			*	- (2.4) -	*		体部細孔 微小黑色粒	半 白 N9/0			
112 回27	回版 23	SD060 淡褐色砂 青磁瓶		*	- (2.5) -	7.0		底部 100%	半 微小黑色粒	半 灰白 N8/0		(施) オーバー灰 5G5/1 龍泉窯系
113 回27	SD060 淡褐色砂 土製円瓶			7.4 - (7.1) -	3.1 -	150.5			粗 ~ 4mm 石英・長石・雲母・黒色粒	粗 灰白 N7/0		瓦転用
114 回28	回版 23	SD071 土製品 珊瑚		(7.2) - 2.5 -	*	(12.4)			粗 ~ 2mm 石英・長石	粗 灰 N7/0		緑青全粒付着
115 回29	回版 23	SE105 黒褐色土 壁		7.5 - 1.4 -	*		100%		半々粗 ~ 1mm 石英・長石・カサリ織・雲母	半 7.5YR6/4		
116 回29	SE105 黒褐色土 壁			7.8 - 1.4 -	*		100%		半々粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織・雲母	半 7.5YR6/6		
117 回29	回版 23	SE105 土製器 壁		6.4 - 1.2 -	*		100%		半々粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	半 灰白 10YR8/2		
118 回29	SE105 黒褐色土 壁			6.8 - 1.3 -	*		100%		半々粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	半 浅黄 7.5YR8/3		
119 回29	回版 23	SE105 黒褐色土 壁		6.7 - 1.1 -	*		100%		半 微小6粒	半 灰白 10YR8/2		
120 回29	SE105 黒褐色土 壁			7.3 - 1.3 -	*		100%		半 微小6粒	半 浅黄 7.5YR8/3		
121 回29	回版 23	SE105 黒褐色土 壁		(8.7) - 2.0 -	*		35%		半々粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織	半 にぶい粗 7.5YR7/4		

表6 報告遺物一覧(5)

報告番号	種別	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (長)	器高 (幅)	底径 (厚)	重	残存率	施土・素材	焼成・色調	特記事項
122 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	11.0 - 2.6 - *	-	60%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良	灰白 7.5YR8/2			
123 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	(9.4) - 2.0 - *	-	25%	やや粗 微小砂粒	良	灰白 10YR8/2			
124 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	11.1 - 2.0 - *	-	70%	粗 微小砂粒	良	灰白 10YR8/2			
125 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	* - (9.7) - *	-	46部 50%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良	浅黄褐 10YR8/3			
126 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	* - (9.1) - *	-	体部破片	~ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良	灰 N6/0			
127 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	(28.9) - (27.6) - *	-	4部	~ 4mm 石英・長石・雲母・チャート	良	灰 N6/0			
128 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	* - (5.2) - *	-	体部破片	~ 2mm 石英・長石・黑色粒	良	浅黄 2.5Y7/3 (輪) 黒 5YR8/3 層	(輪) に似る 5YR8/3 層		
129 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	* - (1.4) - 4.2	-	底部 80%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良	浅黄 2.5Y7/2 (輪) 黑 5YR8/2 1	(輪) 黑 5YR8/2 1		
130 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	土師器 層	* - (3.1) - 3.8	-	底部 100%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫	良	灰 7.5Y7/2 焼粧 5YR8/4 焼津	(輪) 灰白 7.5Y7/2 焼粧 5YR8/4 焼津		
131 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	石製品 石頭	* - (4.2) - *	-	92.0	口縁部破片	滑石				
132 国29	陶瓶	SE105 黒褐色土 層	金属製品 鉄錆	2.3 - 2.3 - 0.1 - 22	-	-	鋲				元始遺寶	
133 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	6.7 - 1.4 - *	-	100%	~ 1mm 石英・長石	良	浅黄褐 7.5YR8/3			
134 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	6.8 - 1.3 - *	-	100%	~ 1mm 石英・長石・雲母	良	浅黄褐 10YR8/3			
135 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	7.9 - 1.5 - *	-	100%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	良	浅黄褐 7.5YR8/3			
136 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	7.9 - 1.3 - *	-	100%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良	相 5YR7/6			
137 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	8.3 - 1.4 - *	-	100%	~ 3mm 石英・長石・雲母・チャート	良	相 5YR7/6			
138 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	8.9 - 2.0 - *	-	100%	~ 2mm 石英・長石・雲母	良	浅黄褐 10YR8/3			
139 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	(10.5) - 2.0 - *	-	20%	~ 1mm 石英・長石・雲母	良	に似る 黄褐 10YR7/4			
140 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	(11.0) - 2.1 - *	-	25%	~ 1mm 石英・長石	良	浅黄褐 10YR8/3			
141 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	(10.8) - 2.3 - *	-	25%	~ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良	浅黄褐 7.5YR8/3			
142 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	瓦質土器 鉢	8.0 - 5.1 - 8.1	-	100%	~ 2mm 石英・長石・雲母	良	灰 N4/0			
143 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	瓦質土器 鉢	(42.7) - (15.3) - *	-	口縁部 30%	~ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良	灰 N5/0			
144 国30	輪入磁器 笠付碗	SE105 暗灰色土 層	(13.4) - 4.9 - (4.4)	-	-	35%	粗 微小砂粒・黑色粒	やや不良 輪入 10YR8/2	渾沌空系			
145 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	国産陶器 層	(10.2) - 2.5 - (5.9)	-	35%	やや粗 微小砂粒	良	灰白 2.5Y8/1 層			
146 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	国産陶器 層	(9.9) - 2.5 - *	-	50%	やや粗 微小砂粒	良	灰白 2.5Y8/2 層			
147 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	国産陶器 層	9.8 - 2.5 - 5.8	-	70%	やや粗 微小砂粒	良	灰白 10YR8/2 層			
148 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	国産陶器 層	10.0 - 2.6 - 5.6	-	80%	やや粗 微小砂粒	良	灰白 10YR8/1 層			
149 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	国産陶器 層	(11.5) - 6.2 - 4.2	-	25%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石	良	浅黄褐 7.5YR8/4 (輪) 黑 7.5Y8/4	(輪) 黑 7.5Y8/4		
150 国30	陶瓶	SE105 暗灰色土 層	国産陶器 層	* - (1.7) - 4.3	-	底部 100%	やや粗 微小砂粒	良	に似る 黄褐 5YR7/4 引出物あり 層			
151 国31	SE105 暗灰色土 層	土師器 層	6.6 - 1.4 - *	-	-	60%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	良	灰白 10YR8/2			

表7 報告遺物一覧(6)

報告 番号	種類	写真 回数	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (高)	轟高 (幅)	底径 (厚)	重	残存率	施土・素材	焼成・色調	特記事項	
152 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 盤	土師器 盤	7.2	-	1.5	-	*	100%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母	真 灰白 10YR8/2	
153 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 盤	土師器 盤	8.3	-	1.4	-	*	100%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・クサリ織・雲母	真 にい黄相 10YR7/2	
154 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 盤	土師器 盤	8.3	-	1.4	-	*	100%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母	真 にい黄相 5YR7/4	
155 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 盤	土師器 盤	(10.8)	-	2.1	-	*	50%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	真 灰白 10YR8/2	
156 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 盤	土師器 盤	*	-	(2.5)	-	*		体部細凹 ~ 1mm 石英・長石・クサリ織・雲母	真 灰白 10YR8/2	
157 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 付付盤	土師器 付付盤	8.6	-	(2.7)	-	*	杯部 80%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・クサリ織・雲母	真 浅黄相 7YR8/3	
158 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 蓋	土師器 蓋	(14.0)	-	(7.2)	-	*	体部 25%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母	真 浅黄相 10YR8/3	
159 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 白粘小鉢	輸入磁器 白粘小鉢	*	-	(2.8)	-	*	底部 100%	素	真 白 N9/0	施化粧系
160 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 染付盤	輸入磁器 染付盤	(13.0)	-	2.6	-	(8.0)	10%	素	真 白 N9/0	銀錫窯系
161 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 染付盤	輸入磁器 染付盤	(11.0)	-	3.1	-	(4.0)	40%	やや粗 微小砂粒	真 灰白 N8/0	銀錫窯系
162 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 染付盤	輸入磁器 染付盤	(10.6)	-	3.2	-	5.0	50%	やや粗 微小砂粒	真 灰白 10YR8/1	津州窯系
163 回31	圓板	26	SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	(11.2)	-	6.1	-	4.5	40%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ織	真 浅黄相 7YR8/3	(施) にい小堀 5YR4/3 窯戸
164 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	10.0	-	2.5	-	6.4	70%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石	真 灰白 7.5YR8/1	(施) にい小堀 5YR4/3 窯戸
165 回31			SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	10.0	-	2.5	-	6.1	80%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・黒色粒	真 灰白 N8/0	(施) にい小堀 10YR4/4 窯戸
166 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	10.0	-	2.5	-	6.1	80%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ織	真 浅黄相 7YR8/3	(施) にい小堀 7.5YR4/3 窯戸
167 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	(10.4)	-	2.6	-	5.5	35%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ織	真 灰白 7.5YR8/1	漆塗ざ痕
168 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	*	-	(5.8)	-	*		やや粗 口縁部細片	真 灰白 10R4/2	備前
169 回31	圓板	27	SE105 昭和色土 盤	国産陶器 盤	(36.8)	-	14.6	-	(14.3)	25%	粗 ~ 10mm 石英・長石・雲母	真 粗 2.5YR9/6	信第
170 回32	圓板	27	SE105 昭和色土 土質	瓦質土器 土質	(24.6)	-	(15.6)	-	*		やや粗 ~ 3mm 石英・長石・黒色粒	真 灰 N6/0	
171 回32	圓板	28	SE105 昭和色土 土質	瓦質土器 土質	(30.0)	-	(18.6)	-	*		やや粗 ~ 3mm 石英・長石・黒色粒	真 灰 N4/0	
172 回32	圓板	28	SE105 昭和色土 土質	瓦質土器 土質	14.0	-	(21.7)	-	*		やや粗 ~ 3mm 石英・長石・雲母	真 灰白 N7/0	
173 回32	圓板	28	SE105 昭和色土 金属製品 銅	金属製品 銅	(5.7)	-	(5.7)	-	0.8	43.7	素		
174 回33			SK013 楕円形鉄片	楕円形鉄片	11.7	-	14.4	-	6.1	825.3			
175 回33	圓板	28	SK068 土師器 盤	土師器 盤	8.2	-	1.5	-	*	100%	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・クサリ織・雲母	真 浅黄相 7.5YR8/4	
176 回33	圓板	28	SK068 土師器 盤	土師器 盤	(11.7)	-	1.8	-	*	35%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石	真 浅黄相 7.5YR8/3	
177 回33	圓板	28	SK068 輸入陶器 盤	輸入陶器 盤	(11.0)	-	7.2	-	*	50%	素 微小砂粒	真 灰白 2.5Y7/1	朝鮮
178 回33	圓板	28	SK068 国産陶器 盤	国産陶器 盤	*	-	(3.9)	-	*		体部細凹 ~ 1mm 石英・長石	真 灰白 10R4/2	備前
179 回33	圓板	28	SK092 瓦 軒平瓦	瓦 軒平瓦	(4.6)	-	(8.2)	-	(4.1)		やや粗 ~ 2mm 石英・長石・雲母・黒色粒	真 灰白 N7/0	
180 回34	圓板	28	SK100 昭和色土 盤	土師器 盤	(6.4)	-	1.0	-	*	50%	素 微小砂粒	真 灰白 10YR8/2	
181 回34			SK100 昭和色土 盤	土師器 盤	7.0	-	1.2	-	*	50%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・クサリ織	真 灰白 10YR8/2	

表8 報告遺物一覧(7)

報告番号	種類	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径 (長)	器高 (幅)	底径 (厚)	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項		
182 国34	陶器	国版29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	8.3	-	1.4	-	*	100%	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・雲母	やや不良 に高い黄緑 10YR7/2	穿孔あり	
183 国34	陶器	国版29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	8.2	-	1.5	-	*	50%	やや粗 ~ 7mm 石英・長石・カサリ織	良 浅黄緑 7.5YR8/4		
184 国34	陶器	国版29	SK100 暗灰色土	土師器 皿	(9.0)	-	1.7	-	*	25%	やや粗 微小粒	良 灰白 10YR8/2		
185 国34	陶器	国版29	SK100 輪入追加 青磁斑	輪入追加 青磁斑	*	-	(4.8)	-	*	体部織片	やや粗 微小粒	良 浅黄緑 7.5YR8/4	(種) 灰黄 2.5Y7/2 龍泉窯系	
186 国34	陶器	国版29	SK100 輪入追加 青磁斑	輪入追加 青磁斑	*	-	(3.1)	-	*	底部100%	やや粗 微小粒	良 灰白 N8/0	(種) オーバー灰 2.5G6/1 龍泉窯系	
187 国34	陶器	国版29	SK100 輪入追加 青磁斑	輪入追加 青磁斑	*	-	(1.8)	-	*	底部20%	密 微小黒色粒	良 灰白 N8/0	(種) 明礬灰 10G7/1	
188 国34	陶器	国版29	SK100 暗灰色土 笠付碗	輪入追加 笠付碗	*	-	(1.2)	-	(5.8)	底部35%	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	景德鎮窯系	
189 国34	陶器	国版29	SK100 暗灰色土	国産陶器 碗	(7.5)	-	3.7	-	2.7	50%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・カサリ織	良 灰白 7.5YR8/1	(種) 黒 7.5YR2/1 に高い赤褐 2.5G4/3 漸层	
190 国34	陶器	国版29	SK100 瓦 軒丸瓦		(4.1)	-	(13.2)	-	(7.7)		~ 3mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 灰白 N7/0		
191 国34	陶器	国版30	SK100 楕形瓦		12.6	-	(13.9)	-	6.2	-	842.9			
192 国34	陶器	国版30	SK100 土製品 土割円板	土製品 土割円板	3.1	-	3.5	-	1.0	-	12.6	やや粗 ~ 1mm 石英・長石	良 灰 N5/0	瓦質土器転用
193 国34	陶器	国版30	SK100 土製品 土割円板	土製品 土割円板	4.0	-	4.2	-	1.3	-	19.6	やや粗 ~ 2mm 石英・長石・カサリ織	良 灰 N4/0	瓦質土器転用
194 国34	陶器	国版30	SK100 埴輪 蓋形埴輪	埴輪 蓋形埴輪	*	-	(2.2)	-	*	口縁部織片	粗 ~ 3mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 粗 5YR7/8		
195 国34	陶器	国版30	SK100 圓筒埴輪	埴輪 圓筒埴輪	*	-	(7.4)	-	*	体部織片	粗 ~ 3mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 粗 5YR7/8		
196 国34	陶器	国版30	SK110 埴輪 圓筒埴輪	埴輪 圓筒埴輪	*	-	(7.7)	-	*	体部織片	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・カサリ織・雲母・チャート	良 粗 5YR7/8		
197 国38	陶器	国版30	SK050 國產磁器 笠付碗	國產磁器 笠付碗	(8.9)	-	(3.5)	-	*	20%	密 微小粒	良 白 N9/0		
198 国38	陶器	国版30	SK050 國產陶器 碗	國產陶器 碗	*	-	(5.5)	-	*	体部織片	密 微小粒	良 灰白 N8/0	(種) 露灰 10G6/1 灰白 5Y7/1 内野山	
199 国38	陶器	国版30	SK050 國產陶器 碗	國產陶器 碗	*	-	(2.7)	-	(4.3)	底部25%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・カサリ織	良 灰白 10YR8/2	内野山	
200 国38	陶器	国版31	SK050 瓦 軒平瓦		(11.0)	-	(17.5)	-	4.6		粗 ~ 5mm 石英・長石・チャート	良 灰 N4/0		
201 国39	陶器	国版31	表土	土師器 皿	10.5	-	2.1	-	*	100%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・雲母	良 浅黄緑 7.5YR8/3		
202 国39	陶器	国版31	表土	瓦器 皿	(9.1)	-	1.5	-	*	35%	やや粗 ~ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0		
203 国39	陶器	国版31	表土	瓦質土器 瓦	*	-	(4.3)	-	*	口縁部織片	やや粗 ~ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 暗灰 N3/0		
204 国39	陶器	国版31	表土	輪入追加 白磁皿	(11.0)	-	3.3	-	3.6	35%	密 微小黒色粒	良 白 N9/0	福建	
205 国39	陶器	国版31	表土	輪入追加 笠付碗	*	-	(2.7)	-	4.2	底部100%	密	良 白 N9/0	景德鎮窯系	
206 国39	陶器	国版31	表土	國產磁器 笠付碗	5.0	-	2.4	-	*	100%	密	良 白 N9/0		
207 国39	陶器	国版31	表土	土師器 燒瓶	5.7	-	9.4	-	*	100%	やや粗 ~ 4mm 石英・長石・カサリ織・雲母	良 浅黄緑 7.5YR8/6		
208 国39	陶器	国版31	表土	石製品 火輪	27.0	-	27.0	-	16.9		花崗岩			
209 国39	陶器	国版31	表土	石製品 地輪	27.2	-	27.2	-	20.3		花崗岩			

数値の単位は法寸 cm、重量 g

表9 検出遺構および出土遺物一覧（1）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1		褐色土	土坑	深さ5cm 10→1	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・蓋、平瓦	B2
2			ピット	10→2	土師器（中世～）皿・縁片、瓦質土器鉢	B2
3			土坑	深さ5cm 21・32・33→3	土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・縁・土質、圓座陶器皿・鉢跡、平瓦・丸瓦、縫引口、鉄滓、骨	C3・4
4			土坑	深さ5cm	瓦質土器鉢、圓座陶器皿	C4
5	SK005		土坑	鉄滓多量に出土 13→5→7	土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢・蓋・縁片、圓座陶器皿（縛引）、平瓦、丸瓦、縫引口、鐵滓	C3
6			ピット		土師器（中世～）皿・縁・縁片、瓦質土器縁片、丸瓦、縫土	C3
7			土坑	鉄滓多量に出土	土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器鉢・縁・土質、圓座陶器皿・鉢跡（丹波）、平瓦・丸瓦、縫引口、鐵滓、骨	C2・3
8			土坑	カクラン	土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器鉢、圓座陶器皿・縁・軒平瓦・平瓦	A～C1
9	SK009		土坑	深さ5cm	土師器（中世～）皿・縁片	A・B2
10	褐色砂		土坑		土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（古代）甕・蓋、瓦質土器鉢・縁・火鉢、輪入青磁鉢・蓋・盤、輸入染付碗、圓座陶器皿・蓋（縛引）、縫引口・縫・縫引口、土質、鉄滓・不詳黒製品	A～C2
					土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器縁片・縁・火鉢、圓座陶器皿・縁・軒平瓦・平瓦・丸瓦、鐵滓、燒土	
11			ピット	深さ10cm	圓座陶器縁片	B2・3
12			土坑	カクラン	土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器縁片、圓座陶器皿・鉢跡（縛引）、平瓦	A・B2・3
13	SK013		土坑	鉄滓多量に出土	土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器縁片・縁・輸入染付碗、圓座陶器皿・平瓦・丸瓦・鬼瓦・縫引口、鐵滓、骨	C3
14			ピット		土師器（中世～）縁片、瓦質土器鉢、鐵滓	C3
15			溝		土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・土質、丸瓦・瓦縫片	C・D2
16			ピット	深さ3cm	土師器（中世～）皿・縁片	C1・2
17			ピット	深さ3cm	瓦質土器鉢	C1・2
18			ピット		土師器（中世～）縁片	D1・2
19			ピット		土師器（中世～）縁片、須恵器（中世～）甕、圓座陶器皿・平瓦・丸瓦	C3
20	褐色土		土坑	大型	土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（中世～）甕（束縛）、甕、瓦質土器鉢・土質、輪入青磁鉢、輸入白磁鉢、輸入染付碗、圓座陶器皿（近縛）、甕・甕（唐津）、鐵滓、鐵石、燒土、貝殻	C・D2・3
					土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（古代）甕・蓋、須恵器（中世～）縁・瓦質土器縁片・縁・火鉢・蓋・盤、輸入青磁鉢・盤、輸入白磁鉢、輸入染付碗、圓座陶器皿（近縛）、甕・甕（縛引）、縫引口・縫・縫引口、軒平瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、不明木製品、鐵滓、骨	
					土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器縁片・縁・火鉢・土質、圓座陶器皿（唐津）、甕（唐津）、甕（縛引）、縫引口・縫（唐津）、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、不明木製品、鐵滓、骨	
21			土坑	深さ10cm	土師器（中世～）皿・蓋、瓦質土器土質、圓座陶器皿・平瓦・丸瓦	C4
22			ピット	深さ5cm	瓦質土器鉢	C・D4
23			土坑	深さ15cm	土師器（中世～）蓋、須恵器（中世～）甕、瓦質土器縁片・縁・土質、圓座陶器皿・縁（縛引）、縫・平瓦・丸瓦、縫引口、鐵滓	C3
24			土坑	深さ15cm	土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（古代）蓋、瓦質土器鉢・蓋・土質、圓座陶器皿・縁（縛引）、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、鐵滓	D3・4
25			土坑		瓦質土器縁片	D・E1
26			溝		土師器（中世～）縁片、須恵器（古代）縁片	D・E2
27			土坑	深さ5cm	平瓦	E2
28			土坑	深さ5cm	瓦質土器鉢・圓座陶器皿	D・E2
29			土坑		土師器（中世～）皿・蓋、須恵器（中世～）甕、瓦質土器縁片・縁・火鉢、輪入青磁鉢、輪入白磁鉢、輸入染付碗、圓座陶器皿（近縛）、甕・甕（縛引）、縫・縫引口、軒平瓦・平瓦・丸瓦、縫引口、鐵滓、角・縫	C2・3

表 10 検出遺構および出土遺物一覧 (2)

番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土物		地区
30	SD060	溝	S-60 と同じ	土師器（古代）皿・釜・壺・罐片、須恵器（古代）碗・碟片、磁器（中世～近世）皿・罐・碟片、黒色土器A類罐片、丸頭柄、瓦質土器罐・鉢・釜・壺・釜・壺片、圓陶器罐・平瓦・丸瓦、釘・不明鉄製品、骨・桃核・埴輪			A～C2
31		ピット		土師器（古代）鉢・罐片、須恵器（古代）碗・碟片			B1・2
32		土坑		土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片、瓦質土器罐・鉢片、圓陶器罐・平瓦・丸瓦			C4
33	SB135a	ピット	建物	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片、瓦質土器罐・鉢片、圓陶器罐・平瓦・丸瓦、瓦片			C3
34		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片、瓦質土器罐・鉢片、瓦質土器罐・平瓦・丸瓦			C3
35		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・鉢・輪入青磁碗・平瓦			C・D3
36		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・罐・碟片、瓦片			D4
37		ピット		土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片、瓦質土器罐・平瓦・瓦罐片			D3
38		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片、須恵器（古代）杯、瓦質陶器罐・平瓦・丸瓦、不明鐵製品、瓦片			D・E3・4
39	SP039	ピット		土師器（古代）碗・土師器（中世）皿・釜・罐片・瓦器片、瓦質土器罐・圓陶器罐・輪羽口・平瓦・丸瓦、釘・瓦片			D3
40	SD040	溝	S-95 に類属	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片、須恵器（中世～近世）鉢・束腰・瓦器碗・瓦質土器罐・火鉢・輪入白磁碗・輪入陶器罐・圓陶器罐・輪羽口・平瓦・丸瓦、瓦片			K2～4
41				瓦器碗・平瓦・瓦片、瓦片			
42		土坑		瓦質土器罐・平瓦・丸瓦			E4
43		ピット		土師器（古代）皿・土師器（中世～近世）皿・釜・罐片・瓦質土器罐・平瓦・丸瓦			E4
44		ピット		土師器（中世～近世）皿・罐片・須恵器（中世～近世）皿・平瓦			E4
45		ピット		土師器（中世～近世）皿・須恵器（古代）杯・不明鐵製品			A1
46		溝		土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片・須恵器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・火鉢・大鉢・圓陶器罐・火鉢・瓦片・丸瓦・輪羽口・瓦片・瓦片			D・E3
47		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・須恵器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・丸瓦			A3
48		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・須恵器（古代）碗・瓦片			A3・4
49		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・須恵器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・鉢・罐片・圓陶器罐・火鉢・輪入白磁碗・圓陶器罐・火鉢・天目碗・輪羽口・瓦片・圓陶器罐・火鉢・輪羽口・瓦片・丸瓦・瓦片・瓦片・瓦片			E2・3
50	SB050	土坑	近世の大型土坑	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片・須恵器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・火鉢・輪入白磁碗・圓陶器罐・火鉢・天目碗・輪羽口・瓦片・圓陶器罐・火鉢・天目碗・輪羽口・瓦片・圓陶器罐・火鉢・輪羽口・瓦片・丸瓦・瓦片			E・F2・3
51	SB135c	ピット	建物	土師器（中世～近世）皿・須恵器（古代）碗・瓦質土器罐片・不明鐵製品			D3
52			S-95 に類属	土師器（古代）皿・土師器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・平瓦・丸瓦			
53		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～近世）皿・釜・須恵器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・圓陶器罐・輪羽口・丸瓦			E2
54	SB135d	ピット	建物	土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片・瓦質土器罐片・圓陶器罐・平瓦・丸瓦・瓦片			E3・4
55		土坑		土師器（中世～近世）皿・釜・壺・罐片・須恵器（中世～近世）鉢・束腰・瓦質土器罐・圓陶器罐・平瓦・瓦片・丸瓦			D・E3・4
56	SB135e	ピット	建物	土師器（中世～近世）皿・壺片・須恵器（古代）鉢・瓦質土器罐・釜・圓陶器罐片・瓦罐片・瓦片			F3
57		土坑		土師器（中世～近世）皿・罐片・平瓦			E4
58		土坑		土師器（中世～近世）皿・須恵器（古代）杯・瓦質土器罐・圓陶器罐・平瓦・丸瓦			E4
59		土坑		土師器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・鉢・輪入染付小杯・圓陶器罐・蓋・瓦片・丸瓦・瓦片			E 3
60	SD060	暗褐色土	溝	土師器（中世～近世）皿・釜・台付鉢・罐片・須恵器（中世～近世）皿・瓦質土器罐・火鉢・淺鉢・蓋・釜・火鉢・罐片・輪羽口・青磁碗・蓋・輪入白磁碗・組・輪入染付鉢・輪入白磁碗・圓陶器罐・火鉢・浅鉢・蓋・輪羽口・瓦片・瓦片・瓦片・瓦片			G～K2・3

表 11 検出遺構および出土遺物一覧 (3)

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
60	SD060	褐色砂	溝	S-30 七同一	土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（古代）杯・甕・蓋、須恵器（中世～）鉢・皿 灰陶柄、瓦質土器標跡・鉢・釜・火鉢、輸入青磁碗・盤、輸入白磁碗、輸入 白磁碗、國產瓷片付・皿、輸入陶器標跡、國產陶器標跡・鉢（波紋）・盤・甕（備前）・ 盤（漸層）、鐵鉢、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、瓦・鐵片、鐵口、土製円板、鐵	G ~ K2・3
		青灰色土			土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（古代）甕、須恵器（中世～）甕・鉢・ 灰陶柄、瓦質土器標跡・鉢・火鉢、輸入青磁碗・盤、輸入白磁碗、國產 白磁碗・甕・鐵鉢（備前）・蓋（備前）、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、漆器・ 不明木製品、鐵片、鐵・鐵	
		淡褐色砂			土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（古時代）高杯・瓦器碗・鍋、瓦質土器標跡・ 鉢・花瓶・輸入青磁碗・盤、輸入白磁碗、輸入付付・皿、國產陶器標・甕（備前）・ 鐵鉢（備前）・鐵片、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、貝殻	
61		ビット			土師器（中世～）皿・瓦質土器標跡・平瓦・鐵片	E3
62		ビット			土師器（中世～）皿・鍋片、須恵器（中世～）甕・瓦質土器標跡・鐵片・平瓦・ 丸瓦	F3・4
63	SK063	土坑			土師器（中世～）皿・鍋片、瓦質土器標跡、國產白磁碗片	E3・4
64		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）皿・釜・須恵器（中世～）甕・瓦器碗・瓦質土器標跡・國產陶器標（唐 津）、平瓦・丸瓦	J3
65		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）皿・瓦器碗・瓦質土器標跡・軒丸瓦・平瓦・丸瓦	H2
66	井戸	圓方	近世	土師器（中世～）皿・釜・須恵器（中世～）鉢・瓦質土器標跡・鉢・火鉢、國 產陶器標（信楽）、平瓦・道具瓦	H・I2・3	
		枠内				
67		土坑			土師器（中世～）皿・釜・瓦器碗・瓦質土器標跡・鉢・火鉢、輸入青磁碗・盤、 國產陶器標・天日輪（波紋）・甕（丹波）・鐵鉢（丹波）・鐵・鐵・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、 不明木製品、鐵片、鐵・鐵	I3・4
68	SK068	土坑	漆付不明製品出土		土師器（中世～）皿・釜・瓦質土器標跡・鉢・火鉢・輸入青磁碗・國產陶器標（唐 津）、平瓦・丸瓦・釘・鐵片・鐵付・漆付不明製品、燒土	H2
69			S-95 に解属		土師器（中世～）皿・瓦質土器標跡・甕・平瓦	
70	SK070	淡褐色砂	土坑	78 → 76 → 70 → 72	土師器（中世～）皿・釜・瓦器碗・瓦質土器標跡・鉢・火鉢・土質・輸入青磁碗・盤、 輸入白磁碗・輸入付付・國產青磁碗・國產陶器標・火鉢（信楽）・鐵・甕（備前）・ 鐵鉢（備前）、鐵石・石瓢・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・磚・鐵・鐵口・武州・埴輪・鐵片	I・J3
71	SD071		溝		土師器（中世～）皿・釜・須恵器（古代）杯・須恵器（中世～）甕・瓦質土器標跡・鉢・ 釜・火鉢・鐵片・輸入白磁碗・國產陶器標・平瓦・收縮・鐵口・鐵片・鐵片・鐵片	G2・3
72			溝		土師器（中世～）皿・須恵器（中世～）甕・瓦質土器標跡・國產陶器標・軒平瓦・ 丸瓦・鐵口	I2・3
73		土坑			土師器（中世～）皿・須恵器（中世～）甕・瓦質土器標跡・瓦器碗・瓦質土器標・ 瓦質土器火鉢・平瓦・丸瓦・鐵片	J・K3・4
74		土坑			土師器（中世～）皿・鍋片・丸瓦	H・I3
75	SB120a	ビット	建物 深さ 3cm		瓦質土器標・鐵口	H3
76		土坑	76 → 70		土師器（中世～）皿・釜・須恵器（古代）盤・瓦器碗・瓦質土器標跡・鉢・輸 入青磁碗・國產陶器標・甕（備前）・鐵鉢（丹波）・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鐵片・ 骨	J3
77		土坑	90 → 77 → 40		土師器（中世～）皿・釜・須恵器（中世～）鉢・瓦器碗・瓦質土器標・國產 陶器標片・平瓦・丸瓦	K3
78		ビット	78 → 76 → 70		土師器（中世～）皿・釜・瓦質土器標・瓦器碗	J3
79		ビット	深さ 3cm		土師器（中世～）皿・鍋片・軒平瓦・平瓦・丸瓦	I3
80	SX080	整地土			土師器（中世～）皿・釜・須恵器（古代）杯・須恵器（中世～）鉢（東播）・甕・ 瓦器碗・瓦質土器標・輸入青磁碗・輸入青白磁碗・國產陶器標・石鍋・軒平瓦・ 平瓦・丸瓦・甕・鐵口・鐵片・鐵片	J・K2・4
81		土坑	近世 炭化物大量に含む		土師器（中世～）皿・焰燒・瓦質土器標跡・鉢・土質・國產白磁碗・小杯・國 產付付・皿・國產陶器標（波津）・甕・鐵・鐵鉢（備前）・鐵片・鐵口・平瓦・丸瓦・ 殘瓦・不明木製品・鐵片・鐵・鐵	H・I3
82		土坑	深さ 10cm 82 → 81		平瓦	H3
83		ビット	深さ 10cm 83 → 81		土師器（中世～）皿・鍋片・平瓦	I3
84		ビット			土師器（中世～）皿・瓦質土器標跡・鐵片・國產陶器標・鐵片	I3

表 12 検出遺構および出土遺物一覧（4）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
85			ピット		土師器（中世～）皿	14
86			ピット		土師器（中世～）皿、瓦質土器破片	I・J3
87	SB136d		ピット 建物	土師器（中世～）皿・破片、国産陶器鉢、丸瓦	G・H3・4	
88	SB136e		ピット 建物	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）破片	14	
89	SB136f		ピット 建物	土師器（中世～）皿・破片、瓦質土器破片	J4	
90	SK090	土坑	土器大類段束	土師器（中世～）皿・釜・甕、須恵器（中世～）鉢（束腰）・甕・破片、瓦器碗・灰瓦、瓦質土器鉢、輸入白磁碗、国産陶器甕、平瓦・丸瓦、輪羽口・土馬、鉄斧、炭・埴輪・硝子	K3	
91	SB136c		ピット 建物	土師器（中世～）皿・釜・破片、瓦質土器皿	H3・4	
92	SK092	土坑	60→92	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・破片、瓦質土器破片・鉢・甕、輸入青磁盤、平瓦・丸瓦	F・G2	
93		土坑	93→40	土師器（中世～）皿	J4	
94		土坑	94→40・95	土師器（中世～）皿	H3	
95		落込み	段差の堆積土	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、黒色土器・類瓶、瓦器碗、国産陶器甕、平瓦・土製円板	H・E2～4	
96		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器細口、輸入青磁碗	H3	
97		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・破片	H3	
98	SB136b		ピット 建物	土師器（中世～）破片、瓦質土器細片	G3・4	
99	SB136a		ピット 建物	土師器（中世～）釜、瓦質土器盤、輸入青磁盤、輸入白磁盤片、国産陶器細片、平瓦・丸瓦	F3・4	
100	SK100	土坑 暗灰色土		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・破片、須恵器（中世～）甕、瓦質土器細片・鉢・釜・火鉢、輸入青磁碗・盤・輸入白磁碗、国産陶器甕（漁戸）、甕・搖籃（縦前）、鉢（漁戸）、破片（漁戸）、輸入青磁盤、平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、土製円板、瓦片、埴輪・貝殻	F～14	
				瓦質土器盤・甕・火鉢、輸入染付皿、国産陶器碗（漁戸）・甕（縦前）、壺・破片、平瓦・丸瓦、瓦片		
101			ピット	土師器（中世～）皿、須恵器（古代）破片	J4	
102		井戸	100→102	土師器（中世～）皿・釜・火鉢、瓦質土器破片・鉢片、輸入青磁碗、国産染付皿、国産陶器皿・甕・蓋、瓦平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、瓦片	G3・4	
103		土坑		土師器（中世～）皿・釜、瓦質土器盤・鉢・甕、国産青磁碗、国産白磁細片、国産染付碗・皿、国産陶器碗（漁戸）・甕（漁戸）・貝殻、石器・軒平瓦・瓦片・丸瓦、輪羽口・土馬、瓦石、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦	F・G3	
104		溝?	104→60	土師器（中世～）甕・釜・蓋、須恵器（古代）杯、須恵器（中世～）甕、瓦器碗、瓦質土器盤・鉢・火鉢、輸入青磁碗、国産陶器盤（縦前）、軒丸瓦・平瓦・丸瓦、瓦片	G～E2	
105	SE105	黒泥土 暗灰色土 暗褐色土	井戸 105→103	土師器（中世～）皿・釜、須恵器（中世～）甕、瓦質土器盤・鉢・甕・火鉢・土器、国産染付碗、国産青磁碗（漁戸）・甕（漁戸）・貝殻（縦前）、石器・軒平瓦・瓦片・丸瓦、輪羽口・釘・轆・鉄斧、炭・骨		
				土師器（中世～）皿、瓦質碗、瓦質土器盤・鉢・甕・釜・火鉢・土器、輸入白磁碗・皿、国産陶器大口甕（漁戸）・皿（漁戸）・貝殻（縦前）、鉢（縦前・縦後）、急須、軒平瓦・平瓦・丸瓦、輪羽口・漆器碗、鉄鋤・不明鐵製品、瓦片	F3	
106			土坑 106→90→77 11世紀	土師器（中世～）皿	K3	
107		土坑		土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）杯・甕、瓦質土器盤片、平瓦、埴輪	G3・4	
108		土坑	深さ 5cm	土師器（中世～）皿・破片、須恵器（古代）杯・甕・蓋、瓦質土器盤片	G3	
109		ピット	深さ 1cm	土師器（中世～）皿	G3	
110	SK110	土坑	110→107→100	土師器（中世～）皿、瓦質碗、瓦質土器盤片、平瓦・丸瓦、鉄斧、埴輪	G4	
111		ピット	深さ 1cm	瓦細片、埴輪	G3	

表 13 検出遺構および出土遺物一覧 (5)

番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
112			ピット		土師器（中世～）皿・盆、須恵器（中世～）鉢（束縛）、黒色土器A類鉢、瓦質土器鉢、平瓦・丸瓦、埴輪	H4
113			溝		土師器（中世～）皿・盆、須恵器（中世～）罐片、瓦器鉢、瓦質土器罐片、輸入青磁鉢、輸入白磁鉢、軒平瓦・平瓦・丸瓦、埴輪	H4
114		土坑	107→114→100→102		平瓦、埴輪	G3
115		土坑	深さ 2cm		瓦質土器罐片	G3
116		黒褐色砂	ピット		土師器（中世～）皿・罐片、瓦質土器罐片	G3
117			ピット		土師器（中世～）罐片、須恵器（中世～）罐片、瓦罐片	G3
118		土坑	\$-60 黄色砂に切られる		土師器（中世～）皿・盆、須恵器（中世～）鉢（束縛）、瓦質土器皿・平瓦	F3
119		土坑	深さ 5cm		土師器（中世～）皿、瓦質土器罐片、輸入白磁皿、平瓦、埴輪	G3
120	SB120	建物	S-75・137・138			G・H2・3
121			ピット		土師器（中世～）皿	J4
122			ピット		土師器（中世～）罐片、石器	F4
123		土坑	第1 遷構面に解属		土師器（古代）皿、土師器（中世～）皿、須恵器（古代）甕	K3・4
124		土坑			土師器（中世～）皿・盆、須恵器（中世～）甕、瓦質土器罐片・盆・蓋・土器・罐片、須恵器罐片（束縛・潮流）、甕・甕（縦前・常滑）、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦、縄引口・跳溝	F4
125		土坑	深さ 3cm		土師器（中世～）皿・盆、瓦質土器鉢、軒平瓦・平瓦・丸瓦	F3・4
126			ピット		土師器（中世～）蓋・瓦器鉢、瓦質土器罐片・鉢・火鉢	F3・4
127		土坑	第2 遷構面		土師器（中世～）皿、平瓦・丸瓦	J・K2・3
128		土坑	128→123→80		土師器（古代）皿、瓦器鉢	K3・4
129		土坑	縫隙		土師器（中世～）罐片	K4
130		土坑	整地土で埋まる自然地形		土師器（中世～）皿、須恵器（古代）甕・蓋、黒色土器A類鉢、瓦器鉢、瓦器罐片、平瓦・丸瓦、釘	J・K3・4
131		辺堀 17 割	ピット			J・K3
132			ピット			K3
133			ピット			K3
134			ピット		土師器（中世～）皿	K3
135	SB135	建物	S-33・51・54・56			C・F3・4
136	SB136	建物	S-87・88・89・91・98・99			F・K3・4
137	SB120b	ピット	建物			G3
138	SB120c	ピット	建物			G2
整地層 1					土師器（中世～）皿、須恵器（古代）椀・杯、瓦器鉢	
整地層 1・2					土師器（中世～）皿・盆、須恵器（中世～）甕・壺、瓦器鉢、輸入青磁鉢、輸入白磁鉢、國產陶器罐片（縦前）、軒平瓦、瓦件、埴輪	
南西 明褐色砂					土師器（古代）高杯・土師器（中世）皿・盆、瓦質土器鉢、國產陶器鉢・甕・壺片（縦前）、平瓦・丸瓦	
暗褐色砂					国產有柄碗、國產陶器碗（唐津）、鉢	
6 割（西 黄白色シルト）					土師器（中世～）皿・盆・蓋、須恵器（中世～）鉢（束縛）、瓦質土器罐片・鉢・甕・蓋・土器、國產染付甕、輸入陶器蓋（タイ）、國產陶器鉢、皿（唐津）、甕・壺片（縦前）、平瓦・丸瓦、縄口	
西 暗褐色					土師器（中世～）皿、瓦質土器罐片、國產陶器甕・壺・鉢・火鉢、平瓦	
西 暗褐色シルト					土師器（中世～）皿・盆・蓋、瓦質土器鉢、國產陶器鉢（唐津）、甕・壺・鉢（縦前・横前）、平瓦・丸瓦	
暗褐色シルト					土師器（中世～）皿、瓦質土器鉢・火鉢、輸入青磁片、國產陶器甕・壺・丸瓦・平瓦・瓦件	
西 黑褐色シルト					土師器（中世～）皿・盆・蓋、瓦質土器鉢、國產陶器鉢（唐津）・甕・壺・鉢（縦前・横前）、平瓦・丸瓦	

表 14 検出遺構および出土遺物一覧（6）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
	南壁 3 刷				土師器（中世～）壺・釜、須恵器（中世～）鉢（束縛）、甕、瓦質土器鉢、輸入白磁瓶、国産陶器標本（焼成）、平瓦・丸瓦、輪引口	
	北壁 66 刷				土師器（中世～）罐片、須恵器（中世～）罐片、鐵製品刀	
	北壁 81 刷				土師器（中世～）壺・罐片、須恵器（中世～）罐片、瓦器碗、平瓦	
	東 遺構面直土 黒鄭土				土師器（中世～）壺・釜、須恵器（中世～）鉢（束縛）、瓦器碗、瓦質土器鉢、輸入青磁碗、国産陶器標本、平瓦・丸瓦	
	表土				土師器（中世～）壺・釜、須恵器（古代）壺・釜・瓶、須恵器（中世～）鉢（束縛）、甕・罐片、瓦器碗・皿、瓦質土器標本・鉢・火鉢・土質・磁片、輸入青磁碗、壺・瓶、輸入白磁瓶、国産白磁瓶片、輸入奈良碗、国産染付碗・壺・瓶・色絵皿、国産陶器碗・椀（焼成）、天目碗・皿（焼成）、甕・壺・瓶（焼成）、鐵製品（焼成）、鉢・瓶・壺・急須・罐片、石器、秆平瓦・秆丸瓦・平瓦・丸瓦、道具瓦、輪引口、甕・鐵滓、燒堀底、不明鉄製品・不明耐熱品・鋸前・鉄滓、炭・骨製箆・ブラン・埴輪	
	覆瓦				土師器（中世～）壺・釜、瓦質土器標本・鉢・罐片、輸入青磁碗、国産染付皿、国産陶器天日碗・甕・標跡（丹波）、平瓦・丸瓦、輪引口、鉢・鐵滓	
	垂樋掘削				土師器（中世～）壺、須恵器（古代）壺、須恵器（中世～）甕、瓦質土器鉢・釜、輸入白磁瓶、国産陶器碗（焼成）、甕、輪引口、鐵滓	
	造成土				土師器（中世～）壺・釜、瓦器碗、瓦質土器鉢、国産陶器碗（焼成）、甕	

写真図版



調査前風景



西区全景（東から）

図版 2



東区全景（西から）



東区全景（東から）



西区南壁土層断面（北から）

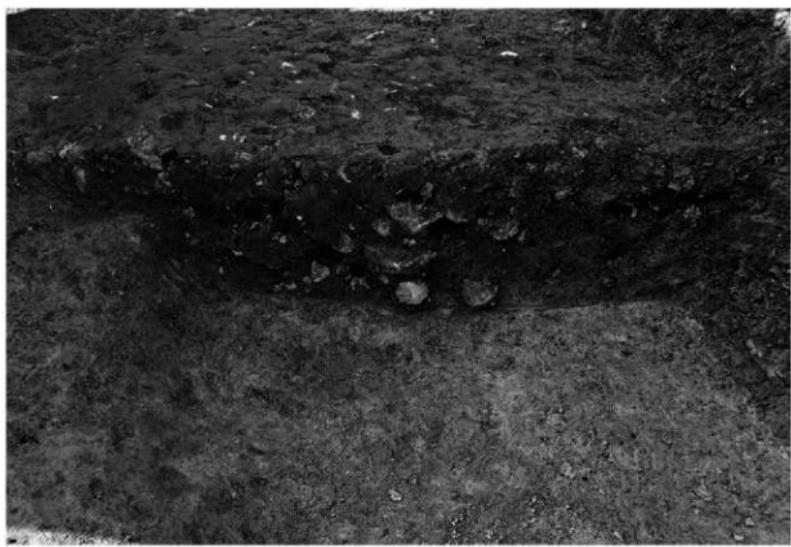


鉄刀（15）出土状況（南から）

図版 4



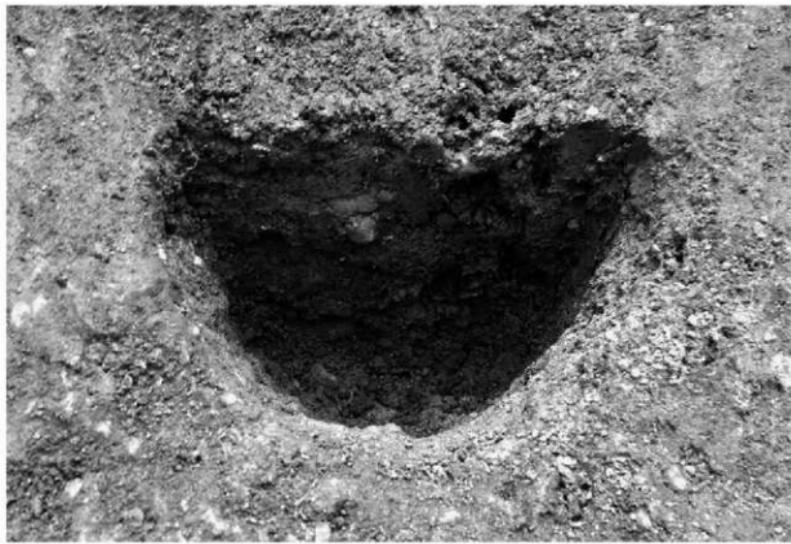
SD040 完掘状況（東から）



SK090 土層断面（南から）



SK090 完掘状況（東から）



SB135c 土層断面（西から）

図版 6



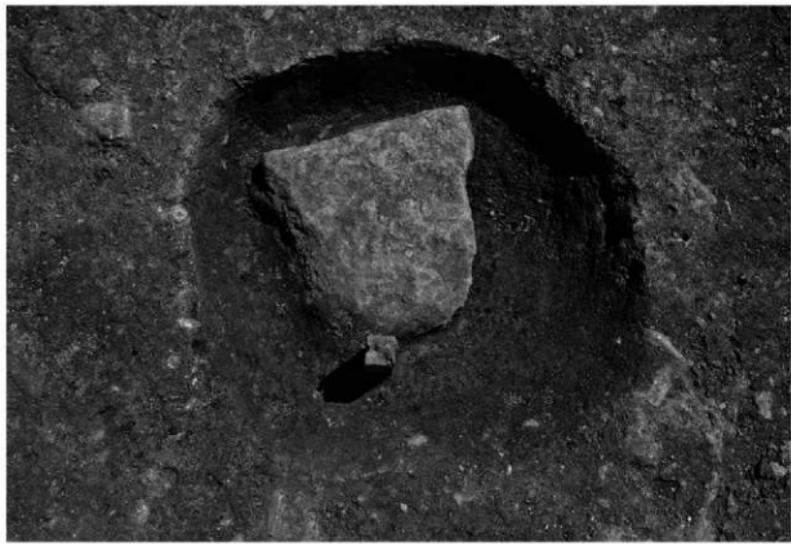
SB136a 土層断面（南から）



SB136b 土層断面（南から）



SB136c 磁石検出状況（南東から）



SB136d 磁石検出状況（北から）

図版 8



SD060 土層断面 a-a' (東から)



SD060 土層断面 b-b' (東から)



SE105 土層断面（南から）

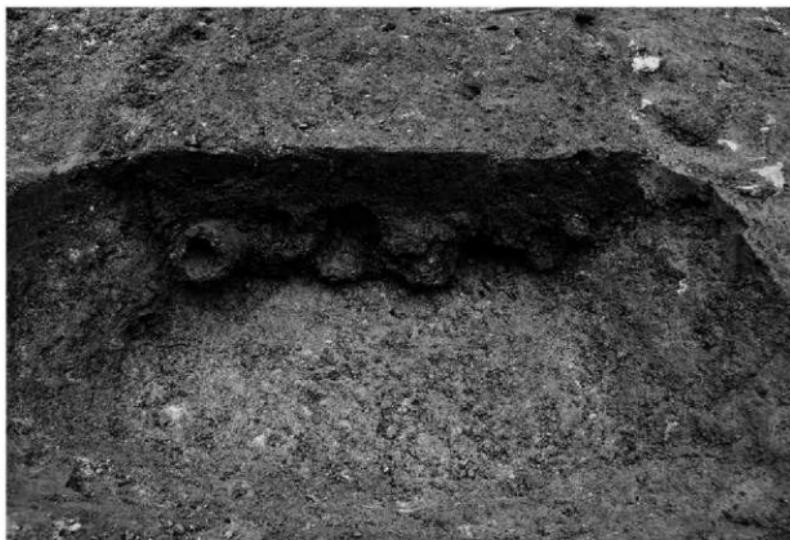


SE105 完掘状況（西から）

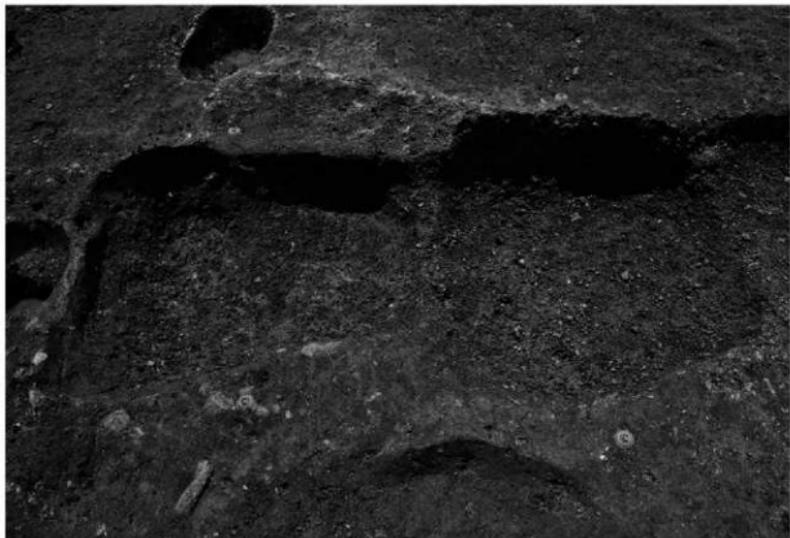
図版 10



SK005 土層断面（南から）



SK013 土層断面（南から）

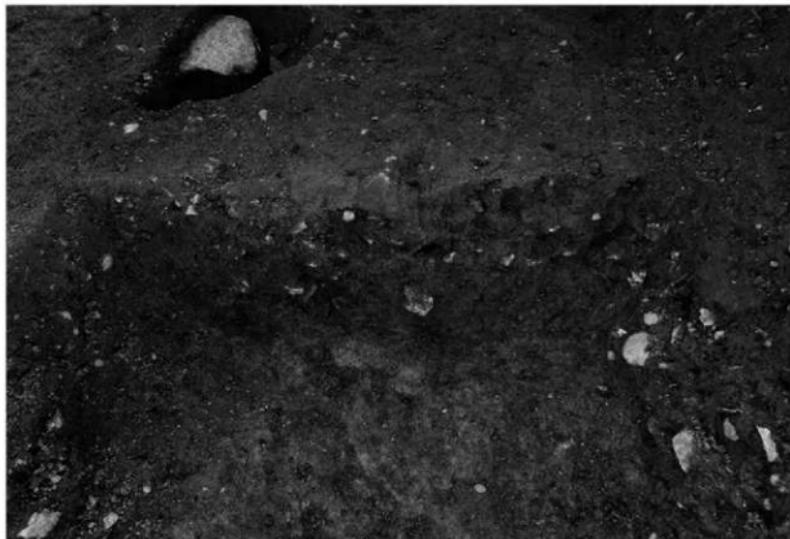


SK005・013 完掘状況（東から）



SK068 完掘状況（南から）

図版 12



SK100 土層断面（西から）



SK110 土層断面（北から）



SK020 完掘状況（南から）

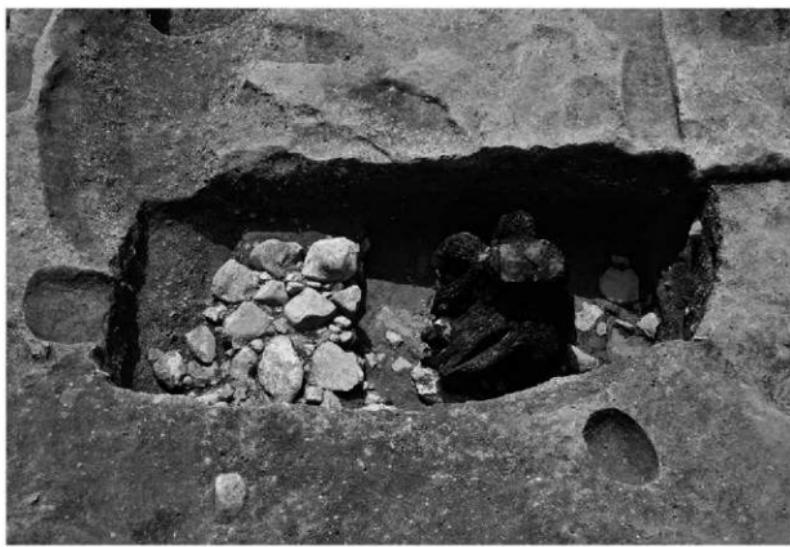


SK050 土層断面（南西から）

図版 14



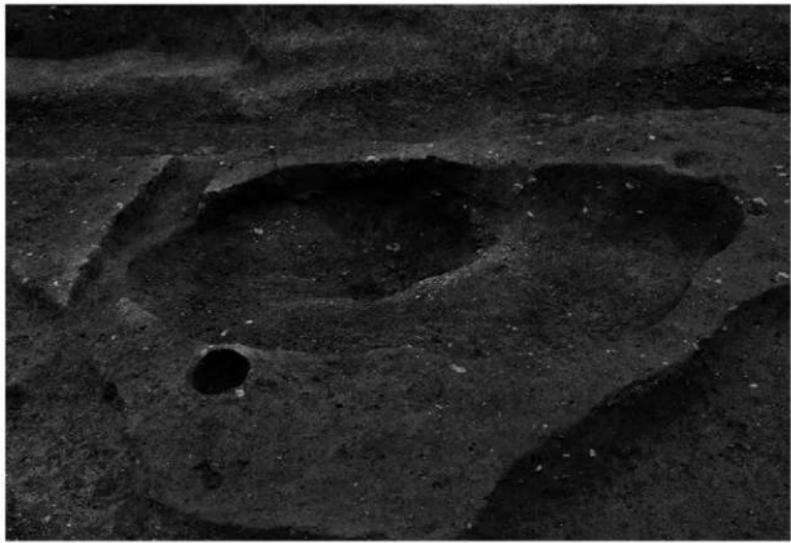
SK050 丸太材出土状況（北西から）



SK050 完掘状況（東から）



SK050 切り株除去後（南から）



SK070 完掘状況（南から）

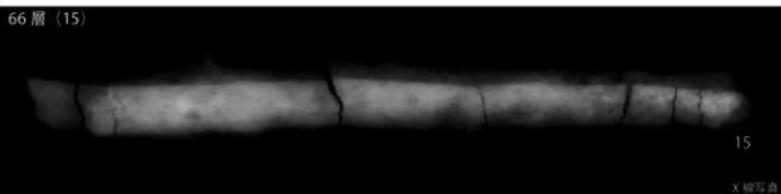
図版 16

SX080 (1 ~ 7・9・10・12・14)

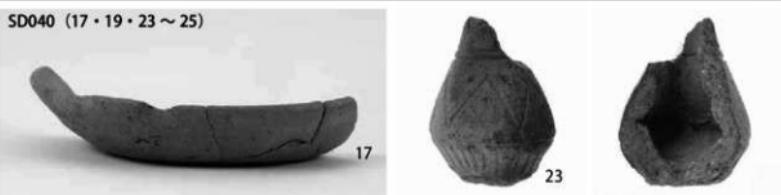


図版 17

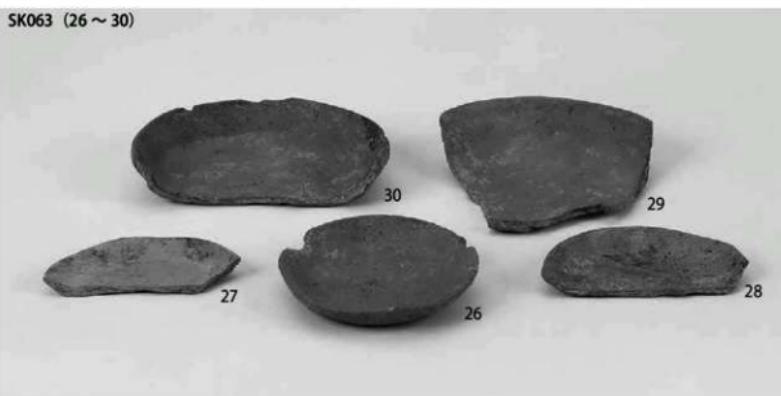
66 層 (15)



SD040 (17・19・23～25)

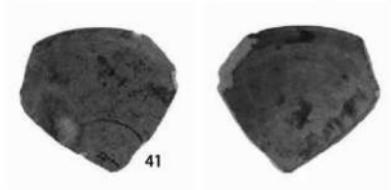


SK063 (26～30)

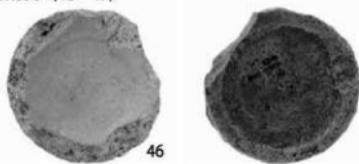


図版 18

SK090 (31・33・34・36～38・40・41)



SK090 (46・47)



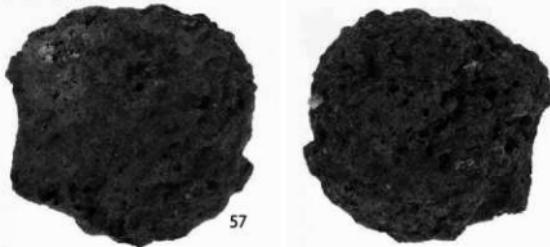
SB135 (51)



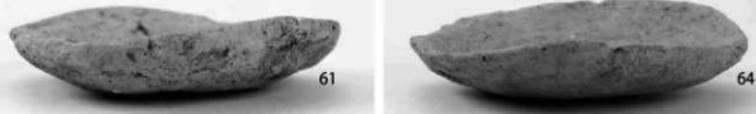
SB136 (55・56)



SP039 (57)



SD060 (61・64)



図版 20

SD060 (68・70～72・74・76・77・79・83・85・86)



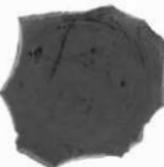
68



70



71



72



74



76



77



79



83



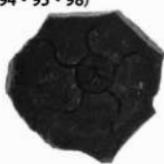
85



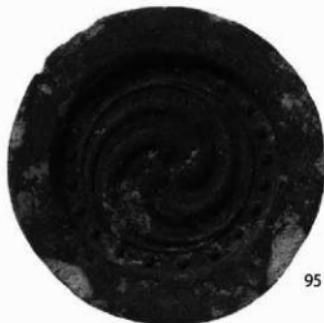
86



SD060 (87・88・90・91・94・95・98)



91



図版 22

SD060 (99 + 100 + 106 ~ 110)



99



100



106



109



107



108



110



SD060 (112)

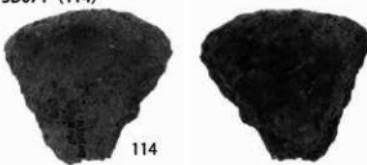


SE105 (115 • 117 • 119 • 121 • 122 • 125 • 126)



115

SD071 (114)



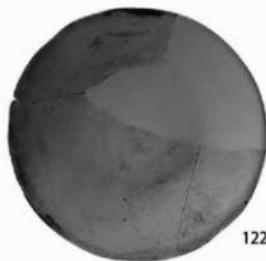
114



119



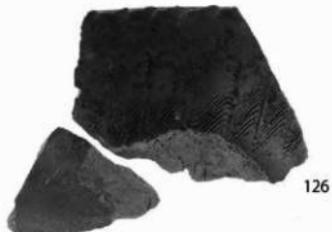
121



122



125



126



図版 24

SE105 (128 ~ 136 + 138 + 139)



128



129



130



131



132



133



134



135



136



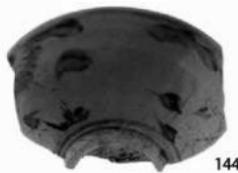
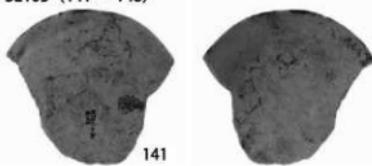
138



139

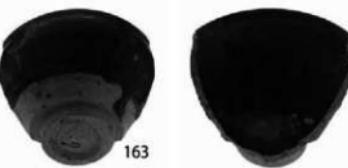
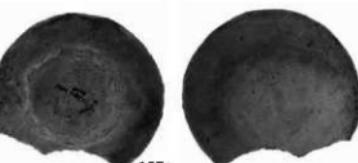
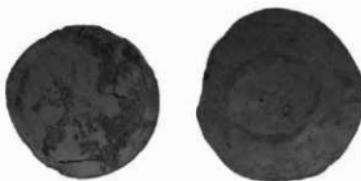


SE105 (141 ~ 148)

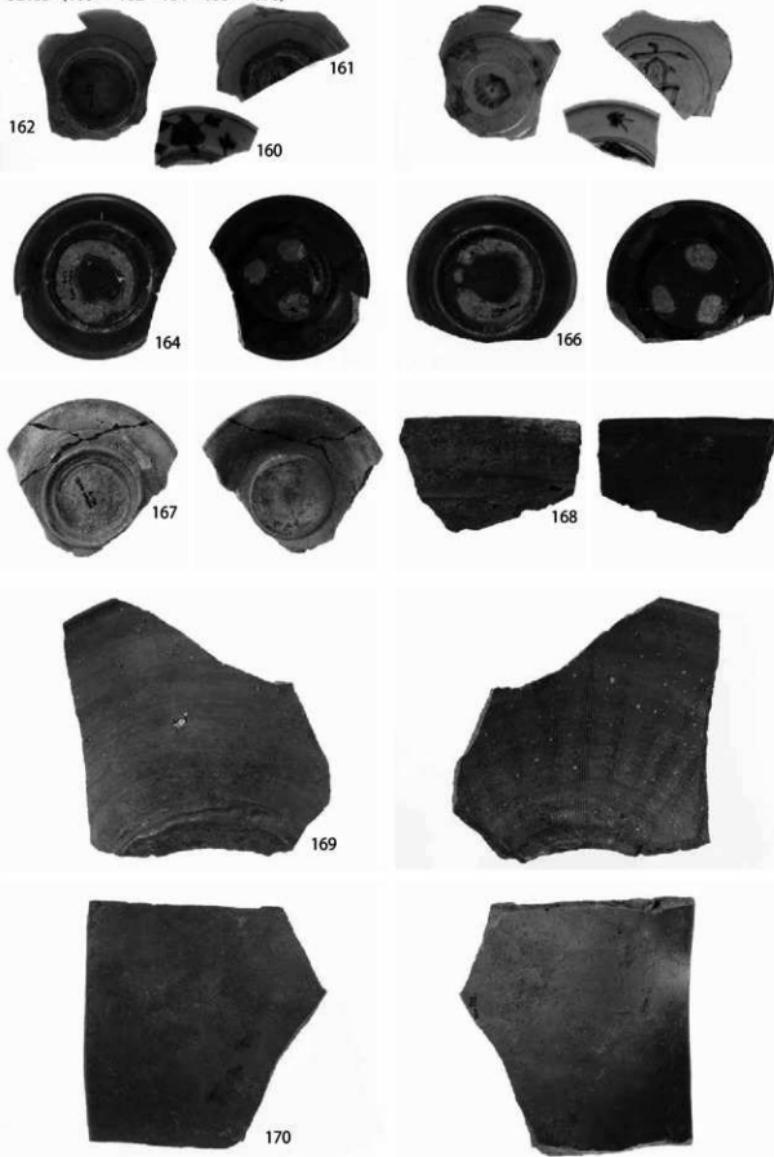


図版 26

SE105 (149・150・152～159・163)



SE105 (160 ~ 162 + 164 + 166 ~ 170)



図版 28

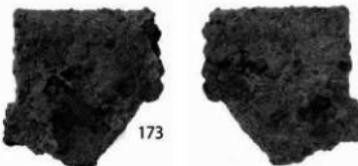
SE105 (171 ~ 173)



171



172



173

SK068 (175 ~ 178)



175



176



177



178

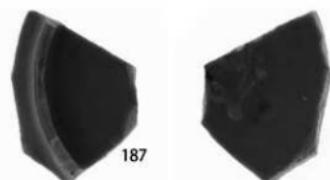
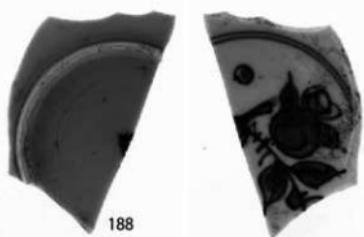
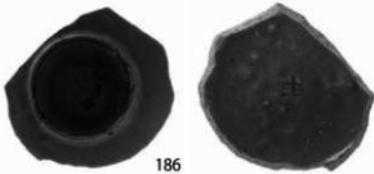
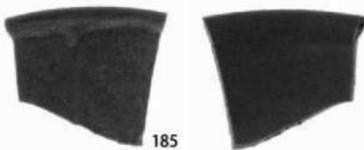


SK092 (179)



179

SK100 (180・182～190)



図版 30

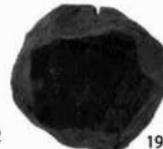
SK100 (191 ~ 195)



191



192



193

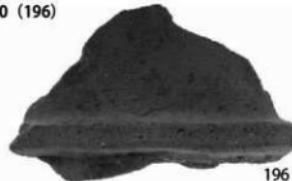


194



195

SK110 (196)



196



SK050 (197 ~ 199)



197



198



199



199



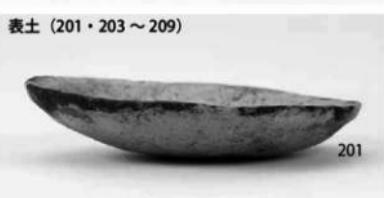
199

SK050 (200)



200

表土 (201・203～209)



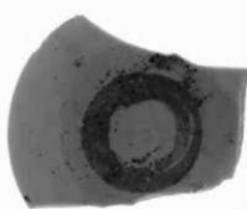
201



203



204



205



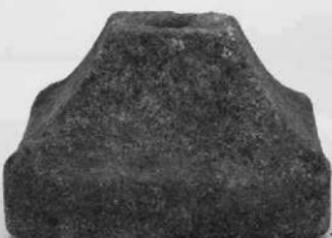
207



206



208



209

報告書抄録

平城京左京四条六坊八坪
奈良町遺跡（HJG11次）
—令和2年度発掘調査報告書—

2022.3.31

(発行・編集) 公益財団法人 元興寺文化財研究所
(印刷) 株式会社 明新社